

いきいきと除夜の闇より子供ごゑ  
 どちらかと云へばぬくとき除夜詣  
 年の火を見つめ無心に返る顔  
 年の火の火の粉のすいと梢まで  
 除夜詣妻の祈ぎ事長かりき  
 除夜詣飴玉なんぞ振る舞はれ  
 狛犬に年の火明り及びをり  
 年の火にかざすパパの手こどもの手  
 寺町の坂の上より除夜の鐘  
 除夜の闇行き交ふひとの香のほのと  
 年の火や松のみどりを浮き立たせ  
 除夜祈ぎ事皆の健康吾の健康  
 正月の寝床へ妻のこゑ懸り  
 寝床にて初刷鳴らし読みゐたり  
 節支度妻が寝床を抜け出して  
 鶏旦のラヂオの歯切れよかりけり  
 枕上ミラヂオ聞き初めよかりけり  
 初昔ラヂオ昭和に遡り  
 小つごもり風の韻きを聞き家居  
 小晦日風出て雲を吹き飛ばす  
 晦日（つごもり）の風出て空の煤払ひ  
 銀鼠に空の整ひ大旦  
 晦日の暈を退る遅日の日  
 数え日の日がよく入るサンルーム  
 十二月貧乏神が来るやうに  
 祖父の未だ居る世の焼餅鼠鳴き  
 大年の傾きかけし菜畑の日  
 正月は黄泉にてと又一人逝く  
 年毎に黄泉の正月旺んなり  
 座持ちよく福助顔の嘶初め  
 大根台地時かけて日の墜ち始め  
 唄ひ初めノンノコサイの尾鷲節  
 なまはげが立去り蓑の零れ屑  
 目を眩しみながら男の春著かな  
 晴れ着の子和気あいあいの初電車  
 鶏旦の卵のやうな雲一つ  
 裏白の日に反り返る三日かな  
 初旅がありて預金のおろし初め

ついと来る目白や朝も早き内  
 安房 保田 水仙 嵯峨山 江月  
 釣人又釣人に満つ初電車  
 フェリー接岸初声の飛び交へる中  
 乗初めの海明けそめて磯とんび  
 乗初めのフェリー追ひくる磯鷗  
 初声の飛び交へるなか出航す  
 乗初めの安房へフェリーの始動音  
 初声の鷗に交じる鳶のこゑ  
 鏡餅でんとフェリーの操舵室  
 船積みの初荷に恰き朝日かな  
 初荷積む船の行き交ふ東京湾  
 出船入船負へる朝日も初荷の内  
 金谷丸出でて三日の東京湾  
 乗初めのフェリーのうねり臍の浮く  
 舷側に鷗ゆらゆら乗初めす  
 航共に風の三日の磯かもめ  
 接岸のフェリーの上を初鴉  
 淑気立つ潮フェリーの先端部  
 船室のノブの輪飾り風に鳴り  
 霜旦の湾ゆるがせてフェリー発つ  
 夏みかんニコニコ三日の小学校  
 ゴルフアールと安房へ渡りて三日の風  
 接岸すフェリー埠頭の松飾り  
 山陰に風除け鷺の抛る雑木  
 暮れ出しの水仙畑の残り花  
 山畑の安房の花菜のぼつと咲き  
 ひつじの穂嚙りさうな安房日和  
 金柑がにこにこ二日の日中かな  
 水仙に傾き易き山田の日  
 横向きの椿の唇盗みたし  
 遊び田のうすらひつつく三日かな  
 水仙の奥の水仙日当たらず  
 三日の日載せて山路の藪柑子  
 水仙の剪り出し三日の風の中  
 水光ゲの中を移ろふ川千鳥  
 早咲きの花菜のちよこんちよこな  
 じつと見て光のかけら川千鳥

湧水のぼこぼこぼこと三日かな  
虚蟹年立つ沢の水底に  
初山入鶴ばたばた発たせては  
風倒の水仙枯篠山鳴れり  
鶴が三日の畑の梅の木に  
水仙に山の三日の日が強し  
竹林を抜けて三日の沢の音  
山間の水仙畑に午前の日  
水仙へ朝日雪崩るゝ段島  
篠騒のひねもす山の水仙畑  
水仙に風の納まる山の昼  
水仙の花正す風正面より  
水仙の真っ正面に廻りけり  
剪り出しの水仙畑の畦撓む  
風聞いて初山に息整ふる  
波打つて安房の三日の荒鋤田  
水仙の上の辛夷の芽が混んで  
ぴかぴかの野川三日の川面かな  
水仙に句帖をひらく男かな  
日向好きはた日陰好き水仙花  
榛の実の黒々垂るる水仙畑  
山の日の上へ上へと水仙畑  
水仙の山影に入る目暗がり  
山間の日のあるうちの水仙畑  
山影の水仙は未だ蒼がち  
どこか優しき膨らみぐあい桃冬芽  
土地っ子の水仙の坂スキップす  
水仙へ落とす三時の影法師  
鳥影のひらひら水仙畑越えて  
山間の水仙畑を日の退る  
山間のもう日の陰る水仙畑  
山畑の風のはたはた水仙花  
海鳴りに皺む岬の花菜の葉  
石積みの水仙畑鶴来る  
山路攀ぶ顔の高さに水仙花  
眩しとも水仙畑の大日向  
山腹の水仙畑へ里の犬  
水仙の首振る山の初風に  
櫟いっぽん水仙畑の真ん中に

水仙と梅の老木斜面畑  
ひつじ田のところどころに残る水  
水仙の段々畑日を頒ち  
篠騒に耳を傾け水仙花  
山畑の水仙畦にもびっしりと  
茎太の落葉溜りの水仙花  
水仙花深き落葉に秀づ花  
篠騒に打倒さるる水仙花  
水仙は今年早くてその見頃  
水仙を分けゆく山の風が見ゆ  
初商蕎麦屋の甕に水仙花  
船室に苞の花菜の香り頭つ  
水道を染むる夕日の花菜いろ  
花菜抱く人のちらほら金谷丸  
対岸の安房の金谷の三日の灯

町内の獅子舞あっけなかりけり  
若沖の雁を展観始めかな  
朝の内一雨ありて五日かな  
初暦通院の日を書き込みて  
地下街は何處へも通ず松の内  
春著の子携帯電話とにらめっこ  
雪雪と云へば雪降る五日かな  
辻が花富岳展観始めかな  
初神籤ちらと見たきり通り過ぐ  
餅花に財布の紐のゆるみがち  
氷の天馬空駈く駅前広場かな  
初旅の駄菓子詰め込む革靴  
雀らのけふは何処へ初景色  
餅花のいろより薄き頬をして  
繭玉に人出ぞろぞろ百貨店  
初空の明るみ増せば雀ら来  
初刷の山を玻璃越し新聞屋  
水浅く三日の野川鳴るところ  
旧正の髯を振り振り鯉近む  
正月の残りものにて晩酌す  
留守の間に苞の水仙開きぬし  
初旅の鼻風邪貰ひ戻りけり  
ながらへて居った彼の人歳旦吟  
むらぎもの据り処が歳旦吟  
これとても着水の裡鴨滑る  
バタバタと辺りかまはず鴨着水  
鴨を吹く風は東西南北（トウナンシャーペ  
イ）より  
突如翔（た）つ鴨は素っ頓狂な鳥  
初薬師濟みて檀家の親睦会  
常緑樹風にさゆらぐ初薬師  
池を吹く風に膨らむ浮寝鳥  
ぶきつちよな鴨の着水指さされ

塩原行

関東平野

一月の風跡見ゆる川面かな

日と風と水脈の煌めく川景色  
鳥撒いて一月の川横たはる  
冬の川真一文字に鳥撒いて  
一月の日が射し込める川景色  
初景色出来過ぎ富士を遠ちに置き  
風強く一月の川痩せにけり  
郊外に出て一月の風の富士  
七草を明日に堤の草萌ゆる  
枯萱に磧のただっぴろき空  
三ヶ日村の釣堀大繁盛  
七福神巡りのバスが停まる寺  
関東平野奥まるところ初霞  
雪山の連なるところあれは信濃  
赤城山一っ年取る面構え  
初景色男体山を遠ちに置き  
笹鳴に男体山が近づきぬ  
林に雪田に雪村に残る雪  
校庭の雪踏み正月休み明け  
初霞一際山の混むところ  
枯萱のつんつん磧の初御空  
牧場の端青草覗くほかは雪

箒川

外湯までカリカリツルツル雪の道  
雪を来て筋と云ふ筋ゆるむ湯に  
露天湯の湯気も正月気分なる  
野天湯へ滑る雪道たどたと  
雪白のせきれい飛んで箒川  
露天湯へどぼんと入らねばこごえちまふ  
川端の湯小屋こんもり雪積みて  
雪原に何の若木かつんツンと  
箒川飽かず眺めて松納め  
雪被く河原石皆女性（によしよう）めき  
せきれいと判る尻尾の振りぐわい  
餅肌の雪にせきれい紛れけり  
せきれいか雪の川原をすつ飛んで  
足湯してせきれいの翔ぶ川原みる  
せきれいが素飛ぶ露天風呂の前  
雪道を鳴らし川原の露天湯へ

湯けむりの行方櫻の太幹へ  
露天湯を出でて一服笹鳴す  
川原湯へ誰が足跡雪の朝  
対岸の細枝に止まるみそさざい  
年立てる音も新たに箒川  
箒川挟み湯町の氷柱宿  
箒川鴨の滑りもなめらかに  
対岸の鴨の一群こちら見る  
草氷柱たうたうたらりと川流れ  
川鶉二羽正月の川遡る  
白せきれいとんと川原の雪醒まし  
顔擦って川原の雪気野天風呂  
かんばせに雪気したたか野天風呂  
湯ざめせぬやうな装（なり）して野天湯へ  
野天風呂晨（あさ）の雪気も何のその  
稜線の枯木細かく鼠の毛  
しづり雪山なす野天風呂の脇  
せきれいのつつついついと雪川原  
せきれいを発たす雪気をふふむ風  
せきれいの雪に掻き消ゆ一刹那  
上枝より雪を落として一羽発つ  
しづり雪おどろに朝の一立木  
松過ぎの勢ひ戻れる箒川  
箒川闇を走れる姫始め  
せきれいに明けて川原の空の瑠璃  
雀より少し機敏な目白来し  
雪残る山杉の濃枯木の淡  
人日の朝日に醒める雑木山  
正月の鴨寄り合へる箒川  
川滑る鴨も正月気分にて  
箒川正月気分の鴨上下  
野天湯へ氷ハリハリ踏みゆける  
人日の川端湯宿の灯が点る  
箒川べりの湯宿の初灯  
野天風呂雪気に五体晒しけり  
野天風呂雪気に首を晒しけり  
温泉街

象山と名づけん産毛なす枯木  
買初めのくりくり坊主てふ茶菓子  
年寄の雪掻き出湯のホースもて  
川に雪投げ込む正月休み明け  
枯木山謂はば巨きな針鼠  
松飾会津街道前にして  
雪道を転ばぬやうに両手振り  
売初の温泉まんじゅう湯気しゅっしゅ  
しづり雪どさりとどさりと饅頭屋  
正月の雪まみれなる盆栽棚  
雪だるま鼻先に見ゆサンルーム  
杉に射す朝日に雪が縮まりて  
櫟を雪のずるりと滑り落つ  
塩原は高尾の生地冬紅葉  
松とれて湯町に戻る川の音  
湯の里に遊ぶ正月湯三昧  
湯の町の明けて三日の川床鳴る  
雪まろげ男まさりの女の子  
日の照って二日の雪は解けずあり  
妙雲寺  
雪中の堂縁近く牡丹の木（ボク）  
杉っ葉が雪の高尾の墓所に落ち  
雪みちを二代目高尾の墓へつけ  
雪折れの杉っ葉蒼く高尾墓所  
雪載せて頭でつかち常夜燈  
塩原高尾辞世句 寒風にもろくもくつる紅  
葉かな あれば  
ゆきにさへ高尾ゆかりの冬紅葉  
冬紅葉散りて数葉雪のうへ  
振る返る高尾の墓は雪のなか  
宿  
山の湯に骨抜きとなる三ヶ日  
湯三味はたして鼻風邪心地かな  
暁の雲押し移る軒氷柱  
雪明りして岩風呂の岩の相  
七草の朝の湯けむり百変化  
旦旦の山の出湯に身のとろけ

湯三昧つひに貫へる鼻っ風邪  
初湯舟五体の透けて捨いろ  
人日の出湯（ゆ）に腫れものも温もりて  
雪旦の脱衣素早く山の出湯  
あらたまの年の躰に韻く出湯  
雪の宿暇つつぶしに夜更けの出湯（ゆ）  
山宿の大浴場の初霞  
捨よりいささか古りし肌を出湯（ゆ）に  
若者が湯壺へどんと出湯の波  
初湯殿ふぐりすうすうしたりけり  
うち眺む大浴場の初霞  
七草の朝湯あとから利いてくる  
七草の朝の配膳整然と  
ごった返す湯宿ロビーに厚着脱ぐ  
莫迦でかき湯宿ロビーの鏡餅  
一夜経し山に新雪露天風呂  
前山に薄日のさせる松納め  
宿泊簿記す傍ら鏡餅  
杉山にはつりと零るしづり雪  
松過ぎの隣の山に日移りて  
読初の下野新聞ロビーにて  
のほほんとうけむりの立つ山の春  
湯ぼてりの一息つける実南天  
雑煮などいただきしあと菓のむ  
何の図か判らぬものの初屏風  
元日の湯垢透く日のあら尊と  
熊のごと湯宿一ト間に籠りゐて  
人日の湯疲れの髭伸びにけり  
命伸ぶ湯をふんだんに初湯殿  
あらたまの年の源湯口かな  
人日の人のこゑして暁ケの出湯  
元日の腸温め朝の出湯  
暁闇の湯舟の片隅年を祝ぐ  
亀の子のやうに初湯に四肢伸ばす  
正面の雪山閉ざす宿障子  
よべの雪とどむ前山露天風呂  
夜気雪気覚悟の上の露天風呂  
昼蘭けて一人湯に居る二日かな  
岩風呂の岩の福相二日の湯

元日の朝湯や浴衣すっぱり脱ぐ  
とつつきに温泉宿の鏡餅  
時計鳴る温泉宿の日曜日  
のほほんど一人二日の露天湯に  
雪晴れの朝湯掛湯もそこそこに  
湯けむり会館  
暖房のよく利く宿の歌謡シヨウ  
年酒酌みやんや湯宿の歌謡シヨウ  
初芝居梅沢某の股旅もの  
幕開いて梅沢某の初芝居  
初芝居湯けむり会館にて開幕  
浴衣着に開幕を待つ初芝居  
駆け寄りておひねりわたす初芝居  
初芝居半ば朝湯が利いて来ぬ  
初芝居苦節何十年の顔  
雪つつく二日の雀温泉場  
舞初の湯けむり会館二百畳  
青年役者第二の梅沢めざす春  
結初も長年役者やりきし顔  
開幕は商家の一ト間初鏡  
開幕の舞台の袖の初衣桁

寒咲きの菜の花太平洋を背に  
花便りの映像寒咲き花菜かな  
木の葉髪身ぐるみ脱いで心電図  
年明けの診察体重先づ問はれ  
一月十日

総理またルビコン川を渡りし日  
初刷の腸広告ビラを除け  
初刷の山と積まれて新聞屋  
新聞店舗道に洩らす初明り  
初旅に爪切り持参耳搔きも  
歳旦吟書きとむ吾れは鉛筆派  
皆ちびし鉛筆削る三日かな  
ラジオ古り雑音交る初神楽  
持ちのよきラジオより洩れ三番叟

洋蘭展

蘭展へ軽き足取り銀座まで  
妃殿下の出品の蘭とつつきに  
蘭展の芳香舞ひ込むエレベーター  
蘭展の蘭の招きにあづかりぬ  
洋蘭の羽子のごとくに翔ぶ花よ  
洋蘭の種を明かさぬ咲かせ方  
洋蘭の一曲ありぬ展示花  
蘭展の客層如何にと見渡せる  
蘭展の客層もまた見ものなる  
奇天烈も奇天烈蘭の仲間とよ  
蘭展と云へどチャツカリ株も売る  
変り種が変り種生む蘭族よ  
場違ひのやうにおもへる蘭展に  
蘭展の蘭に對せる好き者よ  
蘭展に紛れ込んだるガサツ者  
序でに買ふ蘭を元氣にする薬  
洋蘭展鼻が華やぎ始めけり  
蝶ならぬ鼻が止まりぬカトレアに  
洋蘭のビギナー講座立ち聞きす  
パフィオペディラム  
洋蘭の舌かみさうな名前持ち  
洋蘭の称し難き名すらすら云ふ

洋蘭見る柄でもないと言いつつ見る  
蘭展のほとぼり覚ますアツサム茶  
蘭展出てふわふわ銀座歩きけり  
春シヨール銀座の風のにほふなり  
蘭展出で銀座通りの人となる  
初春の錦鯉売る百貨店  
新橋の鏡開の飲屋かな  
新橋の似たやうな路地松飾

腫れものも湯に温もりて三ケ日  
雪の上の朝の風道野天湯へ  
あれこれと考ふ暖房音のなか  
部屋巡り鏡開の餅集む  
香の物嚙めばまさしく冬の音  
煤の日を亀の正字の部首談義  
出湯の旅戻り頭を働かす  
出湯呆けの頭を使ひ初相場  
鏡開餅儼一つ生えぬ世の  
新聞の溜め読み初旅了へし妻  
長湯して頭にかかる初霞

金沢文庫海岸

どんど火にくべる注連など一括り  
磯馴れ松だいぶ離れてとんどの火  
冬の波松ぼっくりをうち上げぬ  
冬麗の渚に拾ふ松ぼっくり  
松ぼっくり浮きつ沈みつ冬の潮  
冬波に追いつかれたる女の子  
左義長の女竹こゑ挙ぐほむら中  
左義長の風向きをみて火付け方  
左義長に火付け男の進み出て  
左義長の灰の降り立つ砂のうへ  
左義長に少し遅れて注連持ち来  
とんど火の最初パチパチやがてバン  
左義長の灰のとんびが空を舞ふ  
左義長の灰にけむりに髪押さえ  
左義長の舞ふ灰鳶とも鴉とも  
左義長の遠巻きの輪が狭まりぬ  
きな臭き世の煤臭きとんどかな

きな臭き世の左義長の太ほむら  
左義長の爆せて松・竹・檜の音  
左義長の灰の降る降るホースにも  
左義長の火疲れといふ面持ちす  
左義長の灰は鴉となりて翔け  
左義長の火の粉浴びせぬ磯馴れ松  
左義長の三（み）柱ずんと間合よき

左傾してそのまゝ落下奴風  
凧上げの子の渚まで一目散  
たるみ来る字凧の糸を叱りけり  
風向きはこつちの方と凧を寄す  
凧上げの下手も上手も先づ走る  
立て直し利かなくなりて凧落下  
凧（いかのぼり）磯のとんびに背を見られ  
凧遂に風向きとらえたる  
凧紙片ばら撒くやうにかな  
凧平衡感覚使ひけり

いきかすやうにグと引く凧の糸  
凧上げす先づは駆け出すところより  
凧の尾のながながしきを誇りとす  
凧とんびも居れば奴も居  
砂浜に落ちて砂囃む奴風

みそさざい寝床ばなれも潔く  
雪景色ちらちら動く岸の鳥  
等伯の屏風続きの雪の松  
心臓をいたはり入る初湯舟  
皆々の健やかなれと年酒の座  
心臓の健やかなれと年の酒  
満開の梅もあらむに降り始む  
掃初之音もたをやか箒川  
はてしなき雪の積にせきれい来  
初湯舟湯口近くに身を沈め  
ほうと息大きくついて初湯舟  
往生も斯くやと二日の湯に浮ける  
雪雫額にびしゃりとあふぐ杉  
雪の中くびれ膨れて箒川  
湯上がりのおぐりのあたり初霞

湯けむりをほむらのごとく初鏡  
雪しづる音のとてつもなき夜半  
衣ずれの音のするりと初湯かな  
大地より湯の湧く鼓動はこべ草  
還暦越えおっとり入る初湯かな  
軒氷柱どたと落ちて総毛立つ  
川端を雪後のせきれい突つ走る  
身構へてその前通る氷柱宿  
川音の氷柱に韻く野天風呂  
雪冷えの手もて出湯を均しけり  
炬燵一つ真ん中に置く間取かな  
初湯舟長居の客のごとく居り  
隆々の鬼の金棒軒氷柱  
雪降れば湯気倍にして饅頭屋  
この女（ひと）の何と目敏き露の臺  
北鎌倉梅のさかりは未だ未ださき  
湯槽にも輪飾のある温泉場  
喪に服す間に梅は満開に

野天風呂雪前にして入る気失せ  
桃島の枯枝の少しづゝ違ふ  
梅の他何にもなくて駆込寺  
ありあわせのものを引っかけ探梅行  
山茶萸の日向臭きを風払ひ  
俳諧の道の狭まる冬すみれ  
助っ人に山の快晴雪おろす  
数え日の無聊疲れを何とせう  
根雪道ここで転（こ）けたら百年目  
温泉場の雪掻き根雪ひっぺがし  
段差また段差根雪の温泉場  
湯壺より雪山をみる酔ごち  
白鷺に鈍き光を返す川  
野天風呂山は雪被て機嫌よし  
雪斑れ行儀の悪き山となる  
初座敷正座に飽きて横坐り  
便りあり  
同僚の第一線を退く真冬  
同僚のまだまだ頑張るやつにも冬  
雪の日の眠気もよほす昼の出湯  
湯の里にかけもちもして初芝居

岸の鴨こつちの方を見てをりぬ  
一ト雪も二夕雪もある出湯の里  
雪山に胸張る朝の露天風呂  
深雪晴れ旅もたうたう終りけり  
きっかけは向うの岸のしづり雪  
軒氷柱よべの底冷えありのまゝ  
初雀湯疲れの昼長うせり  
飯の湯気二日の杓文字濡らしけり  
冬場越す分の炭だけ焼くといふ  
箒川とある岸边に鴨屯ろ  
人日の人慕ひくる岸の鴨  
見るべきは三浦屋高尾の冬紅葉  
元日の鴨数えをり川原端  
初芝居思はず人を笑はず芸  
初芝居板東太郎を前にして  
切れ悪き吾が小便や隙間風  
せきれいの雪の磧を飛ぶ勢い  
出湯三味雪に籠れる二人部屋  
山の出湯鼻風邪直す為に入る  
いつぼんの長睫毛撫で初鏡  
母  
八十の勝気と寒気年を越し  
定かなり得難きひとと枇杷の花  
伊予柑が希望のごとく店頭に  
風を読むヒマラヤの鶴初寢覚  
短日や孫が二階でパタパタす  
初孫にころり騙され初笑ひ  
聴診器こんどは背中初検診  
左義長の芯から爆ぜて湾夜明け  
ぎっくり腰  
ぎっくり腰こんな筈では寒戻り  
ぎっくり腰となりて神経冴え返る  
凍み厠ぎっくり腰の不甲斐なき  
護謨の木にぎっくり腰の愚痴零す  
きさらぎの暴君にしてぎっくり腰  
きさらぎの月面歩行（ムーンウォーク）の  
ぎっくり腰

こらへる噫怖しぎっくり腰  
目白来てぎっくり腰の視野に入る  
ぎっくり腰に効きそなポパイのほうれんそ  
う  
ぎっくり腰直さんための蒔蓀草  
ぎっくり腰背らより浴ぶ遅日の日  
シャツ脱げば浮遊せる塵ぎっくり腰  
日脚伸ぶぎっくり腰の枕元  
ぎっくり腰横になっても縦になっても  
海月のごと厠に起てるぎっくり腰  
ぎっくり腰暖房音を聞いてゐる  
ぎっくり腰毛布剥ぐにもひとつもがき  
ぎっくり腰キツと時計の長針鳴る  
弾み来る朝の目白ぎっくり腰  
バネの利く腰持つ目白ぎっくり腰  
ぎっくり腰咳くにも曾呂利新左衛門  
筋のつる初泣笑ひぎっくり腰  
正月からとんだ目に遭ふぎっくり腰  
ぎっくり腰感極まらば嘔らん  
ぎっくり腰煙草の煙の疑問符に  
袖通す他なき冬着ぎっくり腰  
冴え返るものに神経ぎっくり腰  
ぎっくり腰一日唸れば日が伸びて  
ぎっくり腰遅日の電話鳴らせおく  
呻くこと深傷の虎やぎっくり腰  
鍋焼鯉鮓啜り損ねしぎっくり腰  
ぎっくり腰直す薬よ爛つけよ  
シツプして怨敵退散ぎっくり腰  
人間は万物の長ぎっくり腰  
シツプして氷河期迎ふぎっくり腰  
類人猿歩行の始めぎっくり腰  
ぎっくり腰急襲ガチガチ歯を鳴らし  
ぎっくり腰けふ調子よくローズテイー  
旧正の妻を走らすぎっくり腰  
ぎっくり腰悪寒は鮑のやうにくる  
土竜打ならぬ一撃ぎっくり腰  
初場所を一人観戦ぎっくり腰  
腰痛に利く出湯（ゆ）があらば天竺まで  
ぎっくり腰竜の落し子めく歩行



狐憑き落ちたるごとくぎつくり腰

恵方より何かしでかす孫が来て  
 初湯舟布袋腹もて浮ぶべう  
 初湯殿手毬唄などよかるべく  
 元日のお池の鯉の夜明顔  
 孫並べゆきし小石に日永の日  
 初孫の勝気は誰似梅真白  
 孫に甘き婆（ばあば）やべったら漬よりも  
 引上げし孫の仕業や雛の向き  
 濡れ縁に小石並べる孫の春  
 おしめりに梅も何やらほつとして  
 外は寒雨ぎっくり腰は長っ尻  
 身を奔る寒の稲妻ぎっくり腰  
 冴ゆる身に亀裂入りしかぎっくり腰  
 腰痛の一撃脳天真っ白に  
 腰痛（こしいた）に経皮鎮痛消炎剤  
 気休めのシップ毎朝ぎっくり腰  
 正月のめでたき蜜柑配り了へ  
 古蒲団ぎっくり腰の言ひなりに  
 そろそろと暖房入れにぎっくり腰  
 ぎくしゃくのぎっくり腰を懼れ咳く  
 ぎっくり腰しゃっくり腰とも寒夜歩す  
 寒雷にぎっくり腰の及び腰  
 暖房がどかんと入れりぎっくり腰  
 腰痛のいつまで長居寒最中  
 腰痛に寝込みてインフルエンザ季  
 苺つぶすへっぴり腰の腰痛持  
 甘酒にぎっくり腰の腰温め  
 ぎっくり腰顔をしかめて梅を見る  
 あべこべに冬の肌着に袖通す  
 二階堂春思はする風が吹き  
 二階堂とあるばかりにうめの花  
 腰痛の抜けず日差しは春めけど  
 春一番もどきの風の吹く街へ  
 梅を見る室内のよりあたたかく  
 番にて訪ねて来たかみそさざい  
 ぎっくり腰けろりと治り寒日和  
 腰痛の抜けたる梅の三分咲  
 雨のうへ雷もあり寅彦忌

萬物光輝を生ず最中に梅燻ず  
 藁しべを透く日の斜寒ぼたん  
 緩む日にうなづき合うてハケの梅  
 林中を風吹き通す梅は未だ  
 金柑のありたけ点る観音堂  
 椰子植うる冬の館のトロピカル  
 菜の花の丘より風のやうな唄  
 かまくらに腰を据えれば狸めき  
 湯の町の川へばしゃばしゃ雪おろし  
 椅子に倦む頃ほひ鴉のつつけんどん  
 日向より日陰凜々しき谷の梅  
 上空を風のひゅうひゅう寒ぼたん  
 こぶしの芽羽音交りの風吹いて  
 日永の公園鳩とよちよち歩き子  
 初場所の十日目にして荒れ相撲  
 牡丹の芽日毎に真っ赤その内降る  
 ふらここの下の余寒の水たまり  
 青空の半分映る芹の水  
 佐保姫の使者弾みくる枝伝ひ  
 残寒の日差しを返すさるすべり  
 寒林に朝日割り込む月曜日  
 外出気分沸々梅など咲き出して  
 伊予柑のごろりと春を振り出せる  
 寒雀朝からもめ事ユリ並木  
 ふくら雀きのふと同じ顔ぶれか  
 暖房音せはしく朝が始まりぬ  
 冴え冴えと一鳥朝の上枝占む  
 はこべらをリハビリの歩の遅々と過ぐ  
 ひゅうひゅうと青空鳴れり辛夷の芽  
 ケバのあるこれ何だろう冬木の芽  
 春めきし桜の幹の色艶云ふ  
 相国寺・瑞泉寺・初天神など  
 竹林を洩る日そこそこ寒土用  
 寒椿黙って人とすれ違ふ  
 竹林を乾びて出づる寒土用  
 三椏のまだまだこれから太る毬  
 替る替る臘梅に鼻持ってゆきぬ  
 この谷戸に幾刻日の入る藪椿

梅咲き出す南面は日の差す方  
咲くときは一緒と梅の賑やか好き  
観梅や帽子被らぬ若人と  
寒鯉の吾仰がんと上向けり  
鼻を吹く風の切っ先探梅行  
眼鏡はて中華蕎麦屋に忘れ来し  
店頭に出でて幾色サイネリア  
ユリの木の剪定すすむ寒日和  
枯蔓の化け物めくが這ひつくばり  
梅蕾むところまさしく厚日向  
探梅の先づ紅梅の一本目  
鎌倉の探梅兼ねて足ならし  
早梅いっぽん杉本寺の磴ほとり  
校庭の水仙しんと授業中  
迷ひ道ぱったり出会ふ迎春花  
燒藪の温みも英字新聞越し  
枯木明り差して平山画伯の庭  
観梅の夫婦の会話筒抜けに  
水仙に紅梅に人瑞泉寺  
羊歯しんと山水しんと瑞泉寺  
方代歌碑ここに実の無き青木の木  
老木の中の老木花をつけ  
冬ざくらのほとりひそひそ話せり  
目白来ぬ梅低ければ低く飛び  
紅梅に女近寄り遠ざかり  
水仙や手中にひらく写生帖  
梅が枝の跳ねて瓦に触れんとす  
三椏のやがては唸る蜂の巢状  
白梅のあたためたる一家言  
紅白の梅うち潜り瑞泉寺  
中空に長けて飄々梅老い木  
膝笑うまで鎌倉を探梅行  
がんばって歩くといふこと梅日和  
海棠にまみえて安国論寺の安  
初天神朱塗りの木製常夜灯  
磴十段ばかりのぼりて初天神  
初天神日和といふがりにけり  
鎌倉のいつもこの道初天神  
頼朝の墓料峭の磴のうへ

丸池に動かぬ杭と動く鴨  
日脚伸ぶ源平池に日がいつぱい  
梅眩しく立木眩しく瑞泉寺  
もくれんの銀の芽のケバ昼の月  
梅ことし早しと報ずさて何處へ  
浮寝鳥共々池の水眠る  
蝦蛄採舟東京湾の底を搔く  
梅の薬谷戸青空にハツハツと  
十賊不動  
山並みを横に走らせだるま市  
青空に銀嶺走るだるま市  
丹沢山系新らの雪置きだるま市  
だるま市行きの増発バスぎゆうぎゆう  
市へゆくバスに乗り込み達磨然  
初不動支那の雪割草も売る  
初不動玄米パンの湯気流れ  
金平糖彩もとりどり初不動  
苗木持つ人の行き交ふ初不動  
尺の鯉動かずなりぬ寒の底  
当節の女の売子だるま市  
ご鼻肩の客と見えたりだるま市  
年寄が年寄より買ふだるま市  
だるま市親爺未だ未だ健在よ  
市の日が眩し目無しの達磨にも  
祝儀値といふがありけりだるま市  
南天の箸を孫にもだるま市  
福招くこゑが飛び交ふだるま市  
初不動苞の盆梅鷲掴み  
苗木買ひ土が重き初不動  
万作の苗木飯店に持ち込めり  
万作や遠雪嶺を走らせぬ  
開運をあてこむ小槌だるま市  
福だるま膝を乗り出すだるま市  
達磨市だるまの魂入れよいよい  
一年があつという間に古達磨  
達磨は坐し売手は立ちてだるま市  
提げゆくは納め達磨の紙袋  
跡取りに代が替はりてだるま市

行き合ふて奇遇奇遇とだるま市  
青空に売れし達磨を高掲げ  
納め達磨大竹籠に積み溢れ

立春のプライドといふカクテルほす  
きさらぎの鋤焼きのダマ解きほぐす  
南面の日溜りぼやけた梅ばかり  
あられもなくなりて日向の梅の薬  
山梅を見通しのぼる寺の磴  
青空に枝を差し込める緑萼梅  
紅梅は池の向うや大廻り  
春立って花粉予報の出づ時分  
青空を目がけ白鳥翔つ十字  
白鳥の飛来足掛け十五年  
白鳥をかぞふる頭揺れみたり  
白鳥を指もて数ふ頭で数ふ  
白鳥のために屑菜を切り遣れり  
白鳥の懸命な貌着水まで  
朝共にして白鳥と村人と  
白鳥の雄雌の見分け話しもし  
白鳥が来るやうになり本埜村  
きのふ春立ったばかりの机の角  
花山菜黄肘掛け椅子のニス剥げて  
ファイギュアスケート跳ねて露西亜のスワン  
嬢  
ファイギュアスケート滑れば転けることもあ  
る  
庭木の冬芽沙羅・桃・杏と見て廻る  
流水を見にゆく話立ち消えに  
木々芽ぶき手当たり次第といふ言葉  
穴を出づ蟻の皆目見あたらず  
街明けて犬の散歩と寒雀  
意表つく孫来て恋猫追ひ立てぬ  
孫来ると聞きてそはそは紙ひひな  
初孫の何ぶん廻す雛の家  
花の旅予約  
四国路の花早ければ早日取り  
裸木の枝おろさるゝ歎かんや  
二月の陽振りあふぎ顔温めんと  
冬の金魚覗き込まれてぎよつとせり  
青空より枝おろされて春けやき  
小春日に首覗かせて池の亀

尾を振りて目白の機嫌梅の隙  
陽に叛く一花なき梅振りあほぐ  
一廻りくわりん裸木長けみたり  
下田稔さん  
龍の玉畏るゝ人の言生きて  
校庭に水仙しんと授業中  
祝儀値といふがありけり達磨市  
エレベータガール眩しやバレンタイン  
白梅に寒紅梅に白む雨  
節分の空賑はして雨降り来  
節分の豆ならぬ雨降って来ぬ  
節分の雨の水輪の幾瞬き  
老人の子供のによきと豆受く掌  
どろどろと青鬼参上節分会  
赤青の傘の上から鬼の豆  
男にはこつぱづかしき福は内  
立春の鼻尖に浴ぶ柔日差し  
犬ふぐり欠伸するかや日の盛り  
足許にみるみる殖ゆる犬ふぐり  
自転車を離して置ける犬ふぐり  
巨人吾の影がかかりぬ犬ふぐり  
犬ふぐりの小国脚もて犯しをり  
恋猫に放浪癖のつく時分  
一夜にして恋猫となるこゑの艶  
ご近所に恋猫のこゑ降って湧く  
恋猫のこゑの夜な夜な枕上ミ  
恋猫の欠伸噛みしめ膝ほとり  
恋猫のこゑのうろつく闇浅し  
恋猫のこゑの奥にもこゑありき  
薄闇にして恋猫のこゑ二三  
あだに大き正月過ぎの夏みかん  
老木の山菜黄の辺に住みなせり  
桃の下女李の淑女日表に  
蕾む桃日毎に軽さ得つつあり  
確定申告三極つとに白かりき  
青天下旧知の如く花に遭ふ  
満目の花の一角鳥掠め  
鳥のごと初花に倚り気も清ら  
山ざくから天よりいっぽん降り立ちぬ

初ざくら虫としじまを俱にせり  
鴨の上枝窺ふ初ざくら  
初ざくら一氣に咲ける馬鹿陽氣  
海岸はこんな陽気で初ざくら  
初ざくら暫く待てば鴨が来る  
初ざくら見下ろす鴨と睨めっこ  
花へ鴨飛來花間に身を容るゝ  
たつた一本当り籤めく山ざくら  
虫と鴨それに吾を容れ花の下  
初ざくらいやに大きな鳥が来て  
早咲きの花のいたづら心かな  
鴨の花懐にかしましや  
海岸にいっぱい早咲き桜かな  
平明な花の太枝の一文宇  
万作を前に餃子のげつぷかな  
花慎ましき接骨木は作男  
山菜萸の蒼ほんのり黄の載れり  
沈丁の匂ひ天氣は下り坂  
徒長枝に桃の蒼の相對ひ  
三極に日照時間伸びて来し  
五百椿さざめかし来る磯の風  
五百椿島の日を浴ぶ藪表  
佐保姫のうち過ぐ衣の音と聞け  
産土の枝おろされて立春過ぎ  
きさらぎの太幹搏ちて白む雨  
風鳴つて春の足踏み続く日々  
江ノ島の裸弁天東風吹けり  
一ト冬を越え来し沙羅の蝸牛  
ポット置く机の上の冬景色  
蟻穴を脱け出す大地親しけれ  
植込みの芽吹き始めて何やかや  
海の音聞こえし昔花はこべ  
雑談の合間に鴨の移りをり  
水面吹く風翡翠の通り道  
風向きが替りて鴨は池の北  
榛の花序淡く隣の果穂は濃く  
白無垢の胸張り鴨の雄は派手  
確定申告済ませ鴨でも見て帰らん  
確定申告済ませ鴨見て帰らん

遠近の鴨の羽搏ちにぬるむ水  
税務署の窓越しに見る鴨の池  
榛の木に紛るゝ鳥の薄茶いろ  
感心は対岸にあり春の鴨  
丸池や八方に向く春の鴨  
鴨羽搏つ音を重ねて水ぬるむ  
白鷺の二羽春水に脚浸けて  
枯萱の間より野鳥観察小屋  
万遍なく鴨をばら撒き春の池  
双蝶の如翔け鷺と鷺の影  
胸張つて視野に入りくる春の鴨  
春草にづかづかと倚り犬の鼻  
中洲あり鴨の砦といふべかり  
一つぼっかり何處となく春めく雲  
餌を漁りつゝ何となく春の水  
ふるふるど鴨羽繕へる春の水  
鷺の頭の右へ左へ春の水  
春水をぼたぼた垂らし鷺の嘴  
白鷺の一考つづく春の水  
一廻り長け裸木のしたたかさ  
三極咲き雲より軽き空ら頭  
万作植う水鉢に水たつぷりと  
俳諧の怪しげな毒振りまく蝦蟇  
熟れいちぢく畜生蠅のもう居らず  
宿木の何きき耳や晦日晴れ  
山妻と相合酒のお正月

おとなしき冬の金魚の水を替ふ  
箸置きの陶のひひなも飾りけり  
大まかにひひなの調度並べみぬ  
雛飾る調度揃えもい加減  
玄関にめりはりつけて雛飾る  
箱より箱もそと取り出し雛飾り  
初孫の言葉多彩に雛祭  
雛飾る妻は件の手付きして  
さしあたり雛の調度を並べみん  
並べ了ふ女雛男雛のたたずまひ  
雛飾り了へしと云ふか先づ拝見

勘違いして咲く桜に相違なき  
木から木へ花の廂を鴨渡り  
花の情一入なれば酒にせん  
花のしじま震はせ虫が鴨が  
花の鳥見上ぐる上目使ひかな  
花懐頭上に鴨来てみじろげず  
春水といふ輝きに不足なし  
水音もおろそかにせず春の水  
小さき段差ありて水鳴る春うたた  
春の水鳴るか鳴らぬか身を屈め  
接骨木の花とよそっけなかりけり  
古草の飄々として山田守る  
山茱萸の花は一気にこの陽気  
山茱萸の花を乾びし風震ひ  
花山茱萸夕日失うこと恐れ  
妻との旅すぐにまとまる土佐水木  
春寒に山茱萸ひるむ日なりけり  
恋の猫恨みがましきこゑ収め  
うちあふぐ天に夕月地に山茱萸  
夕月にさんしゅう霞み始めけり  
犬ふぐり浴びる旭のまあたらし  
恋すてふをみな猫の富士額  
さんさんと日が差し田螺の桃源郷

NHK BS放送  
阿波踊りをんな踊りの爪先立

面付き亦男踊りの芸の内  
高張のずうんと高く蜂須賀連  
沿道に汗を振りまき阿呆連  
綺麗どころ前面に立て浮世連  
男踊り顔面白く天水連  
阿呆連奴踊りにくつたくた  
阿波踊見物団扇はたはたと  
横縞に奴踊りの殿様連  
阿波女暴れ踊りのおかめ顔  
阿波踊ぞめき囃子に街湧きて  
たをやかに団扇捌きの阿波踊  
阿波踊返す女の手首よし  
ぞめき囃子踊りに流れつくりけり  
阿波男女(をとこおんな)踊りに目を配る  
阿波っ子の目抜きにかかるハイヤットサ  
旅人も速成講座にはか連  
飛び込んでもう止められぬ阿波踊  
星天に手先泳がせ阿波踊  
阿波女踊り手付きが身上よ  
をみな四肢斯く美しく阿波踊  
ちびっ子の雀踊りのハイヤットサ  
阿波女いやに張り切るのんき連  
水飴のやうに伸す腰阿波踊  
阿波っ子のとことん愉しむ高踊り  
をみな等の足許眩し阿波踊  
阿波踊り泥鰌すくひの要領で  
男踊り日本一の尻ばしより  
二本足蛸のごとくに阿波踊  
三味線の林立阿波の総踊り  
出つ尻に大取りつとむ阿呆連  
遠囃子レコードの世の阿波よしこの  
テレビ  
炭を焼く山が冷え込むまへの竈  
雲の下集落が見え炭を焼く  
炭熾しかんじき作り始まりぬ  
大囲炉裏いつか二人となり囲む  
遠き雷茱萸咲く頃の大井川

垣繕うことも根気の続くうち  
桃・万作咲かせとんとん拍子の春  
髪刈るを一日延し二月尽  
山菜萁の懐に日を取り込んで  
植替す三寒四温の四温の日  
万作の昼臆たげな氣息かな  
桃の枝によきと等しく荅付け  
万作の綻び初めぬ空鳴る日  
万作を顫はす風に目を細め  
庭に出てすぐ引つ込んでなまけ虫  
日向水木連翹の黄を眨めて  
白木蓮曇日晴天わかちなく  
耳たぶに岸辺の日差し水ぬるむ  
三月のぼかばか陽気蒲団干す  
犬ふぐり曇天あふぐ眼のくもり  
山菜萁の棚引くところへ目を戻し  
目を瞪る春は山菜萁の木ほとりより  
万作の昼素通りの郵便夫  
山菜萁と云へば和菓子 of 黄味しぐれ  
七曜の始めかたばみ花ひらく  
犬ふぐり屯す郵便受の下  
山菜萁の花期返信を溜めに溜め  
万作に次の微風が起つまで居  
戻れば山菜萁はるか遠退けり  
花さんしゅう俄曇りに鉦のいろ  
桃の節句手を引く孫に振り回され  
接骨木咲きぼつぼつ旅に出るもよき  
如月の曆に書き込む通院日  
書き込みのぼつぼつとある初曆  
きさらぎの曆を切つて落としけり  
佛存す穹より木五倍子下り次ぎぬ  
蟻穴を出ぶとき待ちに待ちみたり  
山菜萁に薄曇る空そらぞらし  
万作の臆病咲きも風鳴る日  
次から次虻来てつつじ熾んにす  
遠浅の海めく山菜萁霞めるは  
山椒の芽あはてふためく馬鹿陽気  
花了る山菜萁を風素通りす

のほほんとして山菜萁の花の昼  
日向水木花の帯びる白みかな  
山菜萁の咲き休まざる花の昼  
重き腰起たしむ庭の山菜萁咲き  
二ヶ月の書棚に旅の苞の石  
山菜萁のせつかち咲きも月始め  
垂れ花に虻ぶらさがる土佐水木  
三月に入ると聞くさへ気忙しく  
きさらぎの藁半紙折り句帖とす  
房州 千倉行 雛の日  
白間津・大川・千田・平磯・川口の花摘み  
部落を巡る

フェリー―船上往き  
佐保姫に逢はんと安房の海わたる  
船室の暖房ひよこの温みほど  
雲の端を朝日の染むる雛祭  
久里浜の白み染むそら春鷗  
四温なる横須賀海軍カレーパン  
春鷗がやがやフェリー―ターミナル  
フェリー―発つ空に鷗の雛祭  
春鷗すいと甲板上空に  
水道の風を捉へし春鷗  
雛の日のフェリー―ゆらりと安房へ発つ  
雛の日のうす紅帯びぬ鷗の胴  
雛の日の東京湾上紅帯ぶ雲  
海面を海鷗鷗は上空を  
フェリー―航くゆたゆたゆたに春の波  
花どきの安房のさよりの海渡る  
安房勝山  
四温の日ふんだんにして枇杷の里  
海ほとり房州枇杷は地の利得て  
ひつじ田のほとりで列車列車待つ  
浦賀水道菜種油のいろをして  
袋掛房州枇杷の白法師  
山腹の遠花菜まで眼が飛んで  
まんまるき春日房州枇杷の里



室のなか房州枇杷の袋掛  
三月のこゑ聞き枇杷の袋掛

花摘み部落

遊覧バス岬を巡る菜の花号  
はこべ咲き春の襖をあけにけり  
遠花菜畑海側山側に  
ストックの畑裾蛇口起ち上がる  
金魚草など摘みをれば午報鳴る  
花なづな畦の弾力蹠にす  
莫蔭卷きのストック運ぶ一輪車  
室咲きのストックの香に襲はれぬ  
村中（なか）を抜け出た途端金盞花  
花作りホース引き込むポピー畑  
ポピー摘む黄色いこゑが畑より  
金盞花畑にぬばたま黒鴉  
金盞花畑よりきしと鴉発つ  
鱸漁花菜曇りとなりにけり  
常ならぬ色に海変ふ矢車草  
日蓮の生国埋む金盞花  
ポピー摘む海と山との間の畑  
妹と姉の摘み溜むポピーの彩  
とつつきの花摘み畑のポピー摘む  
自嘲  
召さるゝにだいぶ間のあり金盞花  
金盞花神のお声は御空より  
金盞花ばかり咲く径足を棒  
釣宿の赤禪いろの春の幡  
花菜風途中で道は尽きてをり  
春を告ぐ喇叭水仙高らかに  
土地人に教はり花菜の間の径  
花摘みの田が起こされて店仕舞  
矢車草のうへの岬の空が鳴る  
いちめん花菜の沖の鉛色  
浜大根ひねもす風に颯らるる  
花菜村花菜村へとつづく道  
潮騒の強弱からすのゑんどうに  
岬巡りバスが遅れてなづなの辺  
菜の花号花摘み談義かしましや

金魚草花摘み日和となりにけり  
ポピー摘む人ぼつぼつと鳶の下  
露地咲きのストックの上波駆くる  
釣宿の裏の畑の金盞花  
搔き曇りそら豆の花盲ひたり  
朝の風花ゑんどうに耳うちす  
太平洋の光飛び込む花菜畑  
他人の摘むポピーが吾よりよくみえて

下田稔さんと嘗て白間津に遊んで  
潜水艦たまたま浮上花菜の沖  
菜の花街道脇の蘇鉄のずんぐりと  
沖合は油びかりに花菜どき  
花菜の沖鰯や釣れなん鯛釣れなん  
紅顔の未だ蕾なる金魚草  
春の岬六郎の雲泰治の海  
たんぼ道安房には安房の春の雲  
まんぼうの泳ぐ上総の國に來し  
頬に触る風も花菜のあたたかさ  
まんぼうの走り廻れる花菜の沖  
鳶群るる春の半島南下して  
ほっこりと春の篠山鳶を揚げ  
蚕の墓村の花菜を一望に  
時化雲の沖に垂れ込めアロエ咲く  
花菜の向うまんぼう回遊せる海か  
花菜の黄安房は照つても曇つても  
南房のもしやおもふ初ざくら  
芹を摘む親指安房の野の香り  
花摘みの気色勝れぬあらせいとう  
花ミモザ浜辺の春にさきんだち  
枝枝の幹の赤らむ雛祭  
雲間より安房の日覗く金盞花  
朝剪りのあらせいとうを莫蔭卷きに  
莫蔭をもてストックの香を束ねけり  
花摘みの鉢曇れる花の洗  
金盞花日差しは雲の合間より  
束売りのストック赤子抱ふかに  
花摘みのポピー泳げる磯畑  
あいにくと海は時化気味矢車草

ぬくとげに砂地畑の金魚草  
そら豆の花に篠騒ひねもす  
次の村ペンペン草の畦往けば  
風上ミにあらせいとうのにはふ村  
風落ちて風又起ちて花菜畑  
佛花として咲かず遅蒔き金盞花  
村中（なか）に入りて納まる鱒東風  
極楽鳥花泡立ち寄せる安房の波  
畑ひとりより出す花菜の宅急便  
甚兵衛の畑の花摘み金魚草  
花摘みの田の畦ペンペン草長けて  
五郎丸名乗る畑のポピー摘む  
あらせいとう剪りて何ぼの磯畑  
摘む花の波より白きあらせいとう  
根元よりストック剪る音シャキツとす  
岬の空鳴りて淋しき矢車草  
色どりの何處か控え目スターチス  
矢車草風出て潮色三変す  
沖時化て海豹変すスターチス  
花摘むなら唇いろのスターチス  
男来て三脚降ろす花菜畑  
めんどくささうに雛罌粟揺り揺られ  
雛罌粟はまつはる風に首左右  
芹の水女のそれと跳ぶこゑす  
バス混んであらせいとうを持ち替ふる  
遅れくるバスをペンペン草と待つ  
あらせいとう一束横たふ隣席に

#### 潮風王国

家苞の赤・黒あはびどれにせん  
ほうぼうの赤味さす肌春隣  
帆船模型出窓に春の喫茶店  
マンボウの刺身に安房の春を祝ぐ  
岩畳さざえが居さう海胆居さう  
春めくやまんぼうの絵の防波堤  
背黒いわし外房に春もたらせし  
まんぼうの肝の味噌和春近し

#### フェリー船帰り

あらせいとう連れ子のごとく船室に  
薄紅に鴉の胴染む春入日  
雛の日の早や灯を点す金谷丸  
船室の一席占めぬ花菜束  
船室に持ち込む苞のあらせいとう  
船室にあらせいとうの香の満てる  
フェリー下船あらせいとうを横抱きに  
安房の灯のほつりほつりと雛祭  
湾向う桃の節句の人家の灯

#### 自宅

家苞の露地花ストック日持ちよき  
日持ちよき安房金盞花仏壇に  
あらせいとう三日ばかりをかほる家

上野動物園

上野山めつきり春のベンチかな  
落花数片花懷を奔りけり  
虫穴を出づる日アンデパンダン展  
春はがやがや上野の山のおのぼりさん  
三寒のユアぬくぬくカフェテラス  
動物園園児の点呼うさぎの前  
柳青む水辺の上野動物園  
鉛筆持って花の上野の山あるき  
こんな日の三日続けば花吹雪  
桜の蕾ぼつんぼつんと上野山  
はくれんに烈風挑みかかる昼  
春一番上野の山を吹かれ降る  
手長猿背中搔く手に日脚伸ぶ  
ぶきつちよな手もて春草食ぶゴリラ  
春眠のゴリラの地下足袋めく蹠  
動物園巡り遅日の鳩に蹤き  
はくれんに一雨来るか空暗転  
鼻を鼻のごと見て佇てる  
鼻の馬耳東風と過ごす風  
鼻の貌春陰をつくりけり  
春眠の大手毬めく白ふくらふ  
日向ぼこするコンドルに成り下がり  
徘徊す虎は四温の毛皮被て  
糸柳池端あるく風太郎  
餃子リヤンコと注文とられ春の飯店  
猿山の猿のふらここ小猿漕ぐ  
蟻喰いのそはそは春の土を嗅ぎ  
ペリカンに動物園の水ぬるむ  
綿羊に春草与ふボランティア  
家鴨めく四温の園児の一連隊  
姿見の在らばとおもふ丹頂に  
湧き継ぎてアシカの為の春の水  
胡散臭さうに人見て蝦夷羆  
囃されて体重計る春の象  
手折り来し一枝コップに花盗人  
春風にびくりと動く犀の耳  
ダンディーな鴨の襟首水温む

水鳥のこゑよく徹る糸柳

岸に寄り岸を離れて春の鴨  
不忍のお池のぐるり水温む  
こうもり舎冬眠中の札掲げ  
自画像  
木の葉髪とつくりと見るヤマアラシ  
高齢の河馬三寒の日光浴  
かうもりの冬眠の禁破るやつ  
春水に河馬のうたた寝四六時中  
河馬の耳ふるると震ひ春の水  
春眠暁を覚えぬ風体この河馬も  
万作の小出しに咲ける臆病花  
桃の節句浮き浮きとして寢床起つ  
郁李の咲く其の日より夜毎の雨  
胡座かく蜥蜴はこうもり安のさま  
伊予柑の汝が生国に旅せんか  
花ミモザ羅馬軍團現れよ  
日に痴れし山茱萸日々の眺めとし  
春日消ゆオコジョのやうにすばしこく  
節句くる桃の大枝小枝かな  
ミモザ咲く空輝きて羅馬軍  
たまさかに故人思えと沈丁花  
沈丁花故人俄に甦り  
十日程早しと開花予報出づ  
猫猛る三月の闇浅きかな  
花さんしゅう朝日の中を虫の飛ぶ  
花さんしゅう朝日はみんな斜交ひに  
花山茱萸朝日束為しはすかひに  
デージーに如雨露の水の燦々と  
六郎の泰治の春の雲と濤  
大風の揺さぶるはくれん開きかけ  
啓蟄のぼこんと不二の佇つ遠野  
山茱萸の風に大揺れ抜ける空  
花の世の浅草六区のロック座あり  
月ヶ瀬梅林  
梅咲くと奈良北東部月ヶ瀬村  
大方は関西弁や溪の梅  
梅古庵前の溪咲きむめ見頃

極上の烏梅（うばい）を産す梅どころ

月ヶ瀬の梅林茲に在りと詩碑

料峭の溪谷刻む名張川

却つてや取り残されし梅の里

月ヶ瀬の梅在る故の山間部

月ヶ瀬の梅林の間瓦葺き

月ヶ瀬の山梅見んと顎を出し

布袋腹ほどの火鉢に梅見茶屋

梅溪の一目八景春の風

月ヶ瀬梅林鹿飛谷といふがあり

溜息の月ヶ瀬梅林九十九折

梅林の関西弁の中をゆく

月ヶ瀬の胸突き坂の緋紅梅

観梅路日陰の茶屋の早仕舞ひ

盆梅を手に取り見れば墨客めく

奈良晒鶯聞いて機休み

奈良晒三寒の糸織りかけに

梅溪を縫うて奈良よりバス来たる

甘酒の振舞い観梅期間中

月ヶ瀬梅林関東者の吾れを入れ

四温の日大和茶どころのんびり村

修二会

林間に見ゆ三寒の鹿の糞

南大門柱の間抜けお水取

寒つばき開山堂の闇に墜つ

修二会冷え一かたまりに大仏殿

三寒の大仏殿の石だたみ

馬酔木の森二月堂まで横這ひに

お水取馬酔木の森を突つ切りて

料峭の坂に息継ぐ東大寺

お水取ホカロン売り込む茶屋親爺

三寒の鹿の鼻先灯が点いて

修二会には少し間のあり鹿せんべい

三寒の日の入り際の若草山

修二会待つ薄闇に鹿もう見えぬ

暫し待つ吾等に修二会空に星

しんしんと鹿の鼻先修二会冷え

先づ以て除災招福お水取

大鐘を合図に点火お松明

登廊の段（きだ）染め上がるお松明

踏み付けに上堂松明照らす段（きだ）

板東者一人修二会に参じたり

三寒の今本行の二月堂

本行も半ばに入れり二月堂

薄墨に参籠宿舍お水取

修二会見物茶屋の親爺を先達に

二月堂行の迫れる鹿の夕

お松明初夜の梵鐘鳴り亘り

鹿の苑すばやく暮れて修二会冷

チョロ松明（まつ）が三本上がる二月堂

修二会そろそろ懐中時計取り出して

堂前の一本杉の修二会冷え

ぼつねんと修二会に間のある常夜灯

遠山に雲棚引かせお水取

お松明鐘を合図にチョロ松明（まつ）出

水取の諸注意を先づ奈良県警

二月堂火の入るを待つ懐手

二月堂薨の冷えて初夜の行

お水取腹拵えの入茶粥

修二会待つ人の頭（かしら）のぐらぐらと

陣取りて修二会の火の粉かぶる位置

チョロ松明（まつ）の一つ目上堂お水取

立錐の余地有りや無しお水取

修二会待つ足のぐらつく立ち疲れ

揺さぶりて春招来のお松明

水取の行のなむかんなむかんと

突つ走る火の粉童子（わらし）の修二会僧

御松明大振り奈良に春を招ぶ

昼夜落つ椿の寺に六時の行

修二会僧大松明をぶん廻し

お松明火の粉浄土に厄落とす

修二会冷え馬酔木の花と頰ちけり

行僧の気性あらはに御松明

お松明衆に瀧なす粗火の粉

堂上を韋駄天走り修二会僧  
修二会僧火をさし廻す堂舞台  
お水取障子明りの籠り堂  
お水取固唾を呑んで真夜の闇  
お松明括る青竹二十尺  
お松明火雫滴る赤浄土  
お水取奈良の寒さのぶり返し  
今夕の上堂松明上り初め  
お水取今や遅しと茶粥腹  
登廊を上堂松明松隠り  
行僧の気性そのまま御松明  
松明の今何本目お水取  
老若の目鼻ふすぼるお松明  
火の粉浴び修二会警護のおまわりさん  
お水取り肩の火の粉を払ひ呉れ  
担ぎ上ぐ上堂松明炎のゆらぎ  
お水取見遣る吾等は徒食衆  
お松明一ト撫でしたる奈良のそら  
招福の行は夜のものお水取  
水取の底冷え頬に背に  
見物衆掌を組み替えて修二会待つ  
徒食衆修二会の火の粉浴びにけり  
お水取おのづからなる耳朶の冷え  
タツタツと登廊攀づるお松明  
獅子頭大や廊馳す御松明  
灯といふ灯ことごと消えてお松明  
二月堂下に立ちんぼお水取  
上堂の今か今かとお水取  
お水取済みし夜空に星秀づ  
修二会果つ闇の何處かに花馬酔木  
而うして修二会の果ての奈良に春  
修二会果て戻りの空の大仏殿  
木の葉髪修二会の木灰止めをり  
水取の戻り松の根混める闇  
松明の上堂果てて空に星  
松明の火竜放てる奈良のそら

修二会 拾遺

お水取迫る寒さに奈良の町  
奈良人を震え上がらすお水取  
馬酔木咲く春をもたらすお水取  
境内の馬酔木に春は足早に  
お松明松の割木のめらめらと  
お松明瓜燈籠の下通る  
バリバリと上堂松明杉葉の香  
登廊の天井煽るお松明  
燃えかすに眉ふすぼれるお松明  
昼夜落つ良弁椿堂の脇  
行僧に朝の空気と五百椿  
満行に快樂無辺の紅椿  
春空に通ず階段あるごとし  
お水取近づく空を風の行（ぎょう）  
ゆめ違ふ勿れ馬酔木の花の刻  
水取といふ営みのとこしなへ  
水取は廻り燈籠今年もや  
修二会冷え過去帳読上げ聖武より  
営むといふこと切やお水取  
水取の声明春潮寄るごと  
お燈明椿の造花荘嚴す  
松明の上堂時を見計らひ  
水取の最中氷の割れる音  
背を焦がす人の重さのお松明  
お松明拝火教徒にあらねども  
お松明招福火の粉撒き散らし  
春しのぶ心馬酔木のはなの闇  
ただならぬ火の粉浄土の二月堂  
お水取走りの行は火のテンポ  
劫初の火劫初の水のお水取  
水取は風鳴る空のあなたなる  
松明の火竜放てる奈良のそら  
声つぶる僧も声明お水取  
くらやみのなかの相伝お水取  
天平の知恵の宝蔵お水取  
お水取矢来を焦がす粗火の粉

行僧の打って一丸お水取  
水取の御坊の所作は茶の点前  
薄墨の法界（ほっかい）に入るお水取  
千年の口伝相伝お水取  
くらやみの鹿も南無観お水取  
千年の口伝が生きてお水取  
修二会声明観音さまに体当たり  
行僧のいっしょうけんめいお水取  
お水取上堂松明天華とす  
火の行に法悦の笑みお水取  
お松明燃え殻落ちて火の牡丹  
お水取眼で見でなく耳で聴く  
堂奔る松明火鳥火竜とも  
参ず念年々強くお水取  
無駄な所作一つとて無くお水取  
水取りのあともう一つ春の旅  
水取りへ向ふ車中の大和かな  
徐々に暮る若草山と修二会寺  
大仏殿正面に佇つ春の鹿  
階段を登りつ降りつお水取  
花馬酔木奈良に来てゐること確か  
修二会待つ馬酔木の森の昼の暗  
影絵めく善男善女お松明  
水取りの奈良に宿とる馬酔木どき  
お水取待つ杜鹿の闇籠る  
奈良の町水取済みし落ち着きに  
修二会堂火の粉小法師（こぼし）が宙を舞  
ひ  
水取りのあとの夜空の星探す  
お水取過ぎて馬酔木に和む鹿  
籠松明顔を焦がしに東者  
上堂松明十も走りしあとの闇  
お松明待つ群衆の顔顔顔  
松明の炎明り上堂の気配みす  
仏都奈良馬酔木が咲けばお水取り  
お水取恋々として刻を待つ  
籠松明群衆の頭のたちゆらぎ  
水取の寒さを知らず軽はずみ

鉛色の竹垣日に日に日が伸びて  
家裏に風を生ましむ白木蓮  
日溜りの暫くつづく薺みち  
桃明り届くところで握り飯  
裏山の畑の桃の遅速かな  
こんなにも開いて桃のおもひ遂げ  
老人の大きな欠伸桃の花  
地図取り出し道確かむる涅槃の日  
強引に事を運べば涅槃吹  
決めた事決めた通りに諸葛菜  
野毛山下春ともなれば大道芸  
春はやにわにゆくこととするピカソ展  
長閑な昼煙草はラッキーストライク  
見てみれば緋桃の花の桃太郎  
満開に近きはくれん風足らず  
青天に開き切る桃ふくぶくし  
冬百日月観ることもあらざりき  
野に出でて春の到来確かむる  
室咲きの地味でみて興そるる花  
花了らぬ内の土佐路が待たる旅  
とどこおる処はつきり春の水  
生字引知らないことも目借時  
万作植う根方を強く足固め  
雛罌粟の苔の考え深げなる  
諸葛菜些事より他に無き老後  
昼の虻吸ひこまれゆく土佐水木  
白木蓮の今を盛りの勢みす  
後先を考えず咲く雛罌粟は  
玻璃戸開け鳥ごゑといふ春の音  
春の蠅四辺にはかに活気づく  
往来といふ土のみちはこべ咲く  
仏壇にあがる時来て小米花  
きのふけふあすと色増し桃のはな  
山菜萸にほとりす芽吹き具合見て  
春の水鳴る処探しあてにけり  
赤き電気ポットも春の姿かな  
二月尽く区切りの風と覚めて聞く  
郁李の満開となり満喫す  
三春の皮切りの風吹く日かな

待春の肱付き椅子の深さかな  
やや大き円を描きて春の蠅  
花桃の中より孫の面輪かな  
花桃の団欒のなか虻が来て  
咲き通す力の抜けて白もくれん  
安らぎの日々郁李の花ほどに  
持て余す時間連翹真つ盛り  
春めく日外出誘ふ程ならず  
きっかけを待ちぬしごとく鱒東風  
慶事などんとこの処諸葛菜  
郁李は見る人に見ゆそんな花  
郁李は目立たなくとも気になる花  
あんかうのいかつき貌の吊し切り  
吊し切り大鮫鱈のえらい貌  
あんかうの口稍開きお念仏  
親不知いかつき風に鱒魚  
あんかうは癖のなき魚箸伸ばす  
懐かしき麴麴のシベリア海開  
芽吹くもの芽吹かす春の正確さ  
落花嗅ぎ年寄る象の浜子さん  
燕駆く美空ひばりの像のうへ  
鯛焼に双耳立つる紙袋  
崎陽軒シューマイ娘の春の服  
東横線すれすれに咲く白もくれん  
クレール展  
線描あたたかクレールの構成魚の骨格  
花二度人生第二ステージの春  
動物慰霊碑日永の銅製（ブロンズ）リボン  
かけ  
不忍池見ゆ春のイソップ橋  
花を見る目配りにさへお人柄  
金沢文庫 称名寺  
やつと春やつと水黽頭てる池  
水鳥と云はるる時のいつか過ぎ  
岩より亀転げて春の水の音  
岩攀ずること試みて春の亀

境内に万作いっぽんとは淋し  
仁王撮る日永の口をむと結び  
反橋をのぼり詰めたる日永人  
日永の木日永の鳥が翔ちにけり  
木洩れ日の木陰を慕ひ二輪草  
近む程はくれむの生の色  
芹摘みにこゑを掛ければ佳い返事  
芹摘みの一人二人と目に入り来  
芹摘みの何處か難しさうな人  
芹摘みに女やたらに声掛けて  
一寸だけ春めく山の花きぶし  
花きぶし山間明るくしたりけり  
あやふやな道標佇てる春の山  
仏生会前の木ぶしの貧相な  
いい加減野蒜摘みには飽きたところ  
走り根におつとどっこい日永山  
落椿目線をずうつと上げにけり  
破れ傘は未だ落葉の嵩む中  
破れ傘生ふるも神の思し召し  
破れ傘こころ辺りとおもふ辺に  
破れ傘控え目といふ装（なり）は是  
破れ傘ことし見損じなかりけり  
含羞の一つの容破れ傘  
破れ傘の命名主はどなたぞ若し  
曰くありげな名を貰ひたる破れ傘  
幽霊のパンツマイムを破れ傘  
似たやうな径が又現れ山すみれ  
山椿散るや無音の声挙げて  
何鳥か椿のしじま破り発つ  
啓蟄の三脚を取り敢えず置く  
三脚を前に日永の考えごと  
被写体とするには動き過ぎる鴨  
蒲団叩く音境内に飴して



満目の山茱萸朝日に貫かれ  
 チューリップの双葉を双葉押し包み  
 雑木の上の空が鳴るなり破れ傘  
 鉢植の花を忘れし君子蘭  
 紫木蓮外出は曇らぬ内がよし  
 三椶の花の夜な夜な遊ぶ闇  
 性抜けし三椶尼寺英勝寺  
 真横よりはくれむ明り庚申塔  
 啓蟄の矢倉の一つ虚子の墓  
 寿福寺裏山の木ぶしに息を継ぎ  
 登り来て木ぶし息づく寿福寺裏  
 二代目の桜若木の走り咲  
 枝ばかり混んで桜の花遅き  
 花木ぶし足向け大仏方面へ  
 源氏山木ぶし木ぶしの花廂  
 啓蟄の栗鼠馳す佐助稻荷道  
 銭洗弁天木ぶし鮮しや  
 銭洗弁天日永の銭洗ふ  
 銭洗弁天奈良ではお水取り  
 銭洗弁天（しろへびさま）春は巳の日の験  
 （げん）あらな  
 弁財天日永巳の日の銭洗ふ  
 銭洗ふ験あらたかに春の水  
 春浅く巳の日の弁天詣でかな  
 啓蟄の巳の日の風に山の鳴る  
 旅心うづく気温は四月並み  
 芹の花揺れてぷるんと又揺れて  
 よく売れて柑橘類の苗木かな  
 一口よほんの一口螢いか  
 穴出でし蟻目をこする沓脱ぎ石  
 朝日子を招じ入れたる花さんしゅう  
 灌仏の柄杓やりとり見ず知らず  
 安息日白もくれむの無辜の珠  
 大風にちからを得たる白もくれむ  
 沖曇り八丈木五倍子生乾き  
 春休み真っ只中のロードショウ  
 凶鑑繰りチョウジガマズミ探し当て  
 谷戸口の木五倍子鮮し仏生会

強（こは）き葉に埃浮べて破れ傘  
 風の日も天気の日にも破れ傘  
 暈被たる太陽鈍に茎立菜  
 茎立の棒に見えたり楽天主義  
 達陀（だったん）の火影に憑かれ僧走る  
 助六の見栄きるごとく破れ傘  
 目で促し妻が蓬のことを云ふ  
 すもも包む空気のうちすももいる帯びて  
 一ト降りが桜に花をもたらしぬ  
 江ノ島の土産の栄螺数ふる頭  
 雨あとのすもももやもやして藁屋  
 港町横浜開花宣言す  
 お披露目のしなをつくりて破れ傘  
 物の怪の何時離れたる破れ傘  
 野毛山の十日も早き山ざくら  
 山中に出逢ひ屈背の破れ傘  
 鈍色の襲羽織りて破れ傘  
 三椶のからから花と健忘症  
 白湯させば花びらいろに螢鳥賊  
 螢鳥賊の目玉転がす舌の上  
 湯上りの晩酌ほのと螢いか  
 金沢自然動物園  
 さんしゅうの林を成してかすれ咲き  
 日の永くなる横山にアブラチャン  
 アブラチャン・木ぶし・山茱萸黄のとりど  
 り  
 棒に花ベタベタくつつけあれば桃  
 春は未だ浅く水木の赤き萼  
 日は永くなりしよモミヂバフウの実に  
 初桜と云ふも二三花枝の先  
 花辛夷散りこぼれをる畑乾く  
 土佐水木陰陽の陽好みけり  
 岩床をすすつと奔り春の水  
 初桜一山喚く風の中  
 山伝ひ風来て辛夷吹き絞る  
 春の草兔の耳の形して  
 おづおづと覗きてアブラチャンの谷

花ほつほつ動物園の駱駝山

花きぶしキリンの首のその上に

眺望が展けて絶句山桜

花と云ひ葉と云ひ静の山桜

花も葉も是出色の山桜

中腹に佇み暫し山桜

からからに乾くおむすび花こぶし

花きぶしヨット奔らす風が吹き

からすのゑんどうはびこる野辺の空に鳶

アブラチャン日増しに山の日は伸びて

芽吹き風強く櫟の身をよじる

烏山椒日永の古巢一つ懸け

地べた嗅ぐ獾にちよぼちよぼ春草生え

日永の陽ダーウインレアの卵ほど

一人抱き一人手に率て桜狩

山林の風ばかり聞き桜狩

漣の大島桜の巨木かな

ユーカーリの貴婦人日永の日を浴みて

日の永し生まれ変らばコアラがよし

ようこそとコアラの國の花ミモザ

動物園オセアニア区のミモザ咲く

坂下のはた坂上の桜かな

熊シデと木五倍子の花序の丈比べ

山桜山駆け巡る風のなか

犬シデと熊シデ芽ぐむ雑木山

桜咲く前の古巢がよく見えて

中腹に一本欲しき山桜

丹頂の己れ支ふる遅日の脚

曲芸の像の眼流れ花吹雪

花冷えの犀は騎士（ナイト）の鎧着て

像の牙折れたり春の珍事かな

大木の大島桜に首を立て

朝湿り大島桜に息を呑む

花きぶし山に祭りのあるごとし

朝戸風大島桜をどんと打つ

カラスザンショウ殺風景を絵に描けば

入日中光量絞るアブラチャン

花辛夷暮れて月夜の谷を守る

谷隣妻が見つけし桜見る

春場所の千代大海に土がつき

太鼓腹以て横綱目指す春

花どきの綱とり相撲はなから荒れ

春場所の話の及ぶ験（げん）直し

春場所の験を担ぎて茶のまはし

波瀾含みのモンゴル力士霾雲り

夏場所の土俵で泳ふ鍾馗顔

あとをひく長寿菓といふ落花生

四国路の花に遅れをとる旅路

日永の土佐の路面電車はリスボン製

楮蒸し日永の村の大湯釜

仁淀川

料峭の動きの鈍きなまず漁

ヒオウギ貝

花の夜の長太郎貝平らげて

よさこい踊り

花は今高知の城下に来てみいや

武州金沢八景 乙鱸海岸

虚子翁嘗てこの地に遊び  
昔ここ六浦とよばれ汐干狩  
の句をなせば

二三分歩いて浅蜷掘りの海  
八景の絵図にもありし汐干狩  
八景の一つの海の汐干狩  
汐干潟見当つけて試し掘り  
飛込みの浅蜷掘りとはなりにけり  
中潮の浅蜷掘りとは佳かりけり  
遠浅の海の干潟の生まれ方  
沙悟浄の頭のごと干潟生れにけり  
一鷗来てをり干潟の生まれたて  
波馳せくる干潟鷗の白配す  
春濤の起てる一線又一線  
指先にひよいと手応え鬼浅蜷  
近海の浅蜷の御飯浅蜷汁  
やたら採れやれ浅蜷飯浅蜷汁  
浅蜷馬穴にいつぱい往時の海還る  
ふらり来てその気になりぬ浅蜷掘  
立ち上がる腰ふらついで浅蜷掘  
差す潮に干潟が消えて浅蜷掘  
就中潮位ちふもの浅蜷掘  
黙々と手を運ぶのみ浅蜷掘  
またたく間干潟呑み込む春の潮  
浅蜷掘吾れは干潟の南端を  
長時間屈むは至難浅蜷掘  
もう腰が云ふこときかぬ浅蜷掘  
忘れぬし腰の痛みは浅蜷掘  
浅蜷など掘って帰れば誉められむ  
浅蜷掘って帰れば誉めらるをばさんに  
浅蜷掘あとからどつと汐疲れ  
上澄みを汲んで浅蜷の砂吐かす  
遠浅の海にづかづか浅蜷掘  
思い立ち夕餉の足しの浅蜷掘  
浅蜷掘立ち上がる腰しゃんとせず

浅蜷掘腰を伸ばして一くぎり  
上げ潮はあつという間に浅蜷掘  
遠くより波駆け来たる春一番  
東京湾望む地元の浅蜷掘  
大粒の浅蜷札賛行楽客  
造物の浅蜷の縞に魅せらるる  
さい先よし浅蜷の粒の大きかり  
多少粒小さきもよしとす浅蜷掘  
砂吐かす潮もボトルに浅蜷掘  
母校より望めり浅蜷掘りの海  
磯遊び馬穴覗きにくる子かな  
犬もまた沖を見つむる磯遊び  
砂吐かす風呂場よりして浅蜷の唄  
砂を吐く浅蜷ホースのごときもの  
浅蜷らの管弦楽団鍋の底  
曲目は何ぞ浅蜷の管楽器  
舌を出すことが浅蜷の砂吐くコツ  
砂を吐く浅蜷のカタリコトリかな  
浅蜷らの小田原評定アルミ鍋  
くらがりに砂吐く浅蜷鍋の海  
煮て蒸して炊き込み浅蜷尽しかな  
晩酌に浅蜷の酒蒸しとんとろり  
浅蜷掘なんぞで半日つぶしけり  
浅蜷掘りあとたたられて腿と腰  
けふ吹きて春一番を凌ぐ風  
春は赤芽のつんつんチャンチンモドキの木  
庭石に散り郁李の終の花  
郁李の花期本借りて読み継ぐ間  
居候然たり花了ふ山菜莢は  
春は霞む景より山水長巻図  
近所の子ボールを取りに春の庭  
墓地に一本桜の木あり未だ咲かず  
連なり咲く大島桜風のみち  
桜吹く風はめつきり冷え込みて  
桜どき運転免許取得中  
ふらここは母の瞳の内若葉どき  
郁李のあな小さき花孫に見す

かんばせにとほる鼻筋花あけび  
柿嫩葉蟹の鉄の形して  
西国の花見の旅のちらし読む

靖国神社

かんばせに靖国神社の花の風  
とつておきの笑顔を見せよ花を背に  
花どきの空がかりと九段下  
堀端の花ほつほつと九段坂  
花どきの空欠伸して大江戸線  
花の日本かく戦へりかく散れり  
二本目の花の標準木とは是  
憲兵と軍犬の碑や花社  
吾等かく戦へりの碑花の下  
東京の花見がてらの通院日  
沿線の桜日和よ通院よ  
花どきの乳首の脇へ聴診器  
えらき坂の花の靖国神社かな  
靖国の参道渡る花の風  
からかねの石の鳥居の花社  
頭を寄せて地割りの相談花の下  
風通るところがよろし花見茶屋  
形よきさくら枝張る花見茶屋  
御社に花の東京の標準木  
能楽堂脇の桜の標準木  
花湛ふ標準木の一風情  
幹太く陸士植樹の山ざくら

千鳥ヶ淵

劇中めき千鳥ヶ淵の絲柳  
片頬に内堀よりの花の風  
飛花一片千鳥ヶ淵の宙を舞ひ  
半袖の内堀巡る花の昼  
千鳥ヶ淵雀零せる飛花落花  
気のつけば樹上に雀花零す  
千鳥ヶ淵花に吹かれにやつて来し  
卒業式あるらし花の武道館  
鉄壁の城の石垣花の門  
内堀の上で転じて花の風

青天へ飛花煽られて濠の端  
花は五分千鳥ヶ淵の遊歩道  
花どきの人待ち合わすハチ公口

富岡・鳥見塚など

正面に見えたりすつかり花の山  
柿の芽の遅速一村一巡り  
連翹の盛りその裡葉が勝ちて  
からからに土が乾いて桃島  
人が出る前の夜桜三分咲き  
一山の花より花へ移る風  
シテのごと桜ばな打進むなり  
園深く小鳥を零す大桜  
一休み花を打ち過ぐ風を見て  
花を見て花をうち過ぐ風を見て  
花を見て花の生み継ぐ風を見て  
花の山雨湿り呉れ一新す  
横山の花一新の雨降り  
すつぽりと幹呑み込まれ花の闇  
五分咲きと言ひ切る花の目分量  
接収地跡の桜の古木かな  
次から次風ありてこそ山櫻  
花の雨落ち来て埃くさき山  
山陰の道に襟立て浦島草  
花人の足取りとなるのぼり坂  
酔ひ心花の高みに花見酒  
眼で追へる落花地べたとんと搏ち  
林間を真一文字に花吹雪  
絶え間なく花の生む風遊園地  
真つ青の桜の木々の間の空  
桜見て通り過ぐ眼は斜交ひに  
花曇り何時降られてもよき支度  
買ひ足して都忘れの彩違ひ  
日の照って花の遠退く鎌倉山  
紫荊昼経て雲に動きなし  
牛井の安き世うれし花の昼  
沿線のこころを花の走りとす  
水はもう戻ることなし芹の花  
大風を以て柿の芽芽吹かする

花の間尾長が通り過ぎしのみ  
水木とは一目で判る木の芽どき  
吹かるべく桜はなぞへ好む木や  
街並を桜透かしに望むひと  
春ずける彩を重ねて山桜  
飛花浴びて小学生と勤め人

雪舟の墨の点々（ドット）に氷る山  
ハリネズミ小澤征爾といふ指揮者  
新涼ののろま人形の首っ玉  
海辺まで歩いてゆける海紅豆  
春の夜のおんらあらあら土星食  
夜桜に土星食てふ天体ショウ  
午前から雲の垂れ込む棕櫚の花

HAIKU200204sono2

墨堤

墨堤の朝の花愛づ中国語  
墨堤に花人となる足慢ろ  
朝日影墨堤桜輝かす  
ひやひやと川に朝来て朝ざくら  
吾妻橋花の堤を一望に  
墨堤の花冷え募る太極拳  
花どきの光を湛え隅田川  
花堤さてとこころで折り返そ  
花人を花人の見る長堤

花どきの堤を越えて川明り  
なほ続く川をつめたさ朝ざくら  
花吹雪こりやまたなんと佳き風情  
対岸の花人と歩を俱にせる  
墨堤の何處までつづく花霞  
街騒のやがて混みくる朝ざくら  
日曜の朝の隅田の花の冷え  
風太郎眩しむ隅田の朝ざくら  
花どきの朝の水呑む風太郎  
風太郎朝寝決め込むガード下  
風太郎よこぎる飛花に眼を上げて  
墨堤の花見疎める風太郎

風太郎伏せ置く鍋に落花かな  
うたた寝の風太郎にも隅田の春  
花を背にカメラに納まる印度人  
墨堤のさくら大きく波うって  
墨堤を数珠つながりに花見客  
大きく手振って歩める朝桜  
花どきの朝日を返す隅田川  
桜狩るおもひも深く墨堤に  
墨堤の波より白き朝ざくら  
飛花とばす風の吹き込む隅田川

田沼

相田サク花桃咲かす七回忌  
七回忌故山の花に逢ひにゆく  
窮屈な喪服に花の忌を修す  
ぺんぺん草田畦を埋む七回忌  
ふるさとは桃の笑顔の叔母がゐて  
ふるさとは桜に早く桃のとき  
ふるさとの車窓はすっかり麦畑  
忌を修す筑波嶺までの昼霞  
下野の空搔き曇り花に電  
花桃の盛り畑土からからに  
佐野線のこの揺れ麦の中をゆく  
春の川大きく村を迂回して  
啓蟄の靴を間違ふ七回忌

富岡 せせらぎの道など

吹雪ぬし花ぱったりと降り歇むは  
浦島草けふの寒さに襟合はす  
けふあたり出向きおかねば散る花ぞ  
花の雨朝から降りて肩すかし  
花見支度し居れば雨や肩すかし  
鼻先をよぎりて飛花の舞踏団  
お花見のおあづけとなる朝の雨  
桜前線北上去年より早し  
春雨に降られて予定空回り  
飛花は飛雪然ととびたり花は富士  
おむすび食ふ吹雪ける花の大裾野  
満開のけふを逃して何とする

花万朶朝の風切る大鴉  
花煽る風に満喫して戻る  
無理強いをして花奪ふ風の暴  
烈風に桜の枝を鳴らし合ひ  
満つ花に堰切るとく風出でて  
大鴉姿くらます花の奥  
浅き闇散る他花のすべなかり  
小雨あり花はこれより散るばかり  
花に来て遊べる風を暫し見て  
烈風に花は大きく削れけり  
大桜颯れる風に逃げ場なし  
花誘ふ風を使はず佐保姫は

一視線鎮まる花の奥よりす  
峯桜ころろ天空かけのぼり  
山巔のさくらを風の櫛けづり  
滝をなす身延桜に仰天す  
雀容れさくらは巨き鳥籠よ  
暴れんぼう春一番のお通りだい  
風止みて巨珠（おおたま）となる家桜  
白無垢の桜一瞬風が止み  
道辺草あをあを落花降り懸かり  
紫荊咲いて足枷見ゆる日々  
花吹雪樹下を離るる瀬戸際に  
吾が挙動花に覗かれゐるごとし  
坐るなら桜大樹の下がよし  
烈風に桜のけぞる切通し  
でつくわす大島桜に金縛り  
見定めて坐る桜の吹雪く中  
陸続と桜現れ風の山  
海へ山へ人生とんぼ返りの春  
家桜夜は魔性を頭はにす  
風聴いて花の吹雪ける底にゐる  
陸続と故山の桜現れて  
蒼天に吹き上げらるる飛花二三  
歴然と飛花見ゆ風の曲がり角  
舞岡公園  
木叢抜き天にそそれる山ざくら

花と愛づ櫟の芽吹きよかりけり  
喬木に紛れず桜高く咲く  
彼岸桜一枝しごきて風の鳴る  
水木の葉開けるやつと開かぬやつ  
接骨木の花に声懸けハイカー等  
木のベンチ誰が置き去りの花きぶし  
色違え櫟芽吹き遅速かな  
真昼間の土筆を摘んで立ち暗み  
諸々の芽吹きと一緒桜咲く  
からからの畑好みて土筆どち  
土筆・露・双葉土から頭出し  
山間の日向好みて壺すみれ  
雑木山彩を違えて桜の種（しゅ）  
日永の山藪をのしのしあるく鳥  
追羽子のやうに水木の嫩葉して  
花序ちよつぴり垂れて若木の木ぶしなる  
山の端の団地に面す初ざくら  
ほうれんそう肥るや畑の赤土に  
山ざくら揺るる葉の数花の数  
格段に見事なさくら雑木越し  
界限のさくらの穴場探りけり  
やみくもに垂れて木ぶしの日陰谷  
遠桜昼経て淡し薄荷飴  
吾窺ふ視線めくもの花奥より  
花三椶頭の裡もからからに  
子と探すおたまじゃくしの密集地  
日向ぼこ中に齡くう亀のゐて  
横山にお飾り程のさくら咲き  
その中の齡かさ入った亀鳴けり  
子供らの餌は裂きイカざりがに採り  
子供らの登り易き木木ぶしの山  
花の山犬又犬にすれ違ふ  
土筆とは十賊の仲間図鑑みる  
蔓辿りあけびの花にゆき着ける  
薬のさくらの花の数ふ程  
花菜にも光度といふものありぬべし  
若木には若木の花の明るさあり  
かんばせにひやつと山の花の風  
蝌蚪捕りし足跡まざと沼ほとり

煽られて木いちごの花上下せり  
花きぶし芽吹き彩に紛れけり  
公園の日永の時計止まったまま  
ひよひよいと首を廻して花をみる  
鳥がゐて写真家がゐる花の山  
真昼間の花菜照りつけ狂気ざた  
菜の花に喚声挙がる山の畑  
野の風に首をすくめて土筆どち  
木いちごの花てふこゑにみんな寄る  
鳥入れて懐広き桜かな  
日を透す飴いろの葉の山ざくら  
立ち止まり立ち止まりみる山ざくら  
水木の葉しゃんと開きて芽吹き山  
花筵叩いて帰り支度かな  
薄墨に日限山の花暮れて  
花冷えのチワワ寄りくる散歩道  
弧を描く丘の形に花むしろ  
くるくると花見仕舞ひの花筵  
花の山子供のこゑが絶えずして  
花筵山の夕冷え払ひけり  
木いちごの花夕冷えの早きこと  
接骨木の花この畑も廃れしか  
遅桜畑半分耕して

再度 金沢文庫

一体の佛のごとく桜佇つ  
伸び出せる連翹の葉や齟齬のごと  
玉砂利を擦って桜に近づける  
無駄な枝一つもなかり山ざくら  
花冷えの眼をむく肉太仁王尊  
雪洞の三つ四つ小揺れ夜の桜  
夜桜の雪洞揺りて小夜あらし  
見上ぐれば他人（ひと）も見上ぐる山ざく  
ら  
鉛筆でつついて示すペンペン草  
私語一つ洩らさぬ二輪草の群れ  
山中に黙りこくって桜見る  
花を見る眼を水平に見晴し台  
花冷えの掌をポケットに丸めけり

一本の桜を指す山の道  
立ち止まる人の視線の先に花  
朝桜目覚める花に楚々と風  
飛花ひとひらとび来て亀の鼻さきに  
秀吉のやうに花見る太鼓橋  
彼岸鐘雨の水輪の曼陀羅図  
飴いろの葉も程々に山ざくら  
繰り出せる花人の中吾が居り  
自転車のサドルをぼんと飛花打ちて  
夜桜のフランクフルトソーセイジ  
花万朶山明けくれば鼓動して  
山ざくら天に伺ひ立てて咲く  
初花は天より零れ落ちし花  
お花見の渦中に入りてなまぐさし  
貧相な桜は風を友として  
公園の夜は外燈に花痴れて  
飛花とんと落ちてありあり土の色  
遠桜寡黙を以て対す山  
風落ちて暮るる他なき山ざくら  
けふの花おもひ巡らす枕元  
公園の花出で花に入る日和  
天帝より花賜りし山ざくら  
山桜咲く天帝の力得て  
焼藪の屋台に花屑駈け寄り来  
界限を桜前線通過中  
花表伝ひて風の翳ながれ  
夜桜を鎮めて雨の少し降る  
風の他何も恃まず山ざくら  
桜林の何處かに前（さき）の鴉ゐる  
山ざくら遽か下界といふものあり  
枕辺に花こんこんと降るは夢  
春は名のみ躰叩いて寢床起つ  
籠居の着の身着のままやがて春  
通院日冬のまんまの出で立ちに  
いつよりの着たきりすずめ紫木蓮  
山暮れて風が養ふ嶺（ね）の桜  
動き出す箇所が判りて花に風  
強引に花吹雪かする風が見え  
花どきの玄人はだし大道芸

動くもの一物もなき花の景  
朝風に流離流離と花散るも  
山中に何時かは亡ぶ大桜  
きりぎしに何時かは亡ぶ峯桜  
風払ふ枝を自在に山桜  
天に暮る深山ざくらを返り見て  
満つ花の何處より崩る大桜  
招かるゝごと来て坐せる花の下  
煽られて逆波立てる朝ざくら  
一陣の天上大風桜割り  
一同に飛花ふるまへり山ざくら  
走り根に齡見えたり山ざくら  
山桜根こそぎ揺する風の音  
花の奥深くひそみて夕鴉  
揺れ止みぬ花の天辺あなやさし  
しわしわと鴉よぎれる花の間  
複製の桜ずらりと佇つ並木  
花ほつほつ咲き出す山に悪路なし  
海棠の雨が止んだり白雪  
軽装に花どきの山転々す  
走り根の傍へが花の死にどころ  
お天道様山の桜に花授け  
初花に触れんばかりに大鴉  
小鳥らと花のしじまを俱にせり  
連翹に凱歌のごとく風起る  
一雨のあと立ち直る桜かな  
桜の幹古色蒼然雨を吸ひ  
花を見る脇に昔の吾佇たせ  
山々の見尽くし切れぬ峯桜  
山桜天を伝ひて風響き  
古りてなほ花壇の囲ひ栄螺殻  
祝ぎの座に招ばる春服一張羅  
夜の桜公園の灯がほつと点き  
花まばら桜にもある大雑把  
花見酒盛る桜に呑み込まれ  
一昼夜風に揉まれて花濃くす  
腰どんと地べたに据えて山ざくら  
さくら花零し始めて見境なし  
桜咲き山の眺めを一変す

と或る日の山のこぶしに破局来て  
花の上に花あり鳥もそれと知る  
息長き風や桜を伝ひくる  
腹這ひに目出度く恋を遂げし猫  
招かざる客の大風桜吹く  
花人は高きにのぼり下界見る  
花のあとがらあきの山の空  
接骨木の花見るばかり化粧坂  
千鳥ヶ淵咲き満つ花の風潜る  
散るときに音色のあらば山ざくら  
房ごと散る小枝も花の落下物  
ピカピカの喇叭携え黄水仙  
テレビ早や高知の花を大写し  
花に風甘える夜々となりにけり  
夜桜の人に混じりて華やがん  
一走り桜並木の花の風  
一走り風を走らす桜ばな  
雨一夜花の容を損ひし  
山鳥の花に恋々枝を替え  
夜桜の髪に蹴きくる精気とも  
烈風に山の桜の根も鳴らん  
雲集の桜一山泛くごとし  
散り癖のつきて辛夷の不貞腐れ  
天空へ喉のすりへるまで雲雀  
気が気でない今年のさくら散る報せ  
挿き当ててゴツと鳴れるや鬼浅蜷  
咲く番を桃にゆづりて花杏  
かろうじて花を止どむる一濡れ木  
はためける辛夷に千軍万馬の風  
山桜風の響きは幹伝ひ  
高遠の桜に雪嶺峨々と佇つ  
花人の足を巻き込みつむじ風  
花馬酔木いつか盛りを過ぎ侘し  
満開の花のくびれ目翳深し  
小雨あり桜一夜に花瘦せし  
山は一日さくらに風を送り継ぎ  
飛花二三跳ね返さるる風の壁  
花どきの最たるものに草団子  
花に葉に風を切らさず山ざくら



銭湯

花冷えの湯舟に沈むすっぽんぼん

日永の銭湯不浄の部位を先づ浄め

花冷えの湯舟に五体横たへぬ

洗髪も疲れる齡目借時

亀のごと首を伸ばして日永の湯

日永の湯前をはだけてすっぽんぼん

日永の湯刺青古りし男の背

日永の湯人足風の男ゐて

日永の湯脂肪のつきし腹透けて

日永の湯年の寄りたる他人（ひと）の尻

花冷えの五体しづしづ湯に沈め

男らは前はばかり日永の湯

花冷えの昼まんまんと湯を沸かし

銭湯の霞む富士見る頭に手拭

熱き湯を押し退け入る菖蒲どき

菖蒲湯をざぶりと出づる赤仁王

釜茹でを承知の上の冬至風呂

その他

夜風荒れ春の勢ひづきにけり

花どきの眼のごろごろとする新聞

花どきの鰻の出前頼むべし

日永の孫鼻の造作はパパに似て

軽き風邪引いて籠れる花の花期

花逸す悔を残さぬための旅

浅蜷掘る海は遠浅海苔の香す

火焰樹の背後に廻る風のあり

馬面剥（うまづら）の外れに外れたり左右

の眼

旧守派の最たるものに枯桑瘤

お披露目のごとくヨットの快走す

降る雨に四葩角ばる下田港

尼寺に桔梗と茶花の方と円

昔日の海向日葵の瞳の中に

なか空を唐竹割のはたた神

雨降嶺に仁義切るごとはたた神

白極む百日紅の長丁場  
杉を割る雷公正気の沙汰ならず

ぼかぼか四国花の旅

旅支度道後の花に逢ひたくて  
お遍路は時計回りに霊山寺  
瀬戸内の桜が咲いて二人旅  
沿線の桜見ながら羽田まで  
飛行音桜戦きみたりけり  
花の駅四五六羽田引込線  
やみくもに走りて四国花の旅

羽田

ランディング寸前翼下の草青む  
春草を蹴ってジャンボ機ランディング  
花の上の飛行日和となりけり  
羽田より飛んで男どきの花の上  
瀬戸内の桜が見えて機は下降  
春空に突っ込む機体勇魚いる  
春服に鶴のマークのクルー嬢  
春空へ発てる尾翼に鶴マーク  
陽炎ふて発てる機体の分刻み  
ジャンボ機の胴にミッキークー春休み  
デッキより臨む空港草青む  
空港ロビーに子供が溢れ春休み

山陽道

春の日のぼかぼか山陽自動車道  
尾道の辺り桃いろ昼霞  
播磨灘臨む緋桃の一軒家  
明石大橋点灯パールイエローに

しまなみ海道

瀬戸内に所を変へて春がすみ  
春の瀬戸原付バイクでタタタと  
瀬戸おぼろ海橋ライトアップせり  
海橋のライトアップも桜どき  
瀬戸霞み大観の絵の朦朧体  
伊予灘の潮の香飛ぶ日伊予水仙  
菜の花のしまなみ海道通過して

船笛のぼうつと島々霞ませて

しまなみ海道飛ばす単車に花菜の黄

因島

八朔の本場もの食ぶ因島  
島々の霞める中につぶて島

生口島 耕三寺

伊予柑の味見ぞろぞろツアー客  
渡し賃七十五円よ瀬戸の春

そら豆の沖に睦く因島

島土産あんせいかなの味見して

花潜り西の日光花潜り

耕三寺裏山みかん鈴生りに

耕三寺海風絶えて花重る

時期過ぎのデコポンの味大雑把

デコポンに瀬戸の夕日の大きこと

あんせいかなの隣のそれが晚白柚

家苞のあんせいかなのいや重る

風一夜天草浮いて生口島

瀬戸内の春日が廻るバスの尻

南国のあらせいかんを掌に計る

大三島 大山祇神社 大島

斎灘デコポン大の入り墜つ

魚島の霞みつ現れつ燧灘

瀬戸内の夕日見送り島レモン

瀬戸内の朝日差し込むレモン畑

サイクロード島のレモンの栄ゆる道

サイクロード石蓐の青とレモンの黄

サイクロード霞む島見て十の橋

家苞に宅急便の土佐文旦

店先にでんと箱詰め土佐文旦

二つ三つ話の種に買ふ文旦

伊予柑の山盛り島の土産もの

レモン生る瀬戸の潮風頬に受け

伊予柑に光沢与ふ燧灘

瀬戸内の春の焼魚伯方塩

花どきの水軍の島打霞み

春のバス大島石の島抜けて  
大島石採石の空つばめ飛ぶ  
瀬戸小春大島石を生活とす  
春光に大島石の屋敷垣  
瀬戸一のうまい蜜柑を産す島  
瀬戸内の三千余島昼霞  
デコポンの鈴生り瀬戸の日は真上  
献灯は丸亀汽船樟若葉  
瀬戸内にモデルになりし島あれば  
波たふたふひよっこりひょうたん島の春  
島に湧く出湯の一つ鳥雲に  
花ほつほつ咲き出す瀬戸の島伝ひ  
サイクロード橋や花菜や渦潮や  
降り注ぐ瀬戸の春日や亀老山  
通過せる一島二町みかん畑  
もののふの武運祈りし杜若葉  
瀬戸内の潮一文字多々羅橋  
舟往き来塩飽諸島の春の海  
瀬戸内のおむすび大の春の島  
水軍の瀬戸の八百島霞みけり  
瀬戸内の島影春陰まさには  
瀬戸の渡舟雑貨など積み春日和  
来島海峡  
渡り来ししまなみ十橋昼霞  
春浅き来島の瀬戸小渦巻く  
来島海峡単車で飛ばす半ズボン  
めくるめく来島の瀬戸春かもめ  
奥道後  
分け入りて花満目の奥道後  
向ひ山鳥も朝寝の奥道後  
山桜葉のくきやかに朝の風  
山桜の枝の風折れよべならん  
太幹に苔の真ん丸山ざくら  
湯ぼてりの後から後から朝桜  
のどけしや道後朝湯の大阪弁  
春曙肩を打たせて道後の湯  
護謨の木の嫩葉を湯舟よりあほぐ

傘さして石手寺参り春の雨  
笠二つ山門潜る遍路寺  
石手寺裏弘法山の竹の秋  
石手寺に花は散るのみ徒（かち）遍路  
春雨に濡るる石手寺石手川  
宿で食ぶ因島産晚白柚  
朝桜音無しの雨吸へりけり  
道後公園  
糸柳月に懸かれる道後の夜  
夜桜に流しの河内音頭かな  
新参と一目に知れる花の宴  
浴衣着て道後の夜桜見物す  
花見酒片手に流し流行り唄  
花潜り浴衣姿の弥次郎兵衛  
道後公園夜桜の上に月上り  
夜桜に焼肉の煙もうもうと  
貸し練炭貸し莫産夜桜真つ盛り  
花の公園坊ちゃん団子食べ歩き  
坊ちゃん湯  
浴衣帯するすると解き道後の湯  
おぼろ夜のからくり時計せり上り  
花冷えの坊ちゃん列車待機せる  
花冷えの湯冷えのからくり時計見る  
花冷えの坊ちゃんからくり時計鳴る  
旅先の道後の春や足湯して  
自画像  
人間も古りて日本最古の湯  
坊ちゃんの湯を出て臙に一服す  
霞む中坊ちゃんは居ず道後の湯  
道後の湯古りて天井扇風機  
古老曰く一銭貰うて湯が五厘 飴が五厘  
懐古談五厘で入る道後の湯  
長閑に語る古老の往時坊ちゃん湯  
道後の湯厠窓より春の月  
巡らする雪洞おぼろ道後の湯  
湯上りの畳ざはりも道後の湯  
山下清何処かにみさうな道後の湯

おぼろ濃く一挿絵めく道後の湯  
花疲れとる湯に山下清めく  
一茶も入りし湯なれば  
道後の湯肩まで浸かりおらが春  
臙行けば手相見に遭ふ道後の湯  
永日の刻み太鼓に道後の湯  
陶板に驚凶道後のおぼろの湯  
長湯して花疲れとる道後の湯  
道後の湯懐古談きく春曙  
道後の湯麗らか築後百余年  
花疲れ愚陀佛宜しく湯を浴みて  
道後の湯出でてぶらつく町おぼろ  
おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯  
永日の子規も好みしせんべい屋  
永日の瓦葺きたる道後の湯  
湯姫だるま花冷え帯ぶる菓子商ひ  
春爛漫能舞台ある宿といふ

#### 松山城

春雨の松山学校通りかな  
松山に春呼ぶ花の平山城  
伊予絣使ひ廻しの話かな  
藍染めの作務衣購ふ燕どき  
春雨にまみるる銅像鍵谷カナ  
ハンカチ買ひ絣模様の包装紙  
寺巡り松山は雨春の雨  
外濠のはた内濠の桜かな  
外濠の花越し石鎚連峰見ゆ  
花の雨路面電車は濠端沿ひ  
ありさうなアザラシ・マドンナてふ喫茶  
松山中学校跡  
濠端の花見に夏目金之助  
石槌山を臨む瀬戸内春の雨

#### 子規堂

春の塵つもりて子規の勉強部屋  
霾雲り写真に四角な子規の貌  
鳴雪の髯塚春雨降るばかり  
鳴雪の髯塚覆ふ花接骨木

子規筆記の幾何学の本のどけしや  
パンジーの鉢添え子規の野球の碑  
極堂の色紙春雨上りけり  
子規堂の電燈の笠春埃

#### 内子の宿

燕とぶ内子の町の軒伝ひ  
虫籠窓掠めつばめの鮮しき  
春休み店番出来て内子の子  
つばくろは鰻絵の速さ内子町  
漆喰の電話ボックス春雨に  
内子座を素通り春の雨のなか  
芽吹くもの柿と柳の内子線  
芽柳に雨も絣の内子町  
紫木蓮蔵壁に栄ゆ内子町  
諸葛菜内子の町に雨を呼び  
軒先を燕の駆くる内子町  
春陰の淡く鰻絵の龍と鯛  
柿芽吹く内子の鍼灸治療院  
内子町燕見ながら雨宿り  
初燕内子の雨に降られけり  
諸葛菜雨に照る道内子座まで  
内子座の前でつばくろとんぼきる

#### 宇和島 宿毛

宇和島の旅の中日の春の雨  
宇和島のあちらこちらの花堤  
風雨つき三人連れの遍路笠  
法花津湾眼下に温州蜜柑の里  
じゃこ天に地酒のはづむ春の雨  
輝りに輝る伊予灘デゴポン磨きけり  
潮臭き宿毛の雨に徒遍路  
由良半島真珠いかだに春の雨  
糸海月真珠鬨るは先のこと  
真珠筏暮春の泛子の黒法師  
春潮差す由良のきんちゃく入江かな  
宇和島の渡しに春の自転車並み  
宇和島の雨に真鯛の生簀濡れ  
雨の中漁して鰻の地獄どめ

土佐珊瑚細工など見て雨宿り  
宇和島の話の種に鯛そうめん  
土佐鶴に鱻の湯晒しとは珍珠  
宇和島の牛の角突き花咲けば  
宇和海に沿ひて走れば春の雨  
薫風が吹き花かつを作る町  
平目食うて水軍といふレストラン  
お遍路によく遭ふ雨の宇和島路  
宇和島の真つ直ぐな雨お遍路に  
真珠筏きんちやく湾に春の雨

四十川

四十川はあいにく雨の川えび漁  
四十川に合羽光らせ鰻漁  
四十川の昨夜春荒れの雨量かな  
四十川の天然鰻潜む淵  
四十川の春雨を聴き屋形舟  
春驟雨舳を叩く川鰻漁  
四十川の透明度とはこんなもの  
四十川の橋四十川の春の雨  
雨のぎり漁屋形舟より拝見す  
雨合羽光らせごりのがらびき漁  
四十川の雨に烟れる遠花菜  
四十川に子の飛び込める夏近し

高知

四十川の青海苔の香に一善飯  
四十万青海苔載せて朝飯喜ばす  
粒大き高知の雨や遍路笠  
轉りの中にや県鳥ヤイチロウ  
泳いじよる潮噴く鯨の絵看板  
この辺の尾根に一ヶ寺遍路笠  
土佐湾に面して枇杷の袋掛  
海明り早生り枇杷は四国一  
のれそれに酒は土佐鶴所望して  
路面電車うららに高知松山や  
仁井田米産す地代田水張れり  
石尊寄る浜辺は嘗て捕鯨基地  
糸海雲礁を天にせり上げて

桜貝うち寄する浜遍路ゆく  
おぼろ夜のしば天踊り余興の座  
夏の味皿鉢料理の生にんにく  
浴衣着て皿鉢料理の座につけり  
春雨にぐにやりと曲る土讃線  
みどり立つ高みに槍の長曾我部  
宿の膳何はさておき姫かつを  
土佐の春酌みて地酒は亀泉  
百合の香の満つるロビーや土佐泊り  
目覚めよくお遍路マップ備ふ宿  
菅笠に貪瞋痴慢（とんじんちまん）払ふ旅  
桜こんもり一豊の大手門  
春雨に同行二人種間寺

雨風に花もしっかり岩本寺  
花どきの土佐の湊にかいつぶり  
有磯風花を揺さぶる遍路道  
土佐湊鳩のゆらゆら朝寝して  
遍路宿つよく朝寝の目をこすり  
遍路笠真つ向に受く土佐の風  
酒盗つまんで春の土佐泊り  
のれそれなど地酒に土佐のうまいもん  
土佐泊りドロメに酒の進むかな  
ずっしりとリュックの底に宗太節  
みどり立つ龍馬・退助生みし郷  
ここは土佐かつをのたたき口にして

はりまや橋

名にし負ふはりまや橋に春日燦  
ガイド嬢長閑かに純信・お馬譚  
はりまや橋さうよ高知の春の旅  
はりまや橋指して歩けば燕飛ぶ  
路面電車ひよいと除けゆくつばくらめ

桂浜

龍馬像松のみどりをそそらしめ  
龍馬像舶来ものの靴を履き  
春濤と云へど大振り土佐の波  
潮けむり夏を思はず龍王岬  
五月馬朝の浜辺に足馴らし

したたかに花搏つ風もいごっそう

大風の土佐の浜辺の遍路道

春濤の大きき見よや桂浜

南下して土佐の春濤聴きに来し

逆巻きて土佐仲春の波襖

桂浜白砂青松春怒濤

龍王岬春潮の帯巡らせて

春潮の広がり広がり桂浜

足許に打広がりぬ春の潮

春光の土佐の逆波見て一服

松林に土佐の春濤とよもせり

みどり立つ松の枝ぶりもいごっそう

みどり立つ浜の土産に五色石

春は来ぬ岬の突端島の突端

土佐珊瑚いろに岬の春の雲

巡礼に春とは云へど土佐の雨

金比羅宮

とば口に石段駕籠屋花の山

金比羅参りしんどし燕に頤を出す

金比羅参り燕掠める芝居幡

金比羅参り蝶の身軽さ羨しとも

金比羅参り竹杖つける音長閑

金比羅参りちよつぱり春の汗かいて

金比羅参り汗を拭き拭き音をあげぬ

金比羅参り背に汗覚ゆ百段目

金比羅参り燕出で入るいっづく茶屋

金比羅参り竹杖で指す山ざくら

汗拭きつつこんぴらさんへもう百段

花の山えっさえっさと石段駕籠

花人にはいごめんよと石段駕籠

百段目の百段堂にてラムネのむ

花吹雪ばつぱと金比羅大権現

半袖に春風清しこんぴらさん

汗し聞くもう百段に顔見合はせ

五人百姓花に広がる風流傘

こんぴらの又又落花常夜燈

春興の駕籠に揺られて象頭山

こんぴらの花誉め合うて國訛り

こんぴらの石段きつし春落葉

花人の足腰問はる象頭山

こんぴらの石段尽きぬ春の昼

こんぴらの石段千余春霞

汗拭いて七百八十五段の労

金比羅さん若布うどんに腹拵え

夫婦して啜るや春のざるぶっかけ

ひやつこくて腰ある讃岐ざるうどん

麗らかな容灸まん・讃岐富士

讃岐富士青麦畑侍らせて

春興の金比羅参りの膝笑ふ

うどん屋に春の金比羅歌舞伎のピラ

かつをダシ利いて讃岐のざるぶっかけ

うどん食べ四国ぼかばか春ツアー

山若葉讃岐うどんの昼餉とる

讃岐富士うどん腹もてあほぎけり

春陰の金比羅参道椎の風

春陰のお堂にうっすら象の絵馬

善通寺の上に止まる春の雲

うどん屋の隣もうどん屋春の昼

花の雲挿し絵のやうな象頭山

こんぴらの石段のぼる鰻鮓腹

五人百姓花下に商ふ大唐傘

縁台に金比羅参りの腰落し

春興の手にとりてみる加美代飴

春の昼こんぴらさんへ竹杖つき

石段駕籠二挺追い抜く花見衆

象頭山花吹雪舞ひ上げにけり

飛花とんで海ある方へ象頭山

神寂びの楠囀りを零しけり

象頭山眼下に広がる麦畑

金比羅宮渡殿抜ける花の風

春の雲一つぽっかり讃岐富士

昼霞丸亀城はあの辺り

見下ろせば燕の上がる琴平町

灸まんの赤茶の包み春なれや

囀りの眼下の探す琴平駅

春落葉こんぴ詣で下向道

瀬戸大橋

春潮の潮目を通す瀬戸大橋  
霞みつつ肉眼に見ゆ鷺羽山  
瀬戸内の島々霞む釣日和  
瀬戸内の小春の潮目潮目かな  
瀬戸大橋たもと明るむ桜かな  
瀬戸大橋より見ゆ春の小豆島  
瀬戸内の春のなべ島おわん島  
山腹のつつじ見ながら土讃線  
紫雲出山（しうでさん）瀬戸に霞をもたら  
せり

倉敷

歩きつつ地ビール「独歩」喇叭飲み  
風絶えしこと確かなる糸柳  
柳影鯉のうち寄る水の音  
川面に柳のみどり畳はる  
と或る蔵玩具をひさぐ柳の芽  
柳吹く風や川辺の蔵伝ひ  
糸柳極細柳倉敷川  
倉敷の柳に遭へり柳どき  
倉敷の鳴呼柳どき柳どき  
美術館柳男どきの風見鶏  
倉敷川挟み柳の風ニ夕筋  
古玩具のばたばた日永の土産屋に  
川縁の歩み柳に促され  
倉敷の風にやなぎのふうわりと  
倉敷の雄鶏書房春日差す  
風流の始め柳に佇むは  
川端の柳に見える風の道  
美術館芽吹きに間ある蔦の門  
柳吹く風の速さに歩を合はせ  
蔵壁に最も栄える糸柳  
倉敷の蔵壁染めて春夕焼け  
倉敷の川端柳暮るるまで  
広島空港  
岡山の桃の畠の幾起伏  
空港に待りて春夜の広島焼  
文旦を抱え羽田へ最終便

金比羅さん詣でし朝寝のふくらはぎ

喬木の中に細身の山ざくら  
浦島草凄味を増して迷ひ道  
浦島草落石音に耳を藉す  
曇日の盲ひし池に蝌蚪蝟集  
陰影をつけて雨日の桜ばな  
浦島草鎧ひごころも凜として  
破れ傘坂急なれば躓ける  
山腹の一本桜靄聚め  
傘開く音のどすと涅槃寺  
のほほんの花どきは又空巣どき  
枝移る雀や雨に重る花  
惜しむらく過半を欠きし花姿  
カラスザンショウよく見る山に春諾ふ  
上段に土筆の挿し絵四月号  
雨除けてくるり花閉づ二輪草  
登る道幾つもありて花の山  
のぼる道吾に選ばする花の山  
雀らとせめて興ぜん雨の花  
雀さへ雨の落花を足蹴にす  
立ち直る余地なき花と一瞥す  
さんざんといふ形（なり）雨のあとの花  
どたばたと春一番の名を負へる  
四方より桜を佛のごとく見る  
鯉跳ねて音のどぼんと朝桜  
鴨の嘴桜に向けて進みけり  
ハローワーク花馬酔木ほど職あらば  
何時か鳴る満天星の鈴馬酔木の鈴  
花冷え阿彌陀観音勢至従えて  
飛花誘ふ風の高々文庫ケ谷  
幼子を持つもの同志花筵  
飛花を追ふこども追ひ駆くこどもかな  
花吹雪暫し話をさえぎりて  
称名寺古絵図には無き花の附置  
ぎこちなきところ未だあるあめんぼう  
校庭にフライの上がる春休み  
小岩より半身乗り出す日永亀

海岸尼寺あたりの桜咲き始む  
酔ひ潰れ男横たふ花筵  
乳母車前へ前へと飛花の中



大船 竜宝寺

花御堂ぼつりぼつりと人の訪ふ  
人絶えて風訪ふばかり花御堂  
人気なきときの甘茶を灌ぎけり  
樹下にゐて雀もさくら薬浴めり  
花の彩十（とを）ほどあるか花御堂  
ちよこなんとお堂の前の花御堂  
照り栄えて伽藍のごとき八重桜  
当山の風のうまさよ松の芯  
山若葉風にぐらぐら仏生会  
当節の足長少女花御堂  
すくすくと杉菜の育つ幼稚園  
花御堂簷に椿の葉を葺きて  
花期たつぷり愉しむ八重の桜なり  
花了へし山は轉じて若葉どき  
まてば椎漲る山に風溢れ  
風薫じ作務衣で通す日なりけり  
大方は雑木乍らも山若葉  
檜櫟に遅れまじとて水木の芽

鎌倉 浄妙寺

堂縁に甘茶の薬罐汲めとこそ  
花菜など四柱に括り花御堂  
ぼうたんに訪へる人五月蠅かり  
牡丹のたつぷりと風ふふみたる  
白牡丹鮮しき風吹きにけり  
真つ先に楓が捉ふ風なりけり  
早きものもう青々とさくらの実  
からすのゑんどうゆらりと長けて鳶のそら  
もみぢの実生ここだくもみぢの葉形して  
開山堂開かれてゐて若葉風  
桜薬掃き寄せて夕惜しみけり  
ソメイヨシノのあと八重桜引き継げり  
閑にして寂たり牡丹の間の土  
体育館森閑として八重桜

八幡宮ちよぼちよぼ芽吹く大臣山  
楠若葉風が恋（こほ）しき頃となり  
雨雲に外出控えぬチューリップ  
葉の上が居心地よくて春の蠅  
おぼつかなき午からの空紫木蓮  
ご近所のひとのやんやと入学す  
図書館の浪人生に燕くる  
予期せぬ彩球根植えのチューリップ  
都忘れ記憶は淡くなるばかり  
夜桜の冷え込み上着一枚分  
桃の花盛りを過ぎて真の放埒  
ひとり人より遠ざかりゐて青葉の日々  
花了へし園に雪洞なほ吊られ  
サイダーに噎せびつドムドムハンバーガー  
めかり時映画はシルバー料金にて  
吾が好む映画はドンパチ春休み  
薫風に洗ひ栄えして茶の作務衣  
白桃は陶然緋桃は豁然と  
金魚の水替え二昼夜かけてカルキ抜き  
少年に交じりて干潟ウオッチング  
源氏山残り少なき飛花とぼし  
芽吹かんとする山櫟欠かせざり  
芽吹く山モザイク模様くきやかに  
櫟らの山芽吹きそむ呱呱のこゑ  
まるめろの花や望みは大きく持ち  
老公孫樹芽吹き始めの稚なかり  
枝透けて芽吹き遅るる端山の木  
楷芽吹く少しうす墨色帯びて  
四国 補遺

遍路笠騒然として土佐の風  
竜馬像ここより見えて磯遊び  
麗日や金比羅さんへ杖頼み  
花追ふて巡る四国の裏おもて  
備中より備後へ抜けて桃島  
瀬戸内の島を巡りて春駆くる  
朝寝してふくらはぎ揉む旅戻り  
桜前線目に見ゆやうに高知過ぐ

あけすけに見ゆ瀬戸内の島の春  
善通寺さまの塔見ゆ春がすみ  
身軽なる燕とこんぴら参りかな  
讃岐路を巡りて燕初見の日  
ほうれんさう道後の湯よりやはらかき  
来島の潮条見よや桜まじ  
土佐に来て鯛の骨蒸し風荒る夜  
瀬戸内の海中見たや花見鯛  
瀬戸内の花や夜は夜で桜鯛  
岬（はな）鱒の佐多岬見てなほ南下  
道後の湯未だほかほか鯛茶漬け  
野毛大道芸

永日の大道芸でも見にゆかん  
パントマイム己れを支ふ素足かな  
スキヤキソングうららにワンマンバンドか  
な

大道芸なべて陽炎ふ自由席  
永日の掏摸も輪中に大道芸  
仏具屋の前を塞ぎて風船芸  
大道芸蒸す日を火噴き男かな  
五月晴れ大道芸に人出たり  
大道芸藤の簪ヒバリシヨウ  
大道芸ドレス薔薇いろヒバリシヨウ  
パントマイム天使の輪つか夏空に  
パントマイム天使の頭上夏の雲  
大道将棋南風吹き込む横丁に

#### 横浜国際行列

市庁舎に楠のさみどり飛び込めり  
チュウリップツリーに伊勢佐木町（ザキ）  
をぶらっけり  
楠の花本日パレード日和なり  
楠の花神奈川縣廳聳えしめ  
パレードのギャル薫風の息吹き浴び  
緑陰に待機消防楽団員  
風船を満載パレード先導車

パレードは正午に発ちぬハルジオン  
パレードを見る浜っ子のサン格拉斯  
パレードに立ちんぼ素足疲れかな  
新緑の間を昇れるしゃぼん玉  
街路樹の間を抜けゆくシャボン玉  
埠頭への路延々と薫風裡  
薫風の吹き込む中華街大門  
中華街薄暑の四馬路（すまろ）経巡りて  
ノンステップバス  
老人にやさしきバスの走る首夏  
バス待つ間風に吹かれて葉ざくら季  
薫風に背を押されくる車椅子  
鈴懸の嫩葉ちらほら並木路  
薔薇の季あけすけに見ゆ美容院  
マテバ椎若葉こんもり例大祭

#### 神奈川近代文学館 漱石展

ダンデイーな薄暑の雀埠頭歩す  
吹き靡く葉ざくら港の見える丘  
楊梅の木の昼泊船なき湊  
英吉利の國花薔薇咲く港の丘  
海の日差しブラックスワンといふ薔薇に  
ちぐはぐな山の緑はマテバ椎  
わっとこゑ洩らす繚乱石楠花に  
うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴  
花水木横浜港を一望に  
大南風樗大樹を吹き絞る  
漱石の萄印凝ったり清和の卓  
陳列

漱石のおしゃれ着宮古上布の夏  
漱石の「永日小品」読む日永  
大きな字の漱石書簡夏来たる  
漱石の参禅あぢさゐ殖ゆる寺  
大南風ガレージセルの古着揉む  
外人墓地下れば風の葉ざくら谷  
外人墓地匂ひの元の椎は是  
ただならぬ椎の匂ひのプール際  
椎の香の唯中山手風致地区  
元町

ポンパドール麵麴職人の髯薄暑  
薫風に立ち読むバスの系統図  
葉ざくらの風の本牧通り過ぐ  
飯店の土産袋の赤薄暑

### 雪舟展

楠の木の緑眩しむ上野山  
噴水の季節となりぬ上野山  
日傘要る上野の山でありにけり  
五月光ブロンズ像の背に肩に  
噴水の始めおぼおぼやがてずい  
噴水の背骨をしゃんと立てにけり  
噴水に飽きしその眼を森に遣る  
緑陰に人憩へるは挿絵めく  
ブロンズのライオン侍る青嵐  
チューリップツリーの木陰夏帽子  
雪舟展初日の苑の車輪梅  
伝雪舟・雪舟首夏の美術館  
紙魚寄せず是雪舟の達磨絵図  
雪舟の筆致ありありかわせみ図  
水無月の眼を皿にして等揚図  
拙宗と名乗りし頃のかわせみ図  
懸け連ね二幅の湖亭春望図  
霞立つ邑々唐土勝景図  
雪舟の水と霞の勝景図  
惜春の琵琶胸に抱く雪舟図  
鎮田ノ滝描き切りたる水に腰  
水無月の渡明雪舟壮行誌  
つばくらの眼を借り天橋立図  
雪舟の筆のしつこさ老松図  
夏俄か雪舟寿老図多産せり  
夏珪様雪舟山水涼しげに  
夏珪図を下敷きにして雪山図  
方に雪嶽納む雪舟画  
山水図巻清水流るるやうに見て  
流水のスピードをもて山水圖  
雪舟の鍾馗図端午迫りけり  
雪舟の一本菊に目を瞠る

雪舟の屏風より出づつばくろか  
方に清和の漁樵問答図  
苔むす巖老松の根がひん曲り  
雪舟の鋭筆雪峯ぐいと曲げ  
竹の秋雪舟倣ふこと多し  
雪舟に李在大観には天心  
翠巒に雪舟写生の手を休め  
青嵐衝き来て琴高乗鯉図に  
霞むべく破墨滄墨山水圖  
竹の秋皴み水色巒光図  
周文の竹齋読書図竹の秋  
遁走の鯰一匹瓢鯰図  
竹秋の曲者揃ひの道釈画

### 西洋美術館

つばくらめカレーの市民の頭上越え  
緑陰を描くに遠近法をもて  
雪舟の鶴図見て入る動物園  
半袖シャツすずろに笹蕎麦うまき季  
柿の花或る日病ひに見込まれて  
柿の花肺病みの世は遠くなり  
柿の花不治の病ひは絶えずして  
柿の花不意に来るもの死と病ひ  
通院を始めて十年（ととせ）柿の花  
診察を了へ東京の五月空  
羽田より鶴発つごとく北方へ  
本抱え書店を出づる五月晴れ  
夏みかん細目の花の薄笑ひ  
遠葉桜いっぽん戦ぐ墓地の昼  
葉桜の風真つ向に受けつつゆく  
狛犬に薫風切れ目なかりけり  
蚕豆の箱入り息子絹ぶとん  
棕櫚の花七日連休待たれけり  
夕暮が迫る卵の花豆腐いろ  
コンピニまで歩いてみたき夜の新樹  
糸瓜苗など入荷して雨の花舗  
雨の花舗糸瓜苗など並べ立て  
蚕豆に浮世離れの昼の酒

いそいそと酒の肴のそら豆剥く  
塩振りて茹で蚕豆を曇らす  
そら豆は湯気の温さでありにけり  
ヒメジオン空地となりて久しかり  
背恰好・明眸同じヒメジオン  
山門の構えに適ふ大つつじ  
葬儀場前のつつじの真っ盛り  
鈴懸の青実てるてる坊主めく

真昼間の家出づときの黒揚羽  
 海タナゴ息をパクパク南風の魚籠  
 魚籠底にギンポ寝そべる日曜日  
 子の曳ける海豚の風船ベイサイド  
 毛虫のごと空攀ぶジェットコースター  
 顔面に南風受けジェットコースター  
 黄菖蒲の丈吹く風の息長く  
 茅花季旅の一つもせよと云ふ  
 いっせいにヨット吹き曲げ大南風  
 たゆたひて卵波芥を運びけり  
 うまごやし風勁ければ低く生ひ  
 羽蟻のごとヨット俄に殖ゆる海  
 赤つめ草白つめ草に勝る丘  
 うまごやし白花浄土なせりけり  
 柏餅挿話のごとく差し出され  
 柏餅話し往時に遡り  
 かなぶんの五月蠅かる日もかくて暮る  
 狛犬の杜塗りつぶし五月闇  
 小さん逝く  
 梅雨湿り払ひて小さんの長屋もの  
 楠かほる護国神社に詣づらく  
 著莪に降る雨や雨水のはけ所  
 壮年の駈け抜けし日々棕櫚の花  
 じだらくの雨や枇杷の実青ませて  
 棕櫚の花職退きて早や二春秋  
 篠山に匂ひのすぎて百合の径  
 蔓花の蔓の弾力鉄線花  
 春雷のごろごろ遊びやがて了ゆ  
 アマドコロ甘え處と聞き止むる  
 ロッジ明け郭公西す東す  
 薫風に身構ふ枝の小雀も  
 夏つばき朝の蕾の青小法師  
 更衣彩落ち作務衣手に通す  
 芍薬の嫩葉日毎に目をそそる  
 そら豆が青し六十路の指の先  
 招かれてゆく櫻守藤右衛門  
 ぼうたんの寝々と崩るゝとき来たり  
 筈のどんな山哉汝が出処

バリカンに眠気覚まされ目借時  
 睡るとは不覚穀雨の散髪屋  
 めかり時頭ぐらりと散髪屋  
 散りざまの何たることかチューリップ  
 葉ざくらの枝に小雀吹かれをり  
 ラムネなど飲み人間も斯く古りぬ  
 ユリの木の花はと街の空を見る  
 朝鮮朝顔鉢花として日々愛づる  
 火炙りの刑もて毛虫殲滅す  
 梅雨毛虫掃討作戦開始せり  
 でで虫に楓下枝の岐路ありぬ  
 庭亘る風を捉えて風知草  
 たまゆらの湿り風起ち鴨足草  
 うたたねのホトケドジョウの髻立派  
 たんぽぽの穂絮の首を手討ちにす  
 毛虫つく頃の庭木が目に入る  
 満腹や毛虫の下見でもせんか  
 さざんくわの毛虫の下見的中す  
 十薬の天に向ひて十字切る  
 姫女苑空地育ちの背恰好  
 大蚯蚓仏となりて蟻の変  
 母の日と重なりナイチンゲールの日  
 青葉の翳ますます深く看護の日  
 鳩ごろつぽ花屑零す楠潜り  
 花掲ぐユリの木十年程経つか  
 風の中紫蘭の内緒話かな  
 檉青葉雨降りて杜深くなる  
 百葉箱葉ざくらの青一途かな  
 連休もたうたう了り櫻欄の花  
 林未井（らいせい）句集「蝸」味読  
 生ま生まと未井思ほゆ棕櫚の花  
 例ふれば蛙の呂律未井調  
 枇杷青実雨滴零せる庭瘦せて  
 花石榴零るまで雨降り抜きて  
 ぷーんと来る春の蚊にしてあな近き  
 チューリップ稚葉につく変な癖  
 紫陽花の浅黄を雨の搏ち始む  
 起ちざまの弥次郎兵衛めく浅蜷掘  
 あぢさゐの雨に色増す一週間

あぢさゐの雨水奔る溝明り  
片想ひとは葉隠れの桜の実  
浜昼顔おのおのもの目覚め顔

白靴に旅立ちの足早めけり

車中

青嶺に起つ靄のもんもん魚野川

長岡 悠久公園

越後まで足を伸ばして田草月

未草目白押しとはこんなこと

未草残す隙間は雲の為

青年の二拝二拍手楠の杜

梅雨社二拝二拍手して下がる

ひさかきに神籤咲かせて梅雨社

桐の咲くこの方角に出雲崎

えごの花蛇のお尻の大きこと

連れ合いの話途切れずえごの花

葉隠れの朴を一步に外し見る

葉隠れの朴見んものと一步横

山古志村

虫亀闘牛場

牛角力程良く埋まる山のバス

山古志の牛の角突き一番手

赤牛に振り回さるる牛取り勢子

闘牛の漆黒の背に烟る雨

横綱牛幸左衛門に祝儀花

闘牛の足場を固む山の雨

横綱牛藤七相手をじろと見て

其の上（かみ）の牛の角突き二十ヶ村

豆虎の怪力見せる牛角力

つつかけて受けてごつんと牛角力

赤牛が一枚上手牛角力

牛合せ勝者の赤毛引き回され

黒牛の胴をぶるっと牛角力

繁蔵を伊之助が受く牛角力

牛角力朱をあざやかに番付表

牛合はせ三才牛の尾にリボン

牛角力むむと見合へる三才牛

西方の横綱牛の齢を聞く

牛角力雨に降られてあと三番

村内

主申すに影ものと云ふ変り鯉

目もあやに丹頂と云ふ錦鯉

苗箱の早苗びくびく雨を受け

ほのぼのと赤丸一つ錦鯉

ゑびす様取り落とせしか鯛吊草

多羅の芽の摘み方話し嬢と嬢

養鯉法女の根ほり葉ほり聞く

村内を横綱牛を引き戻す

落の葉の削がれこんもり畑隅に

棚田にて

よう放し山古志村の雨最中

ようは土地言葉で魚の意。

よう放しは五月頃の鯉の池入れを指す

よう放しもうよき頃と行々子

よう放し山の天気を見計らひ

棚田の辺形ばかりに草刈れり

植え立ての早苗は雨の水輪中

沢沿ひの胡桃緑陰なせりけり

山古志村胡桃の花踏み中学生

木雫の音のあちこち天南星

ががんぼの猿猴よろしくぶるさがり

鳴子百合木下を縫ふて通ふ風

朝のががんぼ杉菜の森の上を飛ぶ

養鯉池隣り合はせに植田かな

見る度に殖えて子たにし孫たにし

まいまいの一差し舞ふて呉れにけり

山滴り雨の濁りの養鯉池

山滴る谷間の池に鯉育て

登音に寄り来る養鯉池の鯉

葉叢打つ雨の響や鳴子百合

赤紫蘇の未だ幼くて通学路

棚田縁早苗吹かれて田植待つ  
堰の風アオスジアゲハ一揉みに  
山水は唯下るのみ糸とんぼ  
快音を谷に響かせ草刈機  
谷空木登りの一步一步かな  
臺の立つ独活を女のしげしげと  
虎杖の太々登り坂尽きず  
塩辛蜻蛉（しおから）が止まる雀の鉄砲に  
山百合を煽りに煽る堰の風  
すいと寄り独活に目敏き女かな  
独活あれば独活摘むやっぱり女かな  
沢べりの胡桃青葉を鳴らす風  
見当のつかぬ梵字を蝿描く  
後世に蝿書き遺す泥文ン字  
気が付いて虹の片脚棚田の上  
頭を巡らせ探すや虹のもう片脚  
立つ虹の内側の色君知るや  
消えかかり虹の片脚宙ぶらりん  
虹しかと錦鯉飼う村の上  
養鯉池緋鯉北進南進す  
舞ふまいまい雨の水輪に紛れけり  
まいまいの直進そのあともたもたす  
棚田村代田植田を半々に  
養鯉池雨に緋鯉のうすぼんやり  
散る空木古りて磐いろ棚田道  
池の鯉眠らせ蛙の子守唄  
田蛙のこゑひろびろと棚田村  
蛇苺この径ここで行き止り  
池入れの鯉にぼつぽつ雨が来て  
放たれし緋鯉のくるりくるりかな  
真昼の田蛙のあくびが移りさう  
縞蛭のラジオ體操第二番  
散らばりて東西南北田螺の道  
みてくれのこれぎしぎしかすかんぽか  
足許へみるみる寄り来山の蟻  
養鯉池大正三色屯せり  
養鯉池みどり混沌深めけり  
山峡の雨に驚く錦鯉  
棚田道雀の槍をかざし下る

沢胡桃夏川は波翻し  
桐の花棚田の田水透けるなり  
牛合はせ済めば田植が待ちゐたり  
棚田植う笠が真下に見えてをり  
田植人雨の棚田を折り返し  
田植笠ぽつんと谷の谷の底  
五位鷺の鵜の目鷹の目養鯉池  
蛙鳴く棚田棚田の上に村  
見回りの一人小雨の植田の端  
谷空木棚田棚田に細る雨  
俄雨萍右往左往せり  
谷々に空木巡らせ田を植うる  
足音に田べりの蛙算を乱し  
まいまいの円描き損ずこともあり  
一軒に一養鯉池山古志村  
巾広の毛虫薄の葉に余り  
山古志の空木隠りに養鯉池  
棚田の畦踏んづけ発たす豆蛙  
萍の先づ手始めに田縁より  
方寸の余り苗にも朝の風  
雨乍ら日の射し乍ら棚田植う  
山古志の代田植田に日照雨して  
田を亘る風に微笑む植田水  
宿にて  
村長の民宿にて聞く青葉木菟  
青葉木菟ほらほら啼くよたてつづけ  
ほれ君も耳傾けよ青葉木菟  
相槌を打つごとも一つ青葉木菟  
青葉木菟だんまりほうと云ふたきり  
宿主の言ふには杜の青葉木菟  
枕カバー・シート真白に初蛙  
隣室の寝物語に田の蛙  
夜蛙にひろびろ使ふ宿一ト間  
夜の蛙早寝するには喧し  
めいめいが部屋に引き取り夜の蛙  
出雲崎（雲の浦）



このみやのもりのこしたにこどもらとあ  
そぶ

はるひはくれずともよし 良寛

花桐のあなたの佐渡は暮れずともよし

出雲崎妻入りの街燕とぶ

たうたうと潮夏枯れ日本海

雲裂きて佐渡の頭上へ夏夕日

雲の浦津波避難所空木の上

出雲崎燕街道貫けり

出雲崎桐咲く頃の夜来のあめ

紙風船土産に雲の浦を発つ

片脚を海に虹立つ雲の浦

雲の浦かけて卯月の波と風

雲の浦橘月の雲うごく

良寛の里あぢさゐの万理都関(まりつかん)

其の上(かみ)の金の荷揚げ路燕抜け

雲の浦昼夜を舎(や)めず卯浪寄せ

桐咲いて嘗て辺境雲の浦

早苗月非登利(ひとり)あ處非(そび)の

旅をして

朱夏の旅詩(うた)の囊(ふくろ)を携え

て

良寛の指文字真似て五月空

海上の鳶吹き落とす五月寒

左手より弥彦山(やひこ)へ寄せて高卯浪

束の間の佐渡や明けゆく卯浪の上

桐咲いて鰻の寝床のやうな町

山若葉負へる町並み出雲崎

夕焼けの佐渡を良寛ならずとも

雲の浦日光皐月の雲破り

良寛堂

良寛堂卯月の海へ展けけり

良寛堂海へ筒抜け松の芯

碑に千鳥を慕ふ以南の句

良寛堂卯月半ばの雀来て

良寛堂五月雀の屯せり

良寛の気性さながらみどり立つ

良寛堂翔たんばかりにみどり立つ  
みどり立つ難閑耳(なかに)ぼつんと良寛

堂

良寛堂前にて下車す夏帽子

水揚げ場

夏枯れの糶場に口細かれいかな

水揚げのあんこうピロード光りせり

水揚場氷と水の明と暗

馬糞海胆箱に溢れて糶られけり

鮎の雑魚寝せしまま糶られけり

あんかうのゼラチン状の腹糶られ

水揚場隅に卯月の台秤

自転車の荷台にあんかう積み帰る

光照寺

白おだまき良寛剃髪せし寺に

良寛の発心おだまき咲ける寺

鈴蘭を侍らせ良寛出家の碑

良寛の発心芍薬蕾む寺

夏みかんここに良寛発心す

花うつぎ栄蔵発心起こせし地

栄蔵は良寛の少年期の名

良寛の桑門の道酔漿草より

橘月良寛剃髪せし寺に

目を据ふる卯浪の果てに佐渡が見え

あいの風弥彦山(やひこ)の沖に浪白らめ

出雲崎円明院の潮見草

芭蕉園

佐渡を乗す卯浪望まれ芭蕉像

俳諧伝統塚

蕉門の三人(みたり)杖止む空木の辺

宿にて

卯浪寄せ佐渡を真正面の宿  
酔海雲のとろ味地酒は八海山  
うすぼんやり佐渡の辺りに烏賊釣火  
涼味満点天上大風てふ地酒

和島村

良寛のいろはを夏の鳶書ける  
越後線滴る弥彦山（やひこ）引き寄せて  
良寛の書のかな文字の青すすき  
おてんと様蝮の道たること證す  
良寛の書を真似田螺の書く文ン字  
良寛の里璞（あらたま）の蛙ごゑ  
酒米の田植も済むや越の國

木村家

戒語百ばかりありと聞けば  
良寛の戒語空木の花の数  
木村家の庭に雨乾ぬ車輪梅  
かたばみを咲かせ良寛遷化の家  
一八に見ゆ良寛の筆運び  
木村家の石燈籠に梅雨間近

隆泉寺

良寛墓所尋めゆく頬に植田風  
良寛の綽名からすの夏迎ふ  
夏鴉鳴いて良寛示寂の地  
良寛像背に頭に若葉明りせり  
良寛墓所毛虫も托鉢姿して  
柿若葉良寛の書を蔵す寺  
蛞蝓に好かれて良寛さんの墓  
四角張る良寛の墓若葉風  
良寛像足許埋む桜しべ  
良寛の墓所に微笑む桜の実  
「はちすの露」切に思ほゆ苔の花  
良寛の墓所あり珊瑚樹若葉して

小肥りの毛虫良寛墓石馳す  
良寛の墓で一服夏帽子

宇奈具志神社（出田の宮）

何れの処にか悉炎（じょうえん）を消  
さむ 独り愛す出田の宮  
民々耳に盈（み）つるの蟬 冷々林を  
出づるの風

夏けやき戦ぎて耳に盈つ葉音  
通草蔓良寛の書の筆運び  
起き伏し木村家近く夏けやき

国上山（くがみやま）

山百合の国上山攀じ息切らず  
木苺の実抓み径は乙子祠へ  
国上山源八新田田が植り  
国上山植田見下ろし息つける  
国上山青葉の葉騒鳶挙げて  
蛇苺乙子草庵もう間近  
国上山一息ついて桐仰ぐ  
国上山桐の花どき日本海  
海統べて弥彦山（やひこ）と国上山（くが  
み）滴れり  
書に歌に良寛忍ぶ五月山

国上寺（こくじょうじ）

国上寺一花群抜く朴のはな  
天界の朴の上に朴国上寺  
雲高山国上寺とや桐咲かせ  
夏鴉こゑ逆落とす国上寺  
新緑の山毛櫨の森負ひ国上寺  
夏鴉こゑを虚ろに国上寺  
竹秋の本堂乾ぶ国上寺  
夏鴉何を託宣国上寺  
夏鴉に身を化し弥彦大明神

五合庵

五合庵老走り根に迫る梅雨  
病葉の朽つ香萬年上人塚  
若楓洩れくる日差し五合庵  
五合庵とんと音して夏落葉  
良寛の疑団大きく松ぼくり  
堂縁にかがんぼ継る五合庵  
木洩れ日に岩の苔径五合庵

乙子神社

生涯 身を立つるに懶  
生涯 身を立つるに懶  
(ものう)く

騰々任天真 騰々(とうとう)として  
天真に任(まか)す

囊中三升米 囊中(のうちゅう) 三  
升の米

炉辺一束薪 炉辺 一束の薪  
誰問迷悟跡 誰か問わん 迷悟の跡

何知名利塵 何ぞ知らん 名利の塵  
夜雨草庵裡 夜雨 草庵の裡(うら)

雙脚等間伸 雙脚(そうきやく)等間  
に伸ばす

竹の葉散る名利の塵を払ふごと

古りに古る乙子草庵竹の秋

乙子祠(おとごし)の木苺の実を頂戴す  
乙子祠に稚(わか)き蜘蛛の子囀を張れり

病葉降る乙子草庵その四辺

寺泊

海猫のくわいくわい佐渡へ発つフェリー  
鳥賊釣船百の裸灯のきんきらきん  
鳥賊釣船波にたぶたぶ寺泊  
弥彦山滴るを指呼稚鮎釣る

フェリー佐渡(赤泊)へ

えっさ丸素木の箱に朱鷺基金  
えっさ丸あい押しして発つ弥彦山晴れ  
金山の佐渡染め竹秋一落暉  
太々と水脈の光芒夏の航

白靴に乗船始まるえっさ丸  
船室に雑魚寝卯波の為すままに

卯波立つ沖へ乗り出すえっさ丸  
山滴る弥彦山は雲を引き留めて

えっさ丸離岸弥彦山を廻しけり  
龜の頭のごとくに朱夏の雲の浦

佐渡航路朱夏の団雲行き交ふて  
船室に胡座かき見る五月場所

佐渡航路半ば真白き海猫に逢ふ  
見えてくる佐渡の全幅霞越し

二等船室夏帽枕にごろ寝して  
えっさ丸佐渡の青嶺を引き寄せて

束の間の夕日フェリーに沿ふ海猫に  
佐渡に着くフェリー出迎ふつばくらめ

夕焼けてずんと近づく佐渡ヶ島

赤泊

佐渡島至る処に小判草  
磯畑に婆みて朝の苺採  
岩伝ふ子蛸覗ける朝の蟹  
老蟹の昔語りにアブラメ採

アブラメはアイナメ  
サザエ・アワビ・トコブシ入江の尖(さき)  
につく

朝の舟揺りつ浦人銀葉草(ギバサ)搔く  
入江より漕ぎ出て朝のカッチキ釣

カッチキは鳥賊の子  
葱坊主佐渡の夜明けは海よりす

朝の畑白さやゑんどう目許伏せ  
藻畳の中にて蟹の目覚むらん

夏の朝長藻の睡り覚めやらす  
暁の沖ゆく海鵜の間合かな

たゆたへる卯波に日蓮波題目  
かがんぼの交みては翔ぶ複葉機  
蛙鳴く喉の辺りが彷彿と  
はつなつの蛸が目覚むる礁陰  
蛸を突く舟徘徊す浦湊  
大蛸は大岩に棲む昔より  
紅ずわい揚がる海原藻を浮べ  
卯波立つ日本海に拾ひ物

宿にて

宿で酌む佐渡の地酒にイシモズク  
ハナモズクその掻き方を云々す  
紅ずわい丸々一匹出て夕餉  
民宿の蠅帳覆ふ焼魚  
宿の膳こんがり焼きの黒ハチメ  
ハチメはあこう。赤魚  
対岸に弥彦山（やひこ）鳥賊釣る火が点る  
鳥賊釣火も一つ延長線上に

赤泊より真野新町へ

桐の花桐の花見て佐渡の旅  
外海府の甘草ももう咲く頃と  
桐の咲く佐渡山中を遂に抜け

大膳神社

参道に吹き込む真野の植田風  
能舞台脇正面の草刈れり  
蜻蛉も一差し舞へる能舞台  
能舞台真野の蛙の囃し方  
ヒメジオンぼっぽぼと能舞台  
夕迫る真野の棚田の早苗束  
松羽目に竹の葉の降る能舞台  
老鶯の中葺替の能舞台  
能舞台蛙も一手仕る  
葺替職人上と下とで押し問答

世尊寺

睡蓮に糸を懸けしは蜘蛛ならん  
サイクリング自転車止むる植田べり  
サイクリング田蛙に耳傾けて

妙宣寺

難しき貌して仁王百合の昼  
赤松の大黒柱涼呼ぶ寺

本堂の渡り廊抜け黒揚羽

祖師堂の葺伝ひに黒揚羽

黄しやうぶに筒抜けガイド流刑譚

国分寺

田蛙の貝摺り合はすごとくなり

田蛙の昼を恢々夜を恢々

かがんぼの水平飛行国分寺

瑠璃堂

堂縁に葺替え職人昼餉とる

国分寺礎石を攀ずるだんご虫

五月光普し砌の玉石に

佐渡晴れてここも葺替能舞台

根本寺

田に倦みしどぜう覗ける金北山

金北山けふは晴れたと田のどぜう

面構え佐渡随一のどぜうなり

芍薬の珠日に熱す根本寺

田蛙も塚原問答根本寺

語り合ふ緋鯉と緋鯉根本寺

そば処塚原田蛙聞きながら

国仲のどぜう抓みに驚の降る

本間家能舞台

能舞台薄暑覚ゆる瀬戸瓦

能舞台一二三のみどり立つ

牛尾神社

涼しかる杉の下風能舞台

老松の走り根隆と能舞台

老鶯の笛方つとむ能舞台

別称 安産杉

小満の絵馬鮮しき孕み杉

蟻よぎる杉の下影能舞台

能楽の里

ワキごゑの植田の鴉能の里

ビール酌む湖畔つまみに金北山

両津

登り下り大佐渡小佐渡竹の秋

大佐渡のだんだん田圃の田植かな

目に飛び込む佐渡山中の朴の花

強水（こわみず）に佐渡の田植の始まれり

強水は岩間とり流れ出す冷水

強水に田植佐渡産コシヒカリ

大佐渡の夕栄惜しむつばくらめ

はつなつの団雲の影どんでん山

大佐渡の青嶺団雲一つづゝ

佐渡田植えだんだん田んぼは渚まで

老鶯に早苗すくすく伸びてをり

フェリー新潟へ

夏近く良平の絵の佐渡航路

二時間と何んぼの夏の佐渡航路

おけさの佐渡満喫ツアー乗船す

山滴る島を離れておけさ丸

フェリー離岸金北山を一転す

梅雨雀両津の赤燈台に来て

おけさ丸氷のいろの水脈を曳き

日焼子の鬼ごっこするおけさ丸

佐渡航路呼び出しかかるバスガイド

日焼けして二等船室雑魚寝組

二等船室胡座・雑魚寝に夏の航

ごろ寝して海月の心地夏の航

二等船室隣より来る蠅払ふ

お昼寝の往復艀船室に

夏の陽に光芒なせる水脈の幅

佐渡航路舷側を過ぐほんだわら

其の上（かみ）の病院船の氷菓いろ

一万噸フェリー卵波を切りすすむ

おけさ丸右舷左舷に夏の霧

おけさ丸ランチは佐渡産コシヒカリ

スナックの冷水十円おけさ丸

水脈を見てフェリー船尾に氷菓舐む

新潟

笹粽ぶる下げ越の旅戻り

新潟の日の丸落暉夏空に

小網代湾ーアカテガニの森、チゴガニの干  
潟

三浦道寸祭あるとて油壺におもむく。が道  
寸祭に

ゆくにあらず。こちらの関心は小網代湾の  
赤手蟹。

小網代湾に降りようとすれば何やらぞろぞ  
ろとルーペ

を持った一団。雑草に立ったりしゃがんだ  
り。聞けば

日本漢方薬会のフィールド観察とのこと。

先頭の者が

薬草に名札を掛け途中の者がそれを観察、  
最後尾の者が

それを外してゆく手馴れたものだ。葦原に  
降りればここ

にも好き者。サラサトンボというて神奈川  
県ではここにしか

いないという蜻蛉を撮ろうと待ちかまえて  
いた。お陰でこちら

もよいお勉強となった。干潟に遊べばチゴ  
ガニの大歓迎。

これはこれはのもてなしであった。

森

リュック負ひアカテガニある半島まで

くさぐさの覚書めく蝮の道

風雅者川とんぼ森散策す

アカテガニ葎の消えたる音のこす

道塞ぐ倒木アカテガニの森

オニシバリ大江山でもあるまいに

オニシバリはジンチョウゲ科

木洩れ日の谷の朽ち木に川とんぼ

溪流性アメンボ神出鬼没の森

この沢に隠棲のシマアメンボウ

揉んでみて我鼻先に山ハツカ

軽快になほ軽快にあめんぼう

イボ草の森の中よりアカテガニ

糸とんぼ終に止まるほどの岩か

薬草取この山中にオニシバリ

サラサヤンマに目の色変えてフォトグラフ

アー

道一本引き込みアカテガニの森

迷ひたる森の小川に蝮の道

朱の蟹の奔る残像犬枇杷に

蟹の棲む谷翔ぶ珍品蜻蛉かな

闖入者アカテガニある谷を下る

半夏生ルーペ片手に観察会

蝮の道茲に刻せるイノデ谷

干潟

気散じな虫首擡げチゴガニ見に

チゴガニの見方はしゃがんで頭を低く

チゴガニのおっかなびつくり穴を出づ

チゴガニの百千萬と我对す

チゴガニに門出の宴を祝がるごと

チゴガニの歓迎振りに啞然とす

蟹穴を出づるを怯ます影法師

チゴガニのラジオ体操第二番

チゴガニのラジオ体操散開し

チゴガニの上げ潮招く踊かな

じっとしてチゴガニ穴を出づるを待つ

チゴガニの踊わらわら千萬も

チゴガニの鉢上ぐとき葎の風

蟹奔らせ青嵐到る巾着湾

己(し)が穴にもぐり損ねし蟹五六

弾みに弾むコメツキガニの脚力は

鉢振り下ろしチゴガニ転けさうに

チゴガニの鉢上げ下げバツタンコ

芦騒にチゴガニ万歳するリズム

穴より目我チゴガニの視野にあり

チゴガニの遠目利く中闖入者

上げ潮はもとより歓迎潟チゴガニ

穴に脚かけて警戒チゴガニは

チゴガニは「勝つて来るぞ」の万歳蟹  
チゴガニに潮が上げ来る芦襖  
チゴガニの集落ヨシのブッシュ背に  
チゴガニの踊を真似て去なんとす  
チゴガニの歓迎の数算ふべし  
チゴガニのダンス伴奏芦の風  
チゴガニの応援団の白手套  
芦騒の煽りくらひてコメツキガニ  
泥漁り巾着湾のコメツキガニ  
海蜷棲むヨットハーバーこの奥に  
葭原

葭原に道の消えをり鬼やんま  
葭原を前にトンボのホバリング  
夏鳥のピピコピピコと芦向う  
サラサトンボ

芦原が好みの珍品蜻蛉かな  
巾着湾の芦の上蜻蛉翻り  
小網代湾とり水戸浜へ

フレームを滑り這ひ出て西瓜蔓  
フレームに透きぼちぼちとメロンの花  
崎に来て覚えの道の桜の実  
南瓜蔓弧を為す台地に荒々し  
南瓜実る日へ幾許ぞ節くれ蔓  
鳶の糞メロンの蔓を汚しけり  
ハイキング妻は日傘を手放さず  
桜の実吾が枝寄せ妻が採る  
桜の実ふふむ残りは妻の掌へ  
農作業南瓜の玉敷岬晴れて  
手間入らず南瓜畑が岬に殖ゆ  
南瓜畑後生大事に一本蔓  
南瓜西瓜の蔓もの這はす崎の丘

山古志村・良寛の里・佐渡 拾遺  
青がえるきぞの雨量の信濃川

五合庵梅雨入り前の壁明り  
船窓に高卯浪みて横坐り  
谷空木どつと零れて曲り路に  
睡蓮の雨滴まるばせ何か発つ  
出雲崎桐の花打つ雨にぶし  
佐渡航路復路の梅雨の浪にぶき  
雨や来む卯浪敷き詰む日本海  
金北山晴れてうきうき泥鰯どち  
きぞの梅雨湛え深しも養鯉池  
竹の葉散る良寛の世を語り草  
珠を掌に増上漫の蝮草  
佐渡沖に挙る卯月の波頭  
佐渡ヶ島畳々として照り卯浪  
蔓の毳（ケバ）夏百日を間近にす  
養鯉池混沌緋鯉おっ放す  
みどり立つ国上（くがみ）青嶺の彩に酔ふ  
国上山麓田植えの田づらかな  
出雲崎桐の花搏ち夜陰の雨  
佐渡山中日を経し桐に日の粗き  
国上山青嵐湧きくるめく葉  
棚田刈刈り洩らされて蛇苺  
赤泊蛸棲む浦の乱礁に  
安寿の里卯浪たゆたひ唄ふなり  
赤泊夏暁浮藻の数知れず  
桐の花天に配すは違ひ棚  
佐渡航路寄する卯浪の彩親疎  
かがんぼに跨がるゝ葉の露零す  
日に熱す一千枚の羊草  
乾きつぷり申し分なき羊草  
独り気付いて空木雪崩るる上の虹  
玉苗の足踏みしをり棚田べり  
蛙蛙とんで植田の水乱す  
カルキ抜き金魚の水替え縁に桶  
迅雷の墜つる響きに臍固む  
金魚の餌吾らに三度の米の飯  
水替えの金魚を洗面器に揺らし  
蠅の死のあっけなかりし脚挙げて  
水替えの金魚にあめの降るならめ

唇のごとき牛乳瓶に夏  
蚕豆の居る部屋居ぬ部屋独り剥く  
昼の風窓より入る心太  
ところてん物足らなくも昼の風  
ところてん水亦うまき頃となり  
青梅雨の噛めば月餅油こき  
月餅の餡の松の実犬歯大  
ほろ酔ひの小鉢の蚕豆つまむ指  
ピアノとは違ふ感触茹でそら豆  
ビール酌むすててこ季となりにけり  
ほろ酔ひのこれが最後の蚕豆か



## 雑詠

初もの枇杷つんつるりと剥けにけり  
 種無しの流行る世なれど然りとて枇杷  
 この辺で一区切りつけ扱と枇杷  
 かがんぼや旅行案内机にひろげ  
 門の方ふつと見遣れば夏つばき  
 けふ立夏とて雲の彩いまだしや  
 まひまひの独り遊びに白日輪  
 大南風楠の葉叢を揺れ移り  
 六月の蜘蛛を走らす厠壁  
 イチローの投打愉しみ祭月  
 葉もて齒痛を抑ふ芒種かな  
 蒸れさうと云ふて来さうな薔薇真紅  
 夏椿そこはかと咲く其処へ朝日  
 六月の始めの雨の音を聞く  
 ひめぢよをんそこらばたばた暮れて来ぬ  
 打集ひ何を芒種の鍛錬会  
 仕方なくあめんぼ覗いてゐたりけり  
 解釈は宜しく田螺に謎懸けホ句  
 ほてい草やたら叩いて昼の雨  
 黴させぬ仕掛けくさぐさ梅雨食品  
 布袋草金魚に買うて雨の街  
 六月の雨を見ながら烏龍茶  
 あぢさゐもて市民公園飾り立て  
 あぢさゐにまっさをな風起ちにけり  
 甚平の似合いの齢と云はれても  
 共食いの金魚話題にして食後  
 迅雷の三連発や雨呼べる  
 雷に切り刻まれをり鋸山  
 軽雷の鳴り遅れたる一つかな  
 これ程の彩もつ虹を立たせし  
 鳴神がドタバタ罷り出づる景  
 鳴神の雨降らせんと意地を見せ  
 遠雷の余韻愉しむ烏龍茶  
 軽雷のとりとめもなくポップコーン  
 京劇の殺陣（たて）稽古めく雷最中

朝方を寝ぼけ眼で墜つ雷も  
 雷のあと馳せ来る雨の整然と  
 雷光に木像ガルーダ眼を剥いて  
 雷鳴つて鍛錬会は出羽の方  
 二タ三言寝床で交はす雷のこと  
 鳴神の団扇太鼓の試し打ち  
 尻すぼめ雷立ち直り海の方  
 はたた神終りの方を口ごもる  
 落ち方と云ふものあろうがはたた神  
 自慢げに太鼓鳴すや子雷  
 鳴神の自慢の太鼓初披露  
 言葉尻濁せるごとく雷了る  
 水遊びの映像真夏日けふ記録  
 鉄漿蜻蛉（おはぐろ）に倒木の関森の径  
 鬼灯に前後し届く風夕べ  
 青芦に吹き込む巾着湾の風  
 風鈴の夕風捉え小手馴らし  
 すててこで通すならひの祭月  
 かがんぼの片外れして前の脚  
 大リーグすててこ観戦愉しめり  
 軍配の返りたるごとく涼風来  
 卷蔓に岬の日遍し花メロン  
 独活どんと届き朝夕独活料理  
 幕下の軽雷にして肩すかし  
 軽雷のあと迅雷の耳直し  
 あさつての方から聞え軽き雷  
 朝鮮朝顔首長くして咲くを待つ  
 エンゼルトランペット音痴の吾に咲く  
 良寛の里より戻り毬あぢさゐ  
 あぢさゐのうす碧帯びぬ大星雲  
 早々落つ実梅三つの申し分  
 カアネーション母とし贈らる妻なりき  
 濡れ縁に落梅竝べ母早起き  
 葛の蔓うち被りたる道埃  
 冷奴箸おもむろに何処欠かん  
 筍のここに噴き出し建長寺  
 心太風のごとくに日が過ぎて  
 少女らのジーパンの毳（ケバ）半夏生

噴水のあの手この手の水柱  
大リーグ真夏勝利の方程式  
すててこで通す家居のこれよりぞ  
冷奴貴方も齢と云はれをり  
齢のこと妻に茶化され冷奴  
独活料理サクと俎響かせて  
冷奴水のごとくに風通り  
晩酌のきのふ蚕豆けふ地蛸  
拇指を以て蚕豆味へり  
実梅落ち模糊と庭土応えけり

旅 拾遺

佐渡方海と花桐紺紫紺  
養鯉池空木散り込む水寂びて  
緋鯉放つ池ごしらへや山古志村  
風浪の佐渡を擡ぐる高卯浪  
卯浪駆く果てまぶしめり佐渡航路  
青梅雨に間もなく入らん打上藻  
いちめん夏めく潮路えつさ丸  
流れ藻の長短首夏の佐渡航路  
根本寺紫さめし桐の花  
藻の名などわからんと蜃梅雨湊  
金北山晴れて田蛙唄はずや  
虹立ちて鯉飼ふ村の空啓（ひら）き  
縞馬の縞柄にも似て対浴衣  
あめんぼう交む水辺に寄らんとす  
佐渡は未だ卯浪の上に後甲板

東慶寺

東慶寺山門毛虫駆け込めり  
参詣の足にかけるな這ひ蚯蚓  
臘梅の実におやおやと人の倚る  
ほたるぶくろ去り状蔵す寺明るく  
去り状を見て来てほたるぶくろの辺  
哲人の墓の背ウに著莪雪崩れ  
ぎぼうし咲く縁切寺に三姉妹  
断層の千筋走る岩たばこ  
雨の日の葉影うつすら岩たばこ  
岩たばこ雨の匂ひのするばかり  
岩たばこ嗅ぐやもとより匂ひなし  
文字摺草紅潮の朝やつて来ぬ  
文字摺草また生えて来て喜ばし  
文字摺草ここにもそこにも喜ばし  
見染めたるときのときめき文字摺草  
振花の捻子くると巻きくると巻き  
視野  
文字摺草一つの他は皆消えて  
詩の友よ振花のごと立脚せよ  
ねじ花に鎮もる寺や松ヶ岡  
路地路地に実梅実梅の松ヶ岡  
蟻の糧貯蓄は美德と習ひ来て  
蟻背負ふもの一つに蝶の翅

明月院

傘すばむ音のぱたりとあじさる寺  
あじさるの彩目に宿し谷戸の径  
あじさるの蔭縫へる径紛らはし  
時頼公墓所暗がりに苔明り  
最明寺殿の毒殺実梅に斑  
最明寺殿の眼光著莪明り  
青芭蕉叩く雨音聞けとこそ  
青芭蕉雨滴零せる音に遇ふ  
長身の花沙羅双樹煙雨帯び  
あじさると学生諸君に溢る寺

沙羅双樹の幹の太さを先づ云へり  
かきつばた風に折り目のあるごとし  
かきつばた蒼きりと江戸紫  
かきつばた水路に殖ゆる雨小紋  
かきつばたその振袖に風孕まし  
萍殖えアマゾンの森なせりけり  
長身の紺の隣のあやめ美（よ）し  
あはて者かかり蜘蛛の困大だるみ  
あめんぼう覗きみるのみ他意あらず  
通り雨来てもひるまぬあめんぼう  
あめんぼう勇み正面衝突す  
あめんぼうの行方追ひ止め沼離る  
つくづくと翅の上げ下げ墨とんぼ

円覚寺

禅寺の実梅旺々然として  
濃あじさる塔頭の子が傘負ふて  
姫沙羅を随所に梅雨に籠る寺  
広前に楓の翼果神籤めく  
禅窟に一陣の風ハナイカダ  
百合つぼむほんのぼつちり百合つぼむ  
大虻がほたるぶくろの鐘撞きに  
円覚寺見晴らし茶屋の心太  
山寺の磴に遊んで梅雨雀  
禅窟の岩場のほたるぶくろかな  
花掲ぐとき泰山木たり得たり  
破れ穴を塞ぎて萍平然と  
蟻んこに泰山木の影さしぬ  
禅寺の実梅打ち雨兆しくる

鎌倉

女貞花しよぼしよぼ雨となりけり  
葉桜の下で考ふ次の径  
荒梅雨の先づ幹を見る泰山木  
あじさるにすたとんすたとん横須賀線  
江ノ電で二夕駅先まで走り梅雨  
北鎌倉あじさる季の傘の彩

寺巡りあじさみ彩のレエンコート  
紫陽花の段々坂下り由比ヶ浜  
熟れ枇杷の雫を零す道に出て  
熟れ枇杷にだらだら雨となりにけり  
上り易き雨と覚えて立葵

雑詠

格子縞羽織り毛虫の三太夫  
ひた急ぐ毛虫の背ナの山津浪  
アラヨツと蠅の一心太助かな  
鈇の音遠くよりして薔薇騒然  
薔薇園の薔薇に詩囊を膨らませ  
散りざまの絵ごころ誘ふ薔薇四五片  
取り繕ふ仮病に似たる梅雨籠り  
枇杷を剥く眉の辺りが明るくて  
梅雨入宣言大風畿内過ぎてより  
梅雨入りの大学病院軍艦めく  
夾竹桃運動場に子供ごゑ  
図書館の休館憎む悪なすび  
昼顔を見しことぽつり云ひ出せる  
深梅雨の杜大櫓どんと据え  
裕次郎の葉山子犬も汐浴びす  
葎切に念を押されてゐるごとし  
夏掛や深川鼠（ねず）の魚模様  
諸肌を脱ぎいなせなる雲の峰  
山はぼこんと波はぺこんと夏岬  
恙なき日を重ねよと夏つばき  
掌をすぼめるやうに花閉づ夏つばき  
ひたぶるにうらぶれ朝鮮朝顔了ふ  
水無月の音籠らせて朝の雨  
梅雨どきの鰐が御用となるニュース  
日曜日なり金魚見てリラックス  
あめんぼの東離西散腕白らに  
金魚糺る兵顔（つはものがほ）の男どち  
生け舟に札投げ込まれ金魚糺  
虎ノ子の預金はたいて夏の旅  
立葵外（と）に見えてゐる昼ごこち  
イチローの打法健在夏の陣

棕櫚の花ことごと散るを傍観す  
青コールトール被れり石蓴岩  
ハンカチは薄手がよけれ岬吟行  
まいまいの描く弧毎日倅か  
灯を取りに出向き来るなり金亀虫  
金魚など佳しカーテンの裾模様  
鳴神の気つぶ見せたる勇み肌  
墜ちざまの下山に似たる雷の音  
力み過ぎ雷公空を踏み抜きぬ  
狎れ合ひの雷退屈の遣り場なし  
車窓よりラジオ流して瓜摘花  
行末はペレか芝生に蹴蹴る子  
垣ぐるみ払ふ枯蔓群がるを  
底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな

横浜自然観察の森

我家よりバスにて十駅程先に螢狩りの森あり。

甚だ足場ヨロシク、定年前には会社を早引け

してワンカップ一本持込み源氏螢を堪能せし

事あり。この地にはもう一つ平家螢の山窪あり。

この度は其を堪能せんと洒落たり。

曳売のをばさん曰く「螢出た」

檜の磊落椎の生真面目夏の山

スゲ属の草の一つか螢沢

青すすきからめ取らんと蔓のさき

あやあかしの草蜘蛛亘る水のうへ

イボタの木薄暗く梅雨始まりぬ

山道の蜘蛛の糸切る胸なりし

野兎の吾が方を見る不審顔

山萩に散策の目を細めたる

バツタの子ヒエの細葉に脚余る

方寸の水あれば足る水馬

若武者の勇み足もてあめんぼう

まるまると螢の糧のサカマキガイ

葛の蔓鎌首擡げ昼の月

空木の実山のバタバタ雨に遇ふ

水草のそこそこ暮れて螢どき

浅沙の茎ひよろひよると水昏れて来ぬ

夕間暮茅花にぼかんとしてゐたり

木苺の実点る平家螢谷

犬枇杷に山の夕焼け時かけて

梅雨夕焼け山の青木の葉を染めて

さつきまで見えぬし水木螢谷

茅花の穂まだほの見えて螢谷

螢狩り足下そろそろ覚束な

螢待つ女のくつくつ笑ひして

螢待つ奇特の人の中に吾も

上ずれるこゑに螢の第一燈

山蛙カスタネットを高らかに

一つ目のどうやら螢の点しどき

風起こり飛んだ飛んだと螢火が

木陰より螢出てきた出てきたと

螢出る方に人ごゑ片寄りて

木陰にて螢モールス信号打つ

源氏疾うに平家これから螢谷

ブッシュの奥平家螢の隠れ家は

谷戸の月平家螢が隠れ棲む

水木谷一ト度暮れて螢谷

ほたる待つ谷戸にわくわくしてゐたり

矢も盾もたまらなくなり螢とぶ

ほうたるに月が宴の役を振る

薄闇に目隠しされて螢狩り

あやかしの風吹き亘る螢谷

木道を下敷きにして螢の句

ほうたるの出る日の予感当りけり

ゆつたりと構え螢の出を待てり

襟首の辺りへ藪蚊の高音部

螢狩り子供ぞろぞろ現れて

螢狩り懐中電灯振り回し

をじさんと云はれて螢の出を問はる

今日は居ずホタルガイドのボランティア

定点の平家螢は草の尖

三つ目の螢が中に割り込んで

三つみて螢のつくる三角形

吹き起こる風に螢火吹き消され

ほたるの火の真直ぐ昇る茎ならん

ほうたるのぴっかりぽっかり後ろにも

その最中はたと風絶え螢火も

平家螢薄きひかりを曳きにけり

螢火は月の明さと別にあり

一転し風ひるがへれば螢火も

トンボ切るやうに螢の軽業師

時代めく螢の谷の底に吾れ

ほたる火の人に當たるもおかまいなく  
ほうたるの谷に注げり月明り  
月明り螢の宿に注ぎけり  
時代めく螢が飛んで真正面  
この谷に月と私と草螢  
ほたる飛ぶ月の明さの中にゐる  
づかづかと近寄つてくる螢あり  
人の頭の高さを飛んで沢螢  
愛嬌を振りまく如き螢もゐて  
ときに雄渾ときに可憐に風ほたる  
ほたる火のまだまだ舞うてゐる時間  
ほうたるの大きさを云ふ女ごゑ  
螢火を団扇に受けて粹な女（ひと）  
のんのんと沼の上飛ぶ草螢  
吹き起こる風によるめく草螢  
ほたるにも気に喰わぬ風あると見え  
螢火のやつと落ち着く風の後  
掌に髪に螢臭さの移りけり  
ほたる詠む句帖もいつしか湿りがち  
木道の真ん中あるく草螢  
木道があるく螢の速さかな  
さる人に  
遅れ来し人にほうたる居るには居る  
螢出る刻のとつくに過ぎゐたり  
宵っぱり山のほうたる径をゆく  
螢火を胸に分けゆく山の径  
擦り抜けてゆくほうたるに溜息も  
山道に遅まきながらと出し螢  
平家螢潮時とみて引つ込みぬ  
螢火の消え入る時の終にくる  
もう飛ばぬほうたる風も淋しからん  
更けぬればこのまま螢の宿借らん  
螢見つ腰をやうやう上げにけり  
さてと云ひ螢見の腰上げにけり  
夜間へり駆け抜け螢沢のそら

螢狩り戻りがてらの街明り

裏紙に書き止めておくホタルの句

属目

初孫 美雨へ

サイダー呑み孫は鳩の目したりけり  
孫蟻に呼び掛く「どこへゆくんだよう」  
蟻んこをやっつけて来て孫威張る

村田英雄逝く

梅雨なんぞ吹き飛ばす唄皆の衆  
ゲジゲジ眉ぴくりと上げて「無法松」

俳梅雨「人生劇場」高らかに

新社員夢あらばこそ「王将」を

新社員よ世渡り吉良の仁吉たれ

温め酒泣かされましたよあんたには

唄声も夢の又夢俳梅雨

空蝉の眼手中に炯々と

ああ年金暮らし

清水の舞台飛び降りさくらんぼ  
初ものの西瓜の味と云ひなせる

宵宮の櫓の樹齡推し量る

夢の中斜めにのぼる瑠璃揚羽

ほたるぶくるガウデイの塔群るゝごと

舟虫追ひ蛸壺色の村に入る

金魚の死因突き止めて来て松笠病

小手調べ梅雨の走りの雷として

瑞鹿山大円覚聖禪寺の夏

夏鴉開口一番「夜が明けた」

百合を嗅ぎ気性激しき人ではある

朝靄に起き出す蛾族節足族

向日葵の炯眼海は紺深め

懐古

ロシア船籍

シャリアピン勇魚の如く喜雨を浴び

甲板に天文教室夏の航  
サザンクロス胸中に涼吹き込めり  
ラバウルへ夏の密雲生る中  
ロシア船員跣足であるくタロ芋島

昂然と急雨に佇てる夏櫂

小鉢の蚕豆惜しみつつ食ぶ晩酌や  
ごったがへす菖蒲田の径譲り合ひ  
仇とは云はねど妻の蟻嫌ひ

たぐり寄す夏掛其の内夜も明けん  
夏掛に手を置き遠き音を聞く  
練り直す想ひの矢先驟雨来る

蠅憎き世の懐かしや昼撫す

明易の己に見えぬそそけ髪

やり遂げぬ裡につかづか夏が来る

眼鏡の置処忘れぬやうにして忘れ

かがんぼの珍客机辺外れゆきぬ

流れ藻の漂ふごとく昼寝して

庭先に出す棕櫚竹に夏の雨

部屋点せば枇杷いろの灯に夕づきぬ

火取虫どきとはなれり辞書を引く

火取虫呼び込み電球祝福す

火取蛾に電球の白極まれり

あめんぼう孤り激しく瀬に抗す

目に触るゝことにも羞じて文字摺草

萍の雨に踊れるカーニバル

夏祭来て囃さるる吾が齢

持ちぐされの最たるものに黴の本

鎌倉のあじさい寺 明月院の次ぎには  
川崎のあじさい寺 妙楽寺へ行った。

宿河原周辺

八幡宮夏至の櫓が亭々と

雨跳ねる舗道となりぬ鳳仙花

梅雨雀乗りて屋外瓦斯ボンベ

赤紫蘇の微光古鏡に似たりけり

千手観音御ん手垂るかに葛の蔓

妙楽寺

額の花吾妻鏡にみえる寺

あぢさゐ寺口を噤んで苑巡る

菩提樹の夏至の樹肌に手を添えて

人一人通れる程の萩小径

すれ違ひざま紫陽花の毬揺らす

長尾神社

熊シデの神社で知らる梅雨の森

熊シデの花序のもつさり梅雨社

熊シデの森に巢懸けぬ夏鴉

威嚇して地を掠め翔ぶ親鴉

子鴉の姿もやがて樟樹頭

梅雨晴間憩ふ社にだんご虫

みるからに榊はとつつき悪き花

夏櫓幹森閑と朝の相

何もかも足る世に殖えて夏鴉

通行人臆せぬ貌の梅雨雀

御神域しんと鴉の子育てどき

東高根森林公園

棗の花日照雨細かく降りにけり

宝鐸草森の冥さに眼の馴れて

半夏生東の方より晴れてくる

青すすきしるがね雨滴止めたる

睡蓮に昨夜の雨量の知られたる

とてつもなき肺活量や牛蛙

ざりがに捕り餌はもちろんするめいか

蛙跳ね浅沙たふたふたふたふと

あめんばう木屑のごときがやたら跳ね

水遁の術もて泛けるあめんばう

河骨に水位足らざる隠れ沼

河骨に鯉はうねりて近づけり

半夏生とりつくしまも無き風情

雨上り谷戸の河骨影整す

沼一面浅沙の座布団敷き詰めぬ

溝萩の綻びかけに目を細め

鬼やんま追い掛く目線振り切られ

蓮の葉はまっさをに雨降りさうな

十楽の浮世ここぞと布袋草

棒切れの先にするめやざりがに捕

何といふことなくざりがに釣り上げられ

あめんばうぽかんと佇つてみてゐたり

子に父が取って代われる目高捕り

バケツには眼と眼向き合ふ目高かな

見よと云ふ翡翠望遠鏡の中

萍に鷺の長脛君臨す

半夏生虚ろな光放ちをり

山萩の零る径なり此処も亦

直情の典型疾駆の水馬

極端なこと申すなら水馬

雑詠

雨降嶺晴れ諸の長畝もつこりと

山梔子のにほひ爛れてをりにけり

隠れ蓑夏至の雨だれ伝ひけり

むしゃくしゃとすする日虹でも立たぬかや

甚平の着たての手足ふわつとす

甚平も案山子も瘦脛頼みにて

禅林に降り残さるゝ蝸牛

梅雨家居あれもこれもと妻持み

妻の性元來明るき布袋草



妻吾れに好み合はせてなまり節  
めぐりあふ書に似てハツと風鈴は  
身の内の退屈の蟲鳴き出す梅雨  
出つくわす暮の話につけ足して  
豆飯の湯気の立つうちいただかん  
麦湯呑む妻との呼吸合うて来ぬ  
妻伴れて来ぬ日のほたる暗く飛ぶ  
花火譚助け舟出す妻がゐて  
休まんと振り向くときの草刈女  
今日も降るこの雨夏至に続くらん  
明易の言葉は韻きやすきかな  
人語なし明易の鳥ひた啼くに  
柩にもう毛虫大変なことになる  
夏けやきいつ見ても美（よ）き汝が樹相  
夏至の日の机上にひろぐ広辞苑  
使ひ古る座右の辞書と梅雨に入る  
ほうたると同行二人そんな日も  
節約は美德と習ふ冷奴  
梅雨最中二三日かけ根ン仕事  
再校す夏至を挟みて雨の日々  
目覚めみて聞けりいつもの梅雨雀  
と或る朝夏椿花了へてをり  
風過ぐるごと夏つばき花了へぬ  
明易の二階に一つ母の咳  
律義なる郁子の青実とその葉叢  
ぶんぶんに灯を取らせおき早寝せん  
夏掛を手繰つ妻と二夕三言  
梅雨入の八百屋そこそこ品揃え  
濡れ佇てる泰山木の景雄々し  
雨払ひ立てる泰山木雄々し  
蟻対策ほどこしてある砂糖壺  
小鉢に水張りつめ砂糖壺の城  
この谷の平家螢を見んものと  
胸に來し平家螢を如何にせん  
ウイルスがパソコン齧る白昼夢  
路地の枇杷鈴生りにして皆小粒  
明易の流れさうなる眉を上げ  
ぎょうさんな実をつけ貧乏症の枇杷  
水呑んでとり了ふ昼餉素麵腹

ある日よりはつきり聞え夏の蟲  
だんご虫転けて宙搔く脚清ら  
桔梗は法器の一つ安居寺  
雷の一太刀浴びぬ相模灘  
実梅採る母が長棹えっさつさ  
葉蕨の山下りてくる在所者  
大井川片流れして茱萸の花  
夏の灯に売るアボガドのされかうべ  
妻へ  
梅雨家居飲食（おんじき）の手間かけ申す  
厨妻梅雨の肴をやりくりす  
衣更へて手足すうすう一閑日  
塀越しに雨だれおどろ枇杷古木  
蜥蜴現る徒ら心頭を擡げ  
身の危険察知蜥蜴のダッシュせり  
立葵衛星放送受信して  
合歡の花一ト雨あるやらあらぬやら  
荔枝かな胡瓜にしては花濃過ぎ  
冷奴一丁肴にひとり酒  
晚酌の今日もごきげん冷奴  
半丁のこれで充分冷奴  
水芭蕉掠め流水間断なし  
称名寺  
薰風に仁王の視線やはらげり  
青葉木菟いつしか寺に來ずなりぬ  
寺に古る櫻心耳に青葉木菟  
富貴寺  
緑さす富貴寺の面取り柱かな  
葉ざくらの風も薨も波うちて  
緑さす間口三間阿弥陀堂  
梅雨暗の東壁薬師浄土かな  
一驟雨つんば棧敷にテレビの座  
炎昼の干鱈の茶漬かつ込めり  
誰に告ぐ嬌声喜雨に先んじて

降り出して田螺随喜の村の雨  
実向日葵叙勲を待てるごとき貌  
天帝より叙勲賜る実向日葵  
文月の根気仕事に雨の日當て  
一律に過去と云ふても敗戦忌  
炎昼の頭に負担なき戦記物  
袖垣の朝顔大破一夜風  
真夏日の干鱈茶漬の箸を執る  
垣朝顔大ぶりにして破綻なし  
大風を呼ぶ雲鶏頭低頭す  
昼寝より覚めて暫しの現(うつつ)闇  
団扇風眠気しりぞけしりぞけて  
糸瓜みるまなざし大事さうに爺

貪欲鴨千両掠め翔つ羽音

おなごなるも

孫なんと蟻に極刑加えをり

孫の云ふ通り見えくるトンボの絵

汗臭き孫とアンパンマンを観て

口染めてきんとと色の氷水

両手もて孫の扇げる団扇風

七夕竹今年は孫の分まで書く

夏の旅

旅のプランお岩木に佇ち龍飛に佇ち

旅のプランじょんがらを聞き海鞘突っつき

電話繋がりにんごの弘前観光課

ねふたの件でおたづねしますと電話口

訛りある人出て朱夏の電話口

蓮葉の大破小破の田んぼみち

みちのくの空攀ず花火鼠鳴き

へたり込む糸瓜野郎の跳人かな

山車神楽鉦は痴人（トンチキ）愚鈍（ヘン

テコ）と

海市の端売れない句集積み上げて

太陽と向日葵歎談腹割って

眼をぱちくりさせて見送る武者倭武多

ヤーヤドー倭武多は鬼火掻き立てて

しずしずと見返り天女遠退ける

風の無き太宰の国の立倭武多

龍飛より戻りてその夜立倭武多

扇燈籠（おぎどろ）の熱気にゆらぐ立見客

羽後の空深く竿灯黄金咲き

竿灯の火の河絶えずゆらぎぬて

風颯と空に竿灯隆々と

手より肩腰へ竿灯移し見せ

じょんがらやねふたの熱り覚ます酒

灼けてをりお岩木行きのバスダイヤ

お岩木の麓の林檎熱しをり

属目

文字摺草なれそめのごと藹々と  
青勝ったあぢさゐがよい老頭児（ろーとる）  
には

何を読む梅雨入の妻の生返事

のうぜん花掃きしばかりの地を汚し

のうぜんの後追ふごとくちる真昼

蛇を見し胸の早鐘鎮めをり

口元をきりりと結び夏桔梗

水馬つと奔流に打って出ぬ

蛇苺採など真似てせぬものぞ

あぢさゐの移ろふごとくわが齢も

手仕事にふんぎりつけてさくらんぼ

眼鏡置き眼休ます雷の中

くわばらと云ひて遠のく雷ならず

さくらんぼの種子と茎数相等し

夏掛の上に掌を置き想ひごと

紫陽花のうすぼんやりと末路のはな

河骨の黄をかいくぐり尺の鯉

昼寝して雲散霧消時の柳

享年を確かめおいて夏見舞

ラムネ菓子胃の腑へ落とす梅雨の昼

と或る日の庭に棲みつく夏の蟲

生垣の下で確かに夏の蟲

夏の蟲など鳴きざつくばらん夜

それ以上蛇を深追ひせぬぞよき

ああ年金生活者

貯金下ろすは砂取りゲームに似て薄暑

熱帯夜一服つけんと起き出して

夜の卓蟻でも歩いて居らぬかや

寝返りの骨ポキとなる夏布団

明易の尿（しと）せんと起ち骨の音

東国抄

乱暴な句作り兜太螢狩る

梅雨晴間ぷらんぷらんと母散歩

鳴物入りサイン会ある書店夏至  
映画館出て馬車路の蒸し蒸し梅雨  
もうそんな時分かると聞き夏の蟲  
行先の皆目判らぬ蟻の道  
雑兵のごとく駆け出すわらじ虫  
平泳ぎのあととは出鱈目犬つ掻き  
夏布団畳の海に漂ふて  
夏掛を一枚抱え漂流中

ローズテイーアロマに梅雨の貌容れて  
ジャスミンテイーメナム河畔の彼の夜風  
アイステイー茉莉春毫（モーリーチュンハ  
オ）試し飲み  
アイステイーストロー吸うとき顔細め

炎ゆる日にふかすカメラといふ莩  
かなぶんの堂々巡りむさき家  
虻一匹迷い込みたる音薄暑

長男の嫁より  
我が事よ父の日賜ふかさばり物  
父の日の贈物とて麻パジャマ

ゆすらうめ丈高からず低からず  
老頭児（ろーとる）に浜昼顔がぼっと咲き  
風鈴の音色乱打に変わりけり  
杜深く巢懸く鴉を皆敵視

民宿の女将披露  
胡桃割るそんなやり方あったのか

間石翁  
海鼠の匂大いにうけて羽振りよき  
布袋草面白おかしく殖しけり  
金魚飼うこと面白きそんな齡

白昼夢想  
なつかしき限りのまくわ瓜など喰ひたし

瓜食うなら砂糖が巾を利かす世の  
四つ角の闇でござりとひきがへる  
芳一の耳闇底に夏は来ぬ

明日葉を嬉しがらせる所降  
八丈島で夕立のことを斯く云う  
八丈の旅で遭ひたし所降

男梅雨吉良の仁吉の一節を  
通院日梅雨のむしむし始まりぬ  
新橋の飲屋路地裏走り梅雨  
麦湯の滋味吾らが元氣の源よ  
起きだして朝から麦湯沸かす妻  
レモンてふ言葉聞くさえ歯が浮いて  
大ぶりに進学塾の七夕竹

七月十六日誕生日  
祭来て誕生日来て齡とるも

妻

夕立の対処のほどを出しな云ひ  
ゆすらうめこんなに熟れてと庭よりこゑ  
昼寝して力の脱け方佳き寝相  
ナツメロに夫婦してのる銷夏法

神奈川版膝に開きて七夕記事  
寺子屋の七夕風景随筆に  
七夕のエッセイ寺子屋にも及ぶ

席譲る老人同士冷房車  
終に泣く赤子の口のおむすび形  
岬行き電車の中のサングラス  
がら空きの電車をひやす扇風機  
扇風機万遍なくといふことを  
平塚の改札口の七夕竹  
七夕の風を涼しみ歩きけり  
七夕の人出に大き溜息を  
お化け小屋呼び込み男の甚平着  
七夕竹灯点し頃を風の出で  
七夕の青本に逢ふ古本屋

属目

なみなみと熱き茶淹れて猛暑に処す  
体に足す水気グレープフルーツ酸し  
度忘れを暑のせいにするよくあること  
いつもならかなぶん翔んで来べき頃  
吹き抜ける風を肥しに青くわりん  
風鈴の手持ち無沙汰といふ風情  
風鈴の音色を真似て骨休め  
飼犬の鳴き交ふ夏の夜となりぬ  
物忘れ多き頭をのせ籠枕  
高からぬ鼻も汗かく日なりけり  
古団扇使ひて竹の骨鳴るも  
古団扇扇ぎ損ねて肋打つ  
のうぜん花どうやらかうやら風が出て  
桔梗にきのふもけふも青い空  
桔梗にはよそ事のごと灼ける空  
暑にめげぬうすむらさきの庭桔梗  
蝉啼かぬ分だけ凌ぎ易きけふ  
むし暑しけふ乗り切れれば明日が亦  
夏桔梗見つむ眼がしんと澄み  
夏いよいよ旺なる日の烏龍茶

体に佳き麦湯毎朝沸かせをり  
山頭火の本の中から遠くわっころ  
風吹いて来て家中涼しゅう  
眼鏡とり目蓋の汗ぬぐひけり  
痩せぎすの身なれど汗がなんぼでも  
どつたと寝転び昼寝でもせんか  
扇いでも扇いでもけふ汗だくに  
ビニール製団扇手首の疲れるよ  
なまぬるし団扇まがひの団扇風  
顔洗ひ直す暑さも極まりて  
やりきれぬ暑さと妻にこぼすなり  
かかずらふものありじとと首に汗  
汗は汗私は私誤字探す  
校正の手から腕から汗だらけ  
ほっとけばころころ落つる汗の玉  
麦湯呑み仕事は体力消耗戦  
汗地獄それもよからう徒食の身  
この上はごろ寝に如かずこの暑さ  
暑の退いてやっと一息つける間来  
暑の引きし頭すいすい働かす  
瘦身は病ひに勁し夏桔梗  
夏桔梗あるべきやうはと自問して  
暑さの峠越えし証しよ風出づは  
炎天に誰も見てみぬ雀影  
夕かぜに息浅くつく夏の蟲  
破地獄の暑さはこんなものぢやない  
夕づける風に合はせて夏の蟲  
湯上りにしげしげと聞く夏の蟲  
水撒いてやっと一息つけさうな  
打水の葉音の遠く近くして  
水撒いてやろうかほとぼり覚めぬ路地  
夕づける風いちはやく桔梗に  
のうぜんの花のゆらゆら風ゆきき  
読むことはここまでにしてあと昼寝  
読みかけの本のほとりに三尺寝  
昼寝する姿は八つ目鰻のやう  
何もかも忘れ昼寝の真っ最中  
昼寝して飛脚行き交ふ東海道

昼寝覚素通る猫が足袋履いて  
昼寝覚やつと合点のゆく風情  
浦島は太郎といふ名大昼寝  
浦島の翁よろしく昼寝覚  
口つけて昼寝のあとの烏龍茶  
午睡より覚めしところへ水羊羹  
昼寝覚潰れしこゑを立て直す  
奥羽より手ぶらで戻る昼寝覚  
昼寝覚記憶の断片（かけら）繋ぎゐて  
昼寝覚何か探せる目付して

体には毒よと夏掛かけ呉れぬ  
ビール酌む少々荒き風も佳き  
夏の夜のこゑに覚えのあるニュース  
この暑さ関東一円とぞ告げぬ  
肌叩きけふの暑さをかへりみる

早起きは三文の徳殊に夏  
ががんばの脚の長きを取柄とす  
家居とは金魚うろちよろする構図  
老体に近づく裸にも産毛  
染み・黒子伴れて盛夏の六十路坂  
五年前  
啜りたる術後の氷片うまかつし

妻

人前をもう憚らぬ蒸し諸

さる人の

蒸し諸なんつたつたって戦中派  
海の日の花火あること後で知る  
独立記念日空にポンポン爆ずものあり  
ポンポンと音の並んで揚花火

ぼつねんと時流に乗らぬ水馬

展望車はたはた揚がる海沿ひに

宵宮の鬼灯いろさす吊提灯  
夜店にて一鉢求む千日紅  
大荒れの風の夜となる祭幡  
山車提灯ゆうらりゆらり遠ざかる  
祭提灯夜風に踊る州崎町

芋畑天上大風吹き初めぬ  
蜻蛉に磨きあげたる鏡空  
野分あと鰻昇りに温度計  
芋の葉の上のまんまる鏡空  
みづいろの隣のあぢさゐ錆つゝ咲く  
蜻蛉の目玉ほど空輝くよ  
まんじりとせざる夜の明けにいにい蝉  
晴れ間見て氏子の祭支度かな  
ちびっ子の水泳教室鏡空

野分あと街は輝く万華鏡  
颱風の大濤朝刊一面に  
颱風の爪跡速報相次いで  
吾が肋の龍骨を撫で野分の夜  
古本の積まれ幾とせこの夏も  
ポプコーンうだる瘦軀に塩気足し  
素っ裸初めての蚊を呼び寄せて  
灼け灼けてむらさき澄める花は何

今年は見極め難ければ  
予報官えいと梅雨明宣言す

風鈴にすいと目覚めて風峠  
髪洗ふ音が厨の方でする  
ヤッコの上音頭とるのは花かつを  
訪問者暑つくるしいことはいや  
風鈴を風に任せて寝ることに  
温度計見やすき位置に夏百日  
紫陽花の錆るに任せ習ひ笛  
水打って木に葉に石に當たる音  
風颱風鉄骨ぐにやりとひん曲げて  
熱中症予防対策漫画もて  
真夏日やら熱帯夜やら予報憂し

にいにい蝉聞き初むる日と予報官  
天気図にいと涼しげな傘マーク  
未だリズムとれぬにいにい蝉啼いて  
けふ耳にするが手始め蝉百日  
おろおろと水位見守る雨颱風  
妻沸す麦湯ちからに夏百日  
たどたどしきにいにい蝉の節廻し

蚯蚓よりましな啼き方する蝉も  
夏の蟲近所の早起き老人に  
枕辺に団扇やりきれなき夜明け  
投げ出しある団扇を掴みざまあふぐ  
あぢさゐの飽きのくるまで眺められ  
飽きのくるあぢさゐいつか毬の錆び  
悪態をつく子鴉に生れけり  
近所まで出張り鴉の御曹司  
あつさりと白旗掲ぐ甚平着  
酔ふたればチャンスとばかり蚊の寄り来  
電話口孫出てあうむ返し処暑  
蟲ほほづき花屋の彼も去年逝きて  
美濃よりの小包解けば冷素麺  
リモコンであやつる下僕の扇風機  
足許に侍らせ首振り扇風機  
仰ぎゆく通夜の寺まで夏の月  
通夜へゆく一步出づれば夏の月

妻  
腸によき献立牛蒡一点張り

あかあかと酸の密集プラムの核(さね)  
畳の目見遣り昼寝の漂流感  
蜥蜴吾れを見上げて半信半疑の体(てい)  
夏旺ん旅の髯伸ぶ男鹿巡り  
おお何と酸っぱ杏に瞞されし  
夏バテにいちばん激辛鮭茶漬  
鴉の子見上ぐる人を小莫迦にす  
口癖の昔はよかったたうもろこし  
急雨来て蟻の荷運び支離滅裂  
夕立に濡っぷりよき一電柱  
甚平着て間なし草履の鼻緒擦れ

一驟雨過ぎしばかりの溝鳴れり  
瓦打つ雨は序の口颱風来

この暑さ故に手を抜くことあれこれ  
当節の瓜と似て非の甜瓜

砂糖が味よく引き出して昔の瓜  
暑ければ直ぐ倦む仕事目先替え

灯が貧しく見えて西瓜の種さびし  
向日葵の巨顔支ふるこの項（うなじ）

異様な空果して軽雷あらしめぬ  
葭切の外交辞令空ら響き

一身に期待を担ひ牡丹咲く  
落雷を逃るゝための唱えごと

炎天に影を縮めて弱（よろ）雀  
あられなき寝相も昨（きぞ）の熱帯夜

皺む腹甚平におし包みけり

旅あとの句を整理して夏後半  
旅のため貯金減らして夏畢る

皺寄せのとんだ処に秋始め



町内の祭り

コンビニも町内の裡御神燈  
鼻筋に白粉一刷け祭稚児  
金魚掬ひ未だ幼くて見てゐる子  
八幡様の緑陰貫ひ屋台建つ  
一休み山車片陰に引き寄せて  
風死す中軒を並べて屋台店  
ごたごたと夜店が建ちぬ社内  
夜店建ち始む配線むき出しに  
祭来るそれを目当てに孫が来る  
建て込める夜店の足許走り根伸ぶ  
祭寄付手拭いっぽんお返しに  
夜店建ちけふの稼ぎを待つばかり  
射的屋は飴屋のうしろ夜宮混む  
金魚屋の親爺の顔も一とせぶり  
走り根を除けて夜店を組み始む  
緑陰に組み立て始む屋台店  
ぎゅうぎゅうと神輿の縄締め広前に  
水屋の水貰ひて夜店支度かな  
神輿組む最中青筋揚羽来て  
祭寄付受付すずかぜ来るところ  
玄関に子供神輿の祝儀置き  
常夜灯しろしろ灼けて本祭  
腰泳がせ金魚掬ひの女の子  
緑陰に電線這はせ屋台店  
射的屋の景品に射す大西日  
夜店の親爺水屋の水に重宝す

中華街

暑には暑を以て対さん中華街  
扇子一本腰に収めて飯店へ  
片陰道市電馳せぬしあの頃も

大珍楼別館

飯店の盛夏の器器かな

飯店の品書き真つ赤夏料理

三品選り広東家庭夏料理

飯店の卓に扇子を置き待てる

飯店の予約席堰き葭屏風

取皿に焼豚の朱ライチの茶

陶枕売る華僑の片言日本語

中華街素手もて計るプーアル茶

浴衣着てチャイナドレスに見とる娘

豚饅に汗し行列中華街

竹婦人の品定めして中華街

横浜国際花火大会

夕焼雲やうやくすみ初めにけり  
夕焼雲金一変し灰白に  
頭の中が空っぽとなる花火音  
世直しのつもりの花火揚がりけり  
上向かぬ景気直しの花火とも  
揚花火ポンポン景気悪しき世に  
傾きて蚊とりせんこう形花火  
花火の傘ぐらりと天のシャンドリア  
どんじりに控えて音も凄花火  
花火果て群衆蜘蛛の子散らすごと

属目

扇風機身体に毒と云はれても  
てきぱきと頭使ひて暑を払ふ  
青天の霹靂とはこれ蟬の尿(しと)  
男踊り女踊りのある配慮  
葉叢中臀を隠さず青くわりん  
この吾に向ひて藪蚊何の仕草  
幾たびも眺め廻して団扇の絵  
たはやすく三段論法効かぬ夏  
大暑の頭働かす為水を呑む  
大昼寝エイのごとくに打臥して  
よき智慧が泛かばぬ道理この暑さ  
夏掛てふ健気なるものうち被り

心頭のほのぼの染まる酔芙蓉  
ピザ・ Pasta 何にでも合ふミニトマト  
この夏も出たとこ勝負ホ句作り  
空気曳き無傷のままにくわりん落つ  
この暑さまぬがれ難く水を呑む  
蚊を叩く骨も折れよとおもひ切  
藺枕を頭に馴らす身を揺すり  
みんなは途中で止めてしまひけり  
蜻蛉の目よりも大きな結果出す  
俳諧は肚（はら）でするもの冬瓜汁  
れんこんの俳画懸け暑を煙に巻く  
冷房のどすんと入る音の又  
長生きをする柄でなし冷やし酒  
へこたれぬ氣力が大事大糸瓜  
なまる身に元氣を貰ふ冬瓜汁  
藺枕す須臾の浮世を賜るべく  
藺枕の置き処を決めぬ吾なりに  
なるやうになれとはだけて端居かな  
胡座かき古本整理鰻の日  
むらさきに違はぬ桔梗の信（まこと）かな  
灸花首を傾げて見る人も  
曉齋の百鬼夜行図お涼し  
烏瓜の花煙幕を張りにけり  
草取はせず炎天を唯眺め  
藺枕をひよいとつまみて頭に当て  
生身魂テレビをテレヴィと書く世代  
じだらくな昼寝も惟然坊然と  
一紙片すつ飛ばす風懐しき  
入れては切りいたちごっここの冷房裡  
夏埃手のつけられぬ机の上  
はたはた翔つさうかと云ってやりたくなる  
夏掛の身体を外れて引っ張り過ぎ  
軽はずみの己れに腹立て羽蟻の夜  
また外れ真っ赤な嘘の油照  
泉のごと笑みを浮かべて孫昼寝  
始めて鳴く蟬と思へず達者なもん  
昼寝覚瞬きしてもひとりぼち  
団扇の絵芙蓉は芙蓉褪せ芙蓉  
夏掛の引っ張りすぎを押し戻す

昼寝してなほ余りある今日の昼  
出っ腹の臍も暑さに立ち向かふ  
くそ暑き日ばかり何故か当てがはれ  
冬瓜汁病院食に何處か似て  
昼寝覚頭のもやもやとれるまで  
からからに乾ける蟬音頭上より  
総体にとぼけた味の冬瓜汁  
相槌を打鳴く蟬の未だ無かり  
峠一つ越え来しおもひ夕蝸  
藺枕のごそごと鳴る石頭  
心臓の葉絶やさず土用入り  
汗拭いて縦に走れる手術痕  
紅芙蓉ひとの心をくむごとく  
百日紅詩は独断と心得て  
冷房のどすんと入りどすんと落つ  
ともかくも一歩も出でぬ大暑かな  
彼の夏に手術などして早や五年  
新参のみんなみん蟬の氣っ風よし  
万太郎の前書きに似てつくつくし  
頷いてばかり大暑の電話口  
難題を突きつけらるるごと大暑  
返信の筆も鈍れる大暑かな  
食欲を鼓舞せるための冬瓜汁  
梅干して三日目になる身の翳り  
登音を猫も憚る梅蒨  
お白州に詰めゐるところで昼寝覚め  
昼寝覚てのひらの斯くやはらかし  
大木に火のつく蟬の自棄っぱち  
孫の来ることを張り合ひ生身魂  
早朝のなにはさておき木槿の辺  
夏バテの我が身思へば酢豚など  
夏掛をゆうに余れる足二本  
じれったきかなぶんぶんの勘違ひ  
真夜の蟬啼くといふより洩らすこゑ  
挨拶の言辞くだけで生身魂  
風徹る家はさながら涼み舟  
朝鮮朝顔朝から上気してゐたり  
乱読の書を抛り投げ大昼寝  
明烏土用太郎の耳掠め

たぐり寄す朝の想ひと夏掛と  
逃げやすき夏掛胸に当てがひぬ  
胸の内瘦せかがんぼにあかしけり  
老人の早起き疲れ大昼寝  
すててこで古本整理ああ汚な  
こちらから近づいてゆく孟蘭盆会  
枕上ミ雨戸を隔て夜干梅

囑望

明烏陶枕外れるたりけり

夜干梅曉闇の沖にかな

立膝して眺む本の背夕端居

聞き役に廻るつらさもこの暑さ

覗きゆく通りすがりの岐阜提灯

甚平に捌けて口調も応対も

蚊に喰はる返す刀がもしあれば

つくつくほうしつくつくご飯がもう済んで

骨傷み風を掬へぬ古団扇

やるせなし麦湯に氷片二つ入れ

藺枕を投げ出すそこが仮寝所

水呑む他手の下しやうなき暑さ

孫

お昼寝の済みしばかりの目の坐る

重ねある中より軽めの団扇選り

梟の置物模糊と昼寝覚

三尺寝いまさら恰好つけたとて

夏バテにはこれが一番鮭茶漬

当たたらぬも八卦西瓜の出来不出来

鳴き方もわたくしなりに夏の蟲

高原の空気を吸ひに昨(きぞ)の夏

干梅に孫の酸き顔しかめ見せ

クレヨン画原色花火描きなぐり

一筋の酔の香の徹る大暑かな

ラジオ體操老人にこそ夏休

勝手に目覚める齡となり薺

天国の盆帰省

霊者らに盆の改札始まれり

かがよへる白さるすべり青天に

子が描き根気の塊り花火の絵

むづがゆく髪の中から玉の汗

ホームランカルホルニヤの青い空

生垣の向うを通る捕虫網

捕虫網ふはふはさせゆく女の子

憎つくき蚊打たんと片手隆と上げ  
打据えるまでの藪つ蚊睨めつけて  
夕立に遭ひたる次男の濡れ鼠  
高階の端っこの部屋の鉢朝顔

かつてカジユアルデーといふがあり  
職退いていつもカジユアル半ズボン  
颯爽と新宿あるく半ズボン

アスファルトの余熱ぽかぽか花火みる  
新築の家の向日葵胸張りて

土の香を搔き立て水を打てるなり  
蝉時雨とはまだ云へぬほどの森

蜀山人こんな顔して昼寝すや  
蝉ごゑの今ふるえ立つ日照雨中  
重奏を嫌ふでもなく蝉啼けり

夏草の精鋭勢ふ野に亅てり  
水を撒くときに気性の現はるゝ  
気ぜはしく水撒く人でありしかな

蟻吾を這ふやすかさず平手打  
しみ・そばかすしみじみとある大暑かな  
団扇して思い出しをる昼の夢  
大暑とはひとりよがりの句を読むこと  
立て続け蝉が鳴くなり立て続け

屋根瓦叩いて夏の通り雨  
超然と亅つかがんばを身内とす  
目に見えぬものうちすすむ暑の極み

蝉の音のぱったりと絶え大き風  
臍を見て腰廻り見て夏の果  
滴るや大きくこころに弾むもの  
暑さに馴れ安穩に狎れ為体

かつては一軒一井  
瓜冷やす肝心な井の無くなれり

女にもいろいろあるや花茗荷  
怒り一つ心に抱え新生姜

テレビ

見るつもりなき夏曉の地質学

つくづくと蝉の胸部を玻璃越しに

強靱な胸もつ蝉の音と聞けり

戦艦の一部のごとき蝉の胸

重厚な出だしを楠の高みの蝉

丹念に日送る木槿庭隅に

木槿咲き一つ一つの花の向き

大玉の後の花火にして割損

桔梗に太古の空のいろを瞻る

孫は一応女子なれば

孫が来て裸のうへに羽織るもの

新種出回りて

へんてこな胴長西瓜作らる世

捕虫網持つ子の四肢のやはらかし

蝉の胸時計の内部覗くごと

葉鶏頭育む雨のザツと来ぬ

かまつかを雨一ト震ひ二夕震ひ

葵咲く家毀たれてあとかた無し

側溝を高鳴り走る夏の雨

一切のもの搔き消して白雨くる

夏の雨今序・破・急のどの辺り

夕立後のごとくすかつとしてゐたし

芭蕉吹き一味違ふ風の質

極楽の風伴ひて夕立来

夕立に山川草木一息入れ

夕立が上りて息吹き返すもの

蝉聞いてぽやんとしてをり素麵腹

夏バテ用ヘルシーメニュー卓に載り

尻に火がつくとはこのこと油蝉

蝉の穴ぼんやり見てゐる吾が居り

蝉の穴始めて見たる四つほど

なりゆきで蝉は競へることとなり

朝蝉にその後を任せ曉の蟲

撒水のぽかぽか土を打ってをり

八月を心待ちにす旅靴

蟬の穴彼奴に先を越されけり  
清方

ほゞづき揉む女の手許よく描けて  
蟬の穴吾が心にも空(うつ)け穴  
秋のいろもう見す空を指させる  
炎天の切に恋しき雀がほ

何云ふてもみんな言訳団扇風  
間石てふどでかい石を見て涼む  
苦瓜の形相さておき内心は

鶏頭の子規へ傾倒そんな日も  
妻は好みはつきりと云ふ生り節  
蛙のこゑそつくり蟬の短か鳴き  
眼鏡の置処ここでもなしと生身魂

朝曇りさきほど菓飲んだっけ  
炎ゆる日の妻服薬のチェツク役  
暑さのせいなどと宣ひ老人呆け  
何處ぞに失す夏の眼鏡に足ありて

蠅叩く術練達にまだ遠し  
夏枯れの詩囊繕ふ術知らず  
夏バテなし漫画を糧の青年は  
涼風の角を曲がれば松林

なぐり描き劇画のやうな驟雨くる  
桔梗のひといろ折り目正しきはな  
蟲瘤つけ長寿おぼつかなき夏木  
横なぐりの一雨欲しや吊忍

じゆくじゆく鳴く蟬に閉口昼餉あと  
ポケットの多過ぎる服夏の旅  
首垂れて降参の体(てい)花ダチュラ  
暑に抗す力蓄ふ朝のうち  
一日のけぢめに水を打つつもり

夏痩せて葉害受くる左腎臓  
パネルジン効き過ぎ水腎症の夏

生身魂いきいき宣ふ独り言  
あつ苦しと云へば暑さの減ずること  
手の届くところに団扇熟睡覺  
生垣の葉を掠りくる夏の雨  
前後して人の逝くなり蟲ほほづき

回想の筋がちぐはぐ昼寢覚

玉子ごはんは馳走の部類敗戦日  
蠅虎部屋間違えて入り来し

玻璃の蟬腹部まじまじ見られをり  
辞書は机上に開きおくもの秋初風  
手にとる本手にとらぬ本秋隣

余分なことばかり考えゐて大暑  
おとぼけの花火も交じる前半部  
発端に記憶を戻す昼寢覚

ぶりかえす暑に打負けて易きに付く  
山妻の暑さ凌ぎにコップ拭き  
一わたり西瓜の種をうち眺め

イチロー

新涼の手が出てポケットキャッチせり

朝ぐもり曇るコップを透かしみる

三井寺歩行虫(みいでらごみむし) 訳も分  
からず詠んでみぬ

ここ迄と長夜の本の耳を折る  
甘きこと西瓜の中の西瓜なり

西瓜の種一つ鎖骨に付いてをり  
溜息をおのれのためにつく大暑

頭の裡に樟脳舟を走らしめ  
この木さしづめ蟬の井戸端会議の木

ヒリヒリと蟬の長鳴き火傷に似  
ぶだう食ひ見合はす顔のちよと酸っぱ

風死す景白黒映画をみるごとく  
ずいぶんと泳いだつもり本人は

芙蓉見る者まで優しくなりにけり  
狂気の沙汰蟬の犇めくところへ蟬

見る者へ芙蓉の気品移りけり  
ここ迄が咄のさはり幽霊譚

居心地よくビール一気に飲める日や  
風鎮の黙りこくって暑を送る

二タ三口妻もビールに口つけて  
二タ三言交して蟬の腹話術

関節を鳴らしてみせぬ秋の音  
天地をこち開けて啼く一油蟬(ゆせん)

遠ち蟬にこころ合はせて一ねむり  
片脚のかがんぼ悪びれてはならぬ  
もう充分拝聴しました蟬さんよ  
服薬を時折忘れ生身魂

出来不出来は西瓜の胴を叩き聞け

飲み忘れ薬溜りて夏の果

暑いのはこれから先よ千日紅

遠ち蟬にずうんと耳を伸したる

冷凍みかん齧り旅路の汽車ぼっぼ

花は白若年寄のさるすべり

月餅の油湿りの大暑かな

### 大珍楼別館

一品は折紙付の天使の海老

ほっとして家に灯の入る星まつり  
夏の星遠ちにかたまる小さき家

星月夜週間新潮脇挟み

六郎の街灯点り夏の星

野外映画の上映もあり地藏盆

蒸す一夜唄が洩れ来て「碌でなし」

心臓病み菘を買ひに星月夜

手触りもザザと夕立のごとき髯

西日中行列をしてコロツケ買ふ

きりのよきところで書閉づ夜の秋

足投げ出し暑さに閉口したるさま

蟬の穴見つけし辺りに行ってみる

づかづかと居間に入り込む大西日

十六夜の出るときたっぷり湯を足しぬ

女郎蜘蛛明るくものの想へる日

唯高きが取柄の夏の樹と見たり

をぢさんと祀り上げられみて暑し

蟬止まらすことが上手な漆の木

採血の血管探す女（ひと）暑し

吸いついて平目のやうにレントゲン

函抱ふ裸可笑しやレントゲン

採血の顔の横向き秋隣

検尿の紙のコップに秋の音

裸に電極五箇所取り付け心電図

遠花火岬は先へ先へと伸び

岬の辺の遠き花火もいつか果て

黄昏れてくるまでビール我慢しぬ

彼はかう云ふ彼女はかう云ふ蟬うるさし

陰口を誰かたたけば守宮出で

旺んなる夏詠み句風は日記体

炎昼の彼には見えて赤き糸

年寄りの部類に入るいぼむしり

揚花火粹やシャンパングラス風

平成十四年 猛暑裡一人鍛錬会

蝉の部

テーマは猛暑と妄想 ここ二三日のうちに  
書き留めたもの也

暑の部

自転車のサドル灼けりて腰浮かす  
くきやかに枕の凹み大暑かな  
ハンカチよりタオル好ましこの熱気  
服薬の水なまぬるく暑の兆す  
あつあつと云へば暑さのなほ募る  
朝曇り気概ばかりが雄々しくて  
屁理屈の罷り通らぬ油照  
日は炎えて街の温度をあげにけり  
眼鏡置きけふの暑さを妻に云ふ  
頭をやられぐうの音も出ぬ暑さかな  
真綿締め大蛇（おろち）のごとき暑さかな  
浴びせかく野次やうなる暑さかな  
詐欺に遭うごとく猛暑に出合ひたる  
頭のうへ酷暑の通り過ぎるを待つ  
焼け石に水の風鈴鳴りにけり  
暑さにも十両級と横綱級  
水打つて収まるものを収まらず  
暑を凌ぐことにあれこれ手を尽す  
いまだ暑の先見えて来ぬ芋畑  
ぶりかへす暑さも森の蝉の音も  
関東の暑さ丸ごと詠み下す  
胡座かきそこに居座るどっこい暑  
妻  
やうやうに暑さ収まり厨ごと

蝸の間を開け過ぎてもの足らな  
小ごゑなる蝉にもめ事あるごとし  
蝉啼くなかパン屋の親爺パンを焼く  
法師蝉薄荷のやうに頭に沁み来  
うづき出す歯痛のごとくつくづくし  
かさと蝉音枕上ミなる簾の辺  
中空へあてなく蝉の翔び発てり  
尻軽の蝉やひらりと木を離れ  
居心地のたじたじ蝉に近寄られ  
正調といふべき蝉に耳を藉し  
ヒステリーじみたり蝉の高音部  
蝸を聞くや段腹波うたせ  
蝉捕りが好きな子の家夏灯  
不手際の蝉の尻切れとんぼかな  
こちとらを尻目にかけて蝉の尿（しと）  
朝蝉のしゃんしゃん手拍子足拍子  
ご近所を騒がす蝉も一頓挫  
蝉発たせて仕舞ひこちらは大慌て  
蝉発たす気などさらさらなかりしよ  
飛ぶ蝉に一期一会の巷の木  
軒へ蝉早速鳴いてみせにけり  
落蝉にいつもの空があり真青  
蝉の飛ぶ貌を拡大してみたき  
田舎っぺ丸出しのこの油蝉  
引継もいと簡単に楠の蝉  
熊蝉の熊坂長範啼き出すよ  
油蝉朝餉俄にあはただし  
浪費せるものに時・金・蝉のこゑ  
お騒がせしましたと蝉木を離れ  
遠き蝉さらに遠くを風吹けり  
抑揚をつけて蝉音も大波も  
甲高きは蝉の板金工ならん  
落蝉の落ち方むろん頭から  
起き抜けの頭にたゆたへる遠き蝉  
脱藩者めく蝉街道外れゆけり  
断りもなく庭木借り啼く蝉よ  
けふの無事告げ合ふごとく蝉啼けり

肉声に衰えみする油蟬

経習ふ新発意に似てつくつくし  
蟬音絶ゆ木が悄然と佇つてをり

よく聞けば夜蟬時折手を抜けり  
あすなろに鎬を削り始む蟬

両の耳包み込みたる朝の蟬  
公園の広場を蟬のまつしぐら

じつとしておられぬほどに蟬しぐれ  
じり貧の蟬とと或る日気が付けり

なけなしのこゑを絞れり残る蟬  
森圧す真昼の蟬のあたま数

就中意味あるやうに蟬の啼く  
熊蟬にいきなり啼かれ当惑顔

蟬に胸ぐら掴まれるやう至近距離  
鳴く番がなき唾蟬と発ちて知る

唾蟬の羽音ばかりが大きかり

手術痕

蝸や胸に埋めたる捻子（ビス）五六

湯上りの身に夕蟬を引き寄せて

晩酌や蟬音遠のくばかりなり  
何をどう勘違いして玻璃へ蟬

蟬しぐれうねり激しきその渦中  
目と鼻の先に唾蟬連れを得て

椰の木は蟬立ち蟬の入る港  
蟬蟬と云へば発つ蟬眩しむ子

青空がずり落ちて蟬転落死  
蟬の音が絶え絶え風が動きけり

蟬にまた別の木があり飛び移る  
あらぬこと考えて蟬、音の鈍る

徒党組み喚ける蟬はみんな無視  
頼むからもそつと抑えて啼けよ蟬

啼くのならリズム正しくなあ蟬よ  
油蟬ここで啼くのはそこそこに

心頭滅却すれば火も亦涼しと蟬  
窓といふ窓から真昼の蟬のこゑ

蟬しぐれなどと洒落ても減ぜぬ暑  
法師蟬出だしもたもたして居れり

蟬が蟬呼び込み事態は最悪に

松の蟬見上げて通る人のあり  
先客にとまどひながら止まる蟬

偉さうに鳴き出す古刹のみんな蟬  
仏壇の梨と聞きゐる遠き蟬

蟬謂はば個人個人の声張れり  
哲人の風貌しかと蟬の面（つら）

醉生夢死果せし蟬の仏がほ  
有終の美飾る蟬と仰ぎけり

行きずりの松から転倒したる蟬  
虎造の再来蟬の浪花節

リズムよく蟬の唄入り観音経（三門博）  
そっけなき夜蟬のこゑの一度だけ

手術痕

捻子（ビス）埋ずむ胸の手ざはり遠き蟬

蟬ごゑのみんな讃辞におもへる日

自滅てふおもひ頭上の蟬聞きて  
頭からむろん突っ込み蟬頓死

いたづらに力んでみせる蟬は野暮  
乾坤の壮語といわん桐の蟬

夕焼けも手伝ひ蟬の愁嘆場  
早や一つ落ちゐて蟬のあつけなし

朔日やヒリリと曉の蟬一つ  
脱落者めく蟬が殖え月半ば

蟬しぐれてふ特大の坩堝かな  
後からの蟬も坩堝に巻き込まれ

竹瓮よりひらひら蟬の発ちにけり  
人ごとのごとく睡後の蟬聞きて

蟬の音の引き算終に零となる  
驚き逃ぐ蟬の籠相に「まあいいか」

油蟬早や晩年のこゑを出す  
飛行法伝授させたき蟬のあり

人事の部

団扇絵に街道あるく馬子と松

気ぜはしく顔胸腹へ団扇風



少しくは肋が冷えて団扇置く  
くびれたる腹に団扇の風送る  
団扇持つてあっちの部屋からこっちの部屋  
見飽きたる団扇の図柄茄子ならん  
ぞんざいにあふぐ骨折団扇かな  
蠅取紙詠める世代を同じうし  
扇風機の風が洩れなく来るやうに  
扇風機の向きああやってこうやって  
潮浴びのおもひ俄に首擡げ  
三段腹叩き親爺の夕涼み  
氣つ風よき啖呵のごとき涼気かな  
夏呆けのこちらも忘れゐたる約  
湯上がりのすっぽんぼんは佳かりけり  
夏瘦といふは都合のよき言葉  
もう一人の別の己れと夕端居  
振り返り日傘に余る女かな  
水着着し吾をおもふも鎖夏法  
網戸より吹き込む風は海辺より  
夏瘦せて吾は肋の似非イエス  
ペイオフ  
夏瘦の腕ただ組みて無為無策  
風鈴のただ働きの労おもふ  
娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり  
網戸より入り家抜けて去ぬ夜風  
妻  
紫外線防止のための長手套  
シャワー浴ぶこんなところに雀斑かな  
シャワー浴ぶこんなに心臓冷やしては  
花火大会要所要所を三尺玉  
太田先生  
夏風邪をひくなと先生おっしやらる

飲物の部

あらかた飲む壺の麦湯をさらひけり  
一日了ふ壺の麦湯も底尽きて  
飲みては減る壺の麦湯の一日かな  
冷蔵庫の麦湯ちよくちよくのみに起つ  
一日かけ壺の麦湯をのみ干せり  
煮立つたる麦湯さましてゐる背中  
森閑と麦湯の菓罐さめてをり  
公園に麦湯持参の乳母車  
麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉  
朝昼晩のんで麦茶の薬いろ  
ゆかしさの波多野爽波は麦湯の味  
麦湯煮る背の見ゆどこか淋しげに  
ビール酌むことに心の横すべり  
舌先が莫迦になるまで氷水  
手動搔氷機  
山妻の八面六臂氷搔く  
老人に無理は禁物冷麦茶  
ホップ利ききつね色なる水の泡  
汗の部  
汗かかぬ魚を羨しと見てゐたり  
喋っても黙ってゐても汗流る  
塩振つてつまみのチーズに汗かかす  
永久に拭く汗の貌とおもへりき  
汗拭いたへて須臾の間仏がほ  
汗かくだけかいて魂すっぽぬけ  
汗かきが生れ替らば千手佛  
家に居る河童の皿も汗まみれ  
身を離るときの快感汗の玉  
汗は先づ顔から噴くもの探し物  
意気上がらぬ世嘆き蟬もこんな調子  
のつけから凡手と見たり梔の蟬  
蟬の尿無味無臭にして蒼天  
いいかげんにしておけ嵩にかかる蟬  
顔拭ふ汗ふきタオル手放せず

祭の部

ゆくゆくは樟脳舟の船長に  
金魚屋の二軒張合ふ祭かな

昼寝の部

昼寝して我は当家の山頭火  
昼寝覚出づる言葉のあぶくめく  
胸中に小さき滝懸け三尺寝  
昼寝して恐竜の角よぎる夢  
昼寝して手足遠のく心地せり  
わが声がわれを欺く昼寝覚  
ここは亦もう一度寝て昼遣らん

身体の為とて

クーラーを入れずへの字に口曲げて

旅の部

夏旅の鞆に潜ます胃腸薬  
夏旅のハンカチ数え鞆に足す  
着てみせて旅着のきまる日焼妻  
ポロシャツの軽装が佳し津軽の旅

敗戦の部

軍神は茂みに佇てり忠魂碑  
わたつみに楫取り損ね灼け汐木  
あかちやけし記憶のガダルカナル戦  
蚊の敵機来襲されば返り討ち  
御戦に敗けし話を数珠つなぎ  
敗戦談ことおもへば又あちら  
いちぢくの葉に立ち返る彼の戦後  
手花火の玉より大き焼夷弾  
万歳をして落つ蟬の手をそのまゝ

時候・天文・地理の部

核心に一気に迫る夕立中  
弟を姉がいじめる夏休

炎昼の遅れ勝ちなる時計見て

七月の末日に来る集金夫

朝から照りつける日を一睨み

炎帝の使ひ慣れたる責め道具

炎帝に奥の手がありそを使ふ

いつはり無く土用の空のあをかりき

道端に何啄める灼け雀

雲の峰早やへこたれてをりにけり

たまさかに聞く鳥の音も日の盛り

日盛りをあれもこれもと欲張らず

一切の小細工無用いわし雲

打って出るおもひ強かり炎天に

立つ虹に見合つた言葉ぽんと出て

土用東風起つや短編繰るごとく

洒落て詠む気などさらさら竹酔日

引とり手なき古本の旱山

端的の見本夕立の上がり際

墨の香に峰雲の雄朝机

降って湧く涼しき風を待ちゐたり

虹を詠む言葉のびのびひろびろと

虹探す古事類苑の天文部

秋風を呼んで仁王の乳首かな

湯上りの素足さらつと拭きにけり

実家にて油売りくる日焼妻

道路然り用水路然り

人の手のかからぬものはなし夏野

頭の赤く八月盡の醤油壘

人を呑む波の八月まつたなし

醤油壘八月の指汚れけり

盆の部

生身魂いきいき独り言をいふ

へうと水のみに起ちたる生身魂

苧殻火を跨ぐ仕草も板に付き

孟蘭盆会庭に見るべき花もなく  
少子化のすすむ母校の盆踊

三伏の閻魔あたりを払ひけり

孟蘭盆の厨煮炊きの弱火（よろび）立て

虎造のこゑの恋しき盆休

来年の盆は是非とも西馬音内（にしもない）

芋殻火吹く風のうごきを見てゐたり

溝萩咲きまだ身につかぬ仏ごと

三伏のバター厚塗り今朝のパン

ハラインソ

新参が顔みせにくる孟蘭盆会

食物の部

苦瓜（ゴーヤ）料理やっぱり口に合はぬな  
り

種子も一寸浸りて西瓜の水あかり

病人の出す枇杷の種大さかり

入口にでんと積まれて地場西瓜

亀相して濡らせる西瓜臭き胸

冬瓜汁腹八分とは佳き言葉

ぞんざいに使ふ胃の腑に冬瓜汁

冷奴紫蘇の風味をいかしけり

寺二つばかり見てきて心太

衣類の部

洗濯機朝から奮闘夏休

手を通す忘れられぬしアロハにも

一度は着て愛着それほどなき夏着

愛着の情ある夏着となき夏着

七月のどんじりの日のお洗濯

甚平のふところ紐を先づしかと

甚平の内紐結ひ了へ外紐を

甚平の着替えといふはなかりけり

着慣れたる夏着の数も五指の裡

こんな夜の夜濯ぎ一茶・山頭火

夏掛の吹けば飛ぶよな蜻蛉柄

胴廻りちよつと足りない海水着

次男より借り原色の海水着

ピンボケの柄のアロハをことしも着て

甚平の内紐外紐結ひついで

動物・魚の部

子鴉の電柱伝ひ特訓中

家跨ぐやうに土用の明烏

夕雀けふの暑さを云ひにけり

何はともあれ覇氣こそ大事山椒魚

長身の走りの秋刀魚貰ひけり

山妻と旬の秋刀魚を二等分

一本の秋刀魚を妻と頒つ秋

烏賊そうめん噛みしめ顎を鍛えねば

のこのこと出て来て来て墓も夕涼み

目つきより墓の考え推し量る

痩せつぼちの河童シャワーを浴びにけり

秋刀魚焼くそんな時分となりゐたり

植物の部

くわりんの実青き一日始まれり

退屈とは違ふ徒然青芭蕉

風當りよき青芭蕉蔭に家

騒然たる雨を嬉ぶ青芭蕉

この二夕夏松葉牡丹を見ざるなり

採りあげて大向日葵の句を贅す

生け垣のねずみのこまくら青きこと

別格の大向日葵と仰ぎけり

風船かづら風と面壁夏の果

口喧嘩木槿の花に徹りけり

女学生ゆつくり過ぎぬ浜おもと

百日紅天に葬りのある如く

ぽと咲いて淡きがよけれ胡麻のはな

浜木綿の甘き香つづく遊歩道

曙いろダチュラ大きく開けゴマ

脱兎のごと雨駆け抜けぬ浜おもと

ひところの覇気なき雑誌と青みどろ

林道の百合の唇濡れてゐる  
辣蕪を齧るや晩夏確かなり  
ほんたうの甜瓜（まくは）を知れるそのひ  
とり  
西瓜の種過ち零す膝のうへ  
くわりんの空ひろびろと青極めけり  
一滴も降らぬ日つづく辣蕪畑  
是非一目見んものと来て薄雪草  
向日葵の花より茎のヴァイタリテイ  
女の子何とかのぼる百日紅  
公園の夏草交じる小花壇  
時計草油照りにも狂はずに  
夏負けをせぬやう齧る生野菜  
晚酌の豆腐を助く紫蘇風味  
口中に紫蘇の風味の拡がれり  
夕ざれば宗旦木槿首垂れて  
百日紅うち籠るべく家があり  
苦瓜をどうするでもなく机の上  
サルビヤに真つ赤な風が起ちにけり  
さるすべり風に動きの出て来たり  
一しきり生姜の林濡らし雨  
ゑのころに風がそこそこ出で来たる  
徒然のものの試しに水中花  
白桃の傷みやすきをどう料る  
河骨の一花切り取る写生の眼  
露草に雨降り直す積みち  
炸裂の白の眩しきさるすべり  
したたかなくわりんの尻と云ふべかり  
どた靴で踏めば破けて埃茸  
底紅に胸なでおろす風が出て  
出来悪き西瓜もて喉うるほせり  
零れたる西瓜の種は蹠好き  
槐散り大道芸の似合ふ街  
うとまるゝことに馴れっこ灸花  
けふ仰ぎ明日また仰ぐ木槿かな  
薺に見者俳句に読み手あり  
烏瓜ほどに頭の冴えきたる

昆虫の部

簾して虫籠めく家外（と）を見をり  
翼張る姿そのまゝ揚羽死す  
地べたのうへ死華咲かす黒揚羽  
蝶のため長々と塀ありにけり  
高低差一気に縮めスジ揚羽  
かがんぼにも晴耕雨読勧めたく  
火取虫ぶうんと廻りてパタと落つ  
火取虫何故こんなことをする  
蜘蛛の糸まだ強靱に日は注ぐ  
細き音の昼の蟲聞き腹空かし  
目覚むれば妻も目覚むる曉の虫  
近代化すすみてとんと蠅を見ず  
かがんぼの暢気な父さん歩きせり  
ふとうしろ見れば揚羽の蹤きゐたる  
七節虫（ななふし）のごとき身を揺り家あ  
るく  
俳諧の手ほどき蠅虎より受く  
投資信託の勧誘ありて  
石橋を叩いて渡る蟻もあり  
いぼむしり虚に居て実（じつ）をみよとい  
ふ  
色白の吾は家居のきりぎりす  
風の他虫音網戸を抜けてくる  
集（たか）り屋の蟻を不埒といふ勿れ  
強さうな名のヘラクレス大くわがた  
出鱈目な螭の道はた俳句の道  
火取蛾に網戸の関門ありにけり

秋の部

秋口のさらっとめくれ紅茶の本  
晴れわたるおおぞら秋の忍び足  
定型の器の水の澄みにけり

番外

竜の玉龍太語録が生きてをり

菖蒲湯の雀斑に匂ひなかりけり  
菫摘み小さな思い出つくる旅

北東北ふりーきつぷ

海猫の祀らるゝごと弁天岩  
待宵草林立石油備蓄基地

北東北を山妻と巡った。

女川

二、三十年前みた弘前ねぶたが  
忘れられなかったからである。

女川（おながわ）の優しき波に泳ぎけり

青森倭武多のダイナミズム

弘前ねぶたのセンチメンタル

門前

五所川原立倭武多のバーバリズム

みんないい。

照りつけて男鹿の瘤鯛揚がる海

旅立ち・車中

岩牡蠣の岩場の向う遊び舟  
甘草の沖ゆく男鹿の遊覧船  
岩々の一つ一つに海猫一つ

鼻唄は「りんご追分」旅支度

門前のさざえあわびの岩場かな

八月の男鹿へ旅立つスニーカー

岩牡蠣のやうな爺みてさざえ売る

一本の扇子を恃む出羽の旅

少年の尻のふかぶか箱眼鏡

車内放送男鹿のどしゃぶり雨を告ぐ

かもしかの運転席のいと高し

加茂

日本海側に抜け出て青田晴れ

絵本のやう赤燈台と浮輪の子

夕立のざつとありたる雄物川

入道崎

雄物川三々五々の胡桃の木

男鹿半島

入道崎

夏の男鹿すなぶけおどのバスガイド

蜻蛉に降り出す日照雨笑まふやう  
雨上りしばかりの男鹿の青すすき

すなぶけは皺寄る おどは年寄

烏賊を干す浦にぼつんと一軒家  
女もの扇子借り受けぬるき風

男鹿に蛇多しと聞くやバス車中

二歩三步入道崎のバツタ追ふ

テント張る磯の釣鐘岩のかげ

赤つめ草ひよろりと長ける風岬

清浄と男鹿の青田に注ぐ雨

すいと寄る男鹿の蜻蛉の目の大き

あをあをと青田を吹ける男鹿磯風

草藤に男鹿の碧波岬の風

半ズボンにて夏の男鹿巡るべく

真山神社

わっぱ弁当露煮と燻りがっこ入り

真山神社

男鹿に入る車窓に秋のきりん草

百合の香のほのと真山神社かな

もろこしの髭の赤さのあきあかね

赤とんぼすいすいなまはげラインかな

テント張る男鹿の浦々崎々に

赤とんぼすいすいなまはげラインかな

葛灼けて菅江真澄のゆきし道

赤とんぼすいすいなまはげラインかな

男鹿温泉ポンポンダリアの花盛り

寒風山

早雲松喰い虫の男鹿の松

寒風山

人好きな蜻蛉の面白がりやかな  
寒風山蹴飛ばしハンググライダー  
ハンググライダー滑空百合の花のうへ  
葛の花寒風山は藍深め  
寒風山後にしたるキャンプ村  
耳そばだて寒風山の昼の虫  
苜蓿に憩へるハーレーダヴィトソン  
寒風山撫子の径ゆるゆる下る  
寒風山屯す百合の茎短か  
記念写真撮影場  
なまはげの汗だく学生アルバイト  
なまはげのモデル汗かき大学生  
北面に百合の点在寒風山  
寒風山黒くきやかに蝶の影

脇本

枝豆に寒風山の空あをし  
夏葎寒風山の見える駅

竿灯（秋田）

親竹の自在を生かす大竿灯  
中空によろけ竿灯立ち直る  
点り初むコンビニの灯と竿灯と  
竿灯の油断大敵ふいの風  
竿灯は大きく宙を一泳ぎ  
竹の性よく読み竿灯あやつれる  
自衛隊日の丸竿灯ゆうらゆら  
弘法も筆の誤り竿灯転け  
竿灯のつつと走れる帆掛舟  
脇路地から人の湧き出る大竿灯  
竿灯をよいしょと秋田大学生  
どうだいと云はんばかりの大竿灯  
竿灯の面目なしと起ち上る  
町内の幼若竿灯おし立てて  
ところてん製造元の大竿灯  
竿灯の一艘一艘すすむごと  
親竹のここまで撓う大竿灯

竿灯を持ち替ふる所作空撓め  
入れ替り竿灯担ぐ十人組  
竿灯の均衡破れ走り出す  
竿灯の傾きかけるスリリング  
竿灯の親竹の反り斯く迄も  
蓮田の彼方竿灯点り初め  
竿灯に間のあり蓮に佇める  
ビヤガーデン円卓毎に点せる灯  
ビールますますうましアンデスポテトかな

土崎

土崎の燕反転フェリー出づ  
八月のフェリー向かふは苦小牧  
待宵草鳥海丸は繋がれて  
はまなすの実の生る頃の密航者  
揚船の錆どきぎしぎし長ける浜

八郎潟

秋田米メンコイナ植う田と云へる  
枝豆の向うに青田八郎潟  
立葵爪先立ちして八郎潟

五能線

鱸作（へなし）過ぎ深浦辺りで虹をみる  
駅弁の帆立旬はせ五能線  
甘草咲く墓地の後を五能線  
葛の花これより藍増す日本海  
しばらくの停車白神岳（しらかみ）登山口  
強力にカラスザンショウ生ふる森  
日本海無人駅打つ大夕立  
日本海潮豹変大夕立  
虎杖の汐傷みして五能線  
一夕立日本海を馳せ来たる  
夕立に叩かれめちやくちや日本海  
放置さる稲架の向うに日本海  
五能線甘草揺るゝ芒かげ

一夕立磯の甘草叩き去る  
誰もぬぬ浦の礁に海猫屯る  
日本海前に青田のしんと澄み  
五能線田母木に夕立ちちつけて  
五能線浜に手を振る浮輪の子  
夕立後の磯風を入れ五能線  
はまなすの花と実半々五能線  
甘草の崖下の浜舟揚ぐる  
灼けテトラポット積み上げ一漁村  
蒲の穂に黒雲走る日本海  
ぎしぎしの昆布いろして五能線  
夏果ての旅人拾ひ五能線  
一礁又一礁海猫の占む  
五能線立往生の大夕立  
夕立に電車足踏み五能線  
またたびに雨すぐ上る日本海  
夕立に洗はれ磯の無人駅

## 十二湖

落木の茸も四散してゐたり  
八月の山毛櫨の木洩れ日葉草に  
日盛りの径あり山毛櫨の森切れて  
山蟻と思うが違ふ羽ある虫  
蝸のこゑもしつとり山毛櫨の森  
山毛櫨葉騒頭涼しくなりにけり  
ハリギリの樹が大好きな森の蟬  
夕立あと雨滴を零す山毛櫨樹頭  
バンガロー山毛櫨の雨滴を浴びにけり  
イイギリや湖の向うで啼ける蟬  
白神の山毛櫨の腐れ木茸生ふ  
山毛櫨囲む池の真清水透きに透き  
白神の土産の手造り巣箱かな

## 五所川原（立佞武多）

ぬつと現れあたり睥睨武者佞武多  
対峙せる竜虎の間の見送り絵  
ぐうるりと辻で反転武者佞武多

くきやかにねぶた絵師の名灯に透けて  
練りねぶた「石打無用」の文字掲げ  
大佞武多太鼓打ち打つ影法師  
立佞武多近づけば子をてんぐるま  
紅唇の面白（おもじろ）女武者ねぶた  
たてがみ吹く風も紅蓮の武者佞武多  
朝市の甜瓜（まくわ）を朝餉代りかな  
盆花の鶏頭ならんぐんと伸び  
鶴泊青田囲いの駅舎なり  
盆花を畑の隅にごった植え  
りんご村登校の子が乗ってくる  
農協のどでかき倉庫りんご村  
青りんご青田青風岩木山  
朝市の婆の勧める早生りんご  
りんごお早うお岩木お早う旅早立ち  
天を衝く北の守護神立佞武多  
町中を雲つく漢（をとこ）立佞武多  
立佞武多天ノ岩屋戸開きの図  
お囃子の前ゆく金魚ねぶたかな  
五所川原高校ねぶた校歌入り  
蠟燭の消ゆるを待てる立佞武多

## 岩木山神社

雨の中鳴き方半人前の蟬  
蟬の穴日照雨辺りを濡らしけり  
岩木山神社境内草刈って  
探しゆく参道脇の蟬の穴  
お岩木の山よりひらと夏落葉  
お岩木の真清水大き柄杓に受け  
お岩木の真清水引きて御神水  
お岩木の真清水境内迂回して  
お岩木の手水の真清水手に痛し  
楼門の朱に栄ゆ夏の通り雨  
神域の杉の根包む苔青き  
夏山のお岩木しぼる御神水

## 百沢温泉



夏暁の宿の洗面井水なり  
百日草ここだく咲かせ麓の湯  
ぶるぶると出湯の宿の扇風機  
日盛りの出湯に血行よくなれり

遊歩道

お岩木の日照雨に蜻蛉翅休め  
お岩木の胡桃濡らして通り雨  
葛の葉に葛の花ちる岩木山  
お岩木の高みへぐんとあきあかね  
青りんご葉隠れお岩木雲隠れ

夏萩や岩木山麓駆くる風

青すすき光投げつゝ岩木山

脛にバツタ当りて落つる麓道

お岩木の日照雨を弾く青りんご

百千の蜻蛉お岩木麓村

青栗や岩木嶺を飛ぶ雲迅し

蒲の穂のお岩木かけて横靡き

夏休みお岩木を背の小学校

りんご未だ葉のいろアップルロードかな

草刈女お岩木仰ぎ腰伸ばす

お岩木に雲又かかると青りんご

りんご園前にてぞろぞろバスを降る

青りんご姿正しき岩木山

雲間よりお岩木覗く女郎花

綿帽子めくお岩木の夏の雲

お岩木の背よりむくむく入道雲

青りんご薄光りせるおでこかな

夏の野にちらばりお岩木写生の子

お岩木の夏の日照雨に顔濡らし

お岩木の素描峰雲も描き添えて

お岩木の日照雨に馴れっこ山の蟻

夏山に面と向ひて写生の子

夏山を写生する子の姿勢よき

スケッチブック夏のお岩木前にして

夏休みの宿題お絵描き岩木山

高照神社

お岩木は雲のスカート履き夏野  
お岩木の涼風徹る忠魂碑

お社の杉の下風涼み風

お岩木を背にす社の杉の涼

この奥に津軽家霊屋姥百合咲く

藩主の廟参道脇に蝉の穴

姥百合咲き津軽四代藩主廟

奥まつて御廟虫喰い落の中

蛸の廟へ長々石畳

お岩木の麓御廟の蝉の穴

藤田記念庭園

鞍馬石蜻蛉が端に止まりけり

岩木川早々溝蕎麦咲かせけり

お岩木に向きて小池の水馬

団扇風お岩木臨む座敷かな

作り瀧ここで涼めと木椅子あり

長勝寺

日盛りの三門連ね長勝寺

津軽公菩提寺裏手かうもり飛ぶ

青十賊寺は鎮まりかへりけり

弘前城

濠埋む睡蓮本丸暮れて来ぬ

下馬橋より睡蓮の谷見下ろせり

山唄

ねぷたの夜津軽民謡酒場かな

ねぷた（弘前）

手造りのよさのねぷたの仔細透け  
金魚ねぷた揺らしくる子の赤法被

蠟燭に透きてねぶたの武者・馬体  
ほのぼのと扇ねぶたの牡丹柄  
旅人も声を限りのヤーヤドウ  
津軽公ゆかりの牡丹炎ゆねぶた  
津軽公御紋牡丹の炎ゆねぶた  
団扇の手暫し忘れてねぶたみる  
鏡絵の関羽だんびら振りかざし  
鏡絵の不動明王青炎  
見送り絵小雪舞はせて雪をんな  
町名の名札さきがけ町ねぶた  
溜息を誘ふ鏡絵九紋竜  
見送り絵常磐御前の被りもの  
鏡絵に武者の素っ首十あまり  
鏡絵の大蛇は青く鬼赤く  
知事賞のからくりねぶた早変り  
さきがけのねぶたが見え来城下町  
町揺すりどどんとねぶた大太鼓  
跨り打つ倭武多太鼓の撥の反り  
剽軽もの金魚ねぶたがうろちよろす  
めらめらと紅蓮の扇ねぶた来る  
子供ねぶたヤーヤドウのこゑ絞る  
山車煽るヤーヤドウは鬼のこゑ  
扇燈籠（おぎどろ）の紅蓮見守り立ちん棒  
ねぶた曳くヤーヤドウの遠のける  
見送り絵安寿と厨子王戯る図  
見送り絵牛若丸の手を曳きて  
町々の扇ねぶたの艶くらべ  
ちびっ子の手に手に金魚ねぶた提げ  
雲漢へ飛ばされさうに大太鼓  
愛嬌を振りまき金魚ねぶたの子  
白眼の張飛関羽の武者倭武多  
鏡絵のこの透明は何處よりくる  
鏡絵の女美丈夫太刀かざし  
ねぶた絵の土産の団扇ゆるゆると  
扇面に女武者絵の艶なこと  
婆と孫やんやのピカチュウねぶたかな  
愛嬌を振りまきねぶたのどらえもん  
うつしみの顔へねぶたの灯の透けぬ

ねぶた果て青田のあをさ一入よ  
倭武多（青森）

旅をして夜毎のねぶたねぶたかな  
連ねくる倭武多太鼓や耳に胼胝  
しんがりは雨に見舞はれ倭武多人  
定番の美髭白眼の武者倭武多

三内丸山遺跡

縄文集落車前草の径丘づたひ

夏鴉遺跡の丘に何漁る

ななかまどの色合いをみて雨の旅

車前草踏み吾ら縄文人の裔

屋根草も夏草のうち復原棟

車前草に覆はれ竪穴住居の丘

青森の旅の徒然ななかまど

ななかまど雨降るたびに色づくも

青栗の木の生ふ縄文遺跡かな

車前草踏み遺跡ガイドのボランテイエ

車中

太平洋側は夏空嘘のやう

三戸の辺りの青嶺高からず

どこまでも仙台平野の青田づら

風鈴の盛岡過ぎて霧・小雨

黒土の畑いちめん豆の苗

七夕（仙台）

駅弁に七夕弁当なかりけり

仙台駅売店の小七夕笹

ピーターパン飛ばす玩具屋星まつり

玉澤のずんだ餅目に涼しきよ

白玉や奥羽の旅はここに果て

ビヤホール七夕乙女甲斐甲斐し

盆踊

校庭の鉄棒に倚り盆踊

子供用自転車であつて盆踊

盆踊提灯一つ点き忘れ

妹の手足遅れて盆踊り

踊の輪さらに大きく炭坑節

亡き歌手の若き張りごゑ炭坑節

その歌手のこゝしもう亡き盆踊

膝に犬乗せて見守る盆踊

よく踊る子には氷菓の配らるゝ

盆踊おこぼれ氷菓頂戴す

飛び入りの団扇片手に盆踊

何処より風のまにまに踊唄

母校まで足を運びて盆踊

盆踊ここでお仕舞い子供の部

町内の踊自慢の大人の部

夜の更けて踊は更に難しく

校庭の記念樹囲む盆踊

踊唄運ぶ夜更けの風の向き

一人脱け二人脱けして踊の輪

踊唄終に果てたる風の町

属目

稲びかり天の裏手を垣間見せ

夕立来て東京湾をぶつたたく

一二枚青葉飛ばして大夕立

落雷の合図よ空が瞬くは

やたら落ち手のつけられぬ雷となり

夕立中健気なる灯の点り初む

一夕立東（ひんがし）の空あかるくて

雷公のもぐら叩きに遭ふごとし

雷公のやたらゲンコツ振り下ろす

秋雷の呼び込む風か座敷抜け

秋雷の豆を煎るごと空ら響き

秋の雷折々横須賀基地の方

押入に片さるゝごと雷了る

また元の木に舞ひ戻る蟬はてな？

夜の蟬居間の玻璃戸をノックして

夜更け訪ふまさかの蟬でありにけり

夜蟬ヂと寝落ち難きを託てるか

長つ尻の蟬に口説かれゐるごとし

蜻蛉の眼を持つ郷の男の子

今日やること薬のむこと汗かくこと

のみ余す麦湯のコップぽつねんと

これといふ宿題はなし六十路の夏

頑丈な歯が欲しもろこし前にして

願望

もろこし食ぶ剣山のごと歯を立てゝ

アユタヤのもろこしの黄は僧衣の黄

晩涼の津軽じよんがら泣き三味線

番外

これちようだい まっくる黒助凍てなまこ

林火忌

彼の日のごと権兵衛坂は灼けをらむ

低く飛ぶ真昼間の蝉見てゐたり

今在さば七十路マリリンモンロー忌

前の路地蝉捕りの子が往き来して

日盛りを煌めき渡る風のあり

この通り蝉は素手もて掴むもの(孫に示す)

晩涼の水をコップに注ぎ鳴らす

蝉何かにぶつかると音かすだれの外(と)

宿題はもうやったかと法師蝉

朝曇り庭木に撒ける散布薬

どうみても秋の空なりバス待てる

孫の手が投げ出されあり藤寝椅子

帰省了ゆ前の家から物音す

母子して蝉捕り三昧残る夏

さるすべりは天展く花しろたへに

さっこんは若者共も甚平着て

せみとらせてくださいと子の門に立つ

墨するや蝉がすずろに啼ける中

蝉捕りに例の母子が通る頃

孫の手借る齢となりぬ夕端居

参道に蝉の片羽根落ちゐたり

蝉捕りのまだ来ぬ朝の杜の樟

青葉ごと振り落とさるゝ毛虫これ

この杜の瞬す蝉数如何許り

盆花を買ひに出掛けぬ朝のうち

盆花の色よき花の取り合はせ

盆花と芋殻併せて五百円

榊大樹果たして蝉はここに居る

市営プール閑散として盆の入り

根岸線市営プールが見えにけり

市営バス土用ダイヤといふがあり

鈴懸の緑陰にバス停りけり

よこぎれる活字の濃さの夜の蟻

阿波踊り茶の間に熱気持ち込めり

灯も取れずに網戸にゐたか金亀虫

蝉しぐれあたり暮れ来て先細り

行先に木があり揚羽諭えてゆく  
定刻に次男が戻る熱帯夜

烏龍茶いくら呑めども杳として

身のうだる昼とうらはら夜はずかぜ

食細き我に似合ひのきゅうりもみ

昼餉又けふも塩びき鱈茶漬

毎日がかう暑くては寅次郎

朝蝉を雀のごとく聞きゐたり

食べやすくうすみどりなるきゅうりもみ

遠吠えの消防サイレン熱帯夜

孫

ファックスであんぱんまんの夏見舞ひ

ぶどう酸きは改悛の情湧くごとく

灼け澄める昼の茶漬けの茶のみどり

拇指に巨峰の感触残りをり

天界に万燈ぶりのさるすべり

蝉捕りの子の付添ひはけふは父

暑さ故手許逸らして皿おしやか

青天に斯く風吹けば曼珠沙華

蝉逃ぐるぶうんと熱き風起たせ

古団扇中でも気に入りこのうちは

ビールにも注ぎ方ありて一講釈

ビールの風味泡もて封ずバーテンダー

てのひらに討ち取られたる蚊の瘦身

影絵めく立木とひらひらする蝉と

日暮れ待つ雀は雀蝉は蝉

まんぼうの蝉の味ある泳ぎ方

顧みる夏なり夜風の吹き込む中

蝉探す父子の真顔四つの眼

夕立の音の間合ひを詰め来たる

夕立空物足らなしと仰ぎけり

夕立雲もくもくと出てざつとくる

夕立にこりやたまらんと馳せる蝉

あまつちを降り冥(くら)まして一驟雨

蒼然と木立冥めて夕立くる

洞然と白雨の彼方見つめをり

夕立の雨雫切る芭蕉かけ  
小気味よき風をもたらし一夕立  
夕立来地に喚くもの疾駆して  
夕立の端の碧空に晒して  
夕立の夜叉駈けりして天聾す  
夕立に屋をはなれて蟬の翔ぶ  
夕立に対す身一つ煽りかぜ  
夕立に驚破（すわ）と葉叢の揺れごころ  
大翼たたむごとくに夕立熄む  
夕立の両耳聾す圏の内  
なまなまと草木打ちて大夕立  
なまぐさき物のにほひを絶ち夕立  
夕立の木雫止まぬ夜陰かな

どんどろとお岩呼びある太鼓の音  
蟬捕りの子を指図して通行人  
すんでのそこ蟬に逃げられ大きなこゑ  
哭き尿し放埒尽す秋の蟬

転げ墜つところが墳や秋の蟬  
夜が来る蟬は木立に収まりて  
かうゆう日がありて日毎に近む秋  
わたつみを九月間近き雲の飛ぶ  
垣内にずんと伸びくる捕虫網  
同窓の日焼け漁師のじゃん言葉  
付き添いのあくび出るほど蟬捕りす  
昼寝より覚めてどこぞの馬の骨  
脳しんとう間違ひなしの蠅叩  
喰はれたと妻の差し出すふくらはぎ  
二匹目の蚊を討つところ終戦日  
耐エ難キヲ耐エテヨウヤク夏ノ果  
青くわりんタバはゆっくりはたと来る  
出し殻のやうな蟬の音絞りをり  
風に乗りほろほろると秋の蟬  
かざし見る眼鏡の塵や八月盡  
秋蟬の壁成すごとし風絶えき  
身の為にならぬ世辞めく蟬音とも

冬は蟬鳴かないよという児の話に耳にして  
夏といふ概念掴み始めし子

終戦日深くしゃがんで廁の蚊  
蟬佛祀る平らな土のうへ  
遠き蟬こころに懸かる一事あり  
寂として死蟬の他消ゆる景  
夏畢ることをしみじみ櫛樹下  
顔見えぬ夏帽同志話しをり  
炎天の熱気持ち込む市営バス  
市営バス埠頭へ廻り雲の峰  
炎天の老人拾ひゆけりバス  
めつきり秋絵本のやうな街あるく  
秋ぞらの端から端まで吹き晴れて  
炎天を漂ひゆけり白日傘  
パスポート貰ひに緑陰なせる道

#### 横浜港

この道はチャイナタウンへ海紅豆  
夾竹桃舗道に風の絶えぬたり  
鈴懸の刈り込である灼け舗道  
白日傘行き交ふ新装大栈橋  
大栈橋波をデフォルメして涼し  
ちびっ子とポケモンの乗る納涼船  
納涼船デッキ賑はふビアテラス  
秋口の横波鳴れりタグボート  
めつきり秋白波の立つ横浜港  
秋光の横浜港に船寄らず  
ホテルニューグランド前飛ぶ秋つばめ  
氷川丸頭上の秋の日本晴れ  
ベイブリッジ豆自動車は蟻のごと

#### SCANDIA

大栈橋口の緑陰レストラン  
オーダーのビールさうだなハイネッケン  
操舵輪壁に懸けあるビアホール  
サーロインステーク灼ける海を見て

ペルセウス座流星群

こども等に流星群の天体ショウ  
未明かけ星の流るゝ北の天

盆

夜の葉叢鳴らす風出て霊迎

夜風出づ短か鳴きして盆の蟬

芋殻束半分残し霊迎え

門火焚く用意かさばるもの多し

門火焚くすこし明るきうちにかな

芋殻焚く炎を明るませ路地の風

芋殻折る音を遠祖聞きをらむ

芋殻焚くこの炎明りの永久にあれ

芋殻火に灰と足許照らさるゝ

芋殻焚き了へたる指の煙くさき

門火消えあたりは闇に戻りけり

茄子胡瓜顔突き合はせ盆の物

小ぢんまりしたる盆供の梨一つ

箸の水切って乾かす魂祭

この箸は輪島で購ひし魂迎え

焼茄子の直火強めて盆厨

紙ひねり妻は芋殻火起こす役

かたらひの中に送り火炎を細め

澄める炎に芋殻の燃えさしくべ足して

送り火の瞬く闇を見守れり

水替えの金魚のための日向水

妄想

日向水加賀ノ千代女をそこに置き

もう一汗かけと炎帝申されき

じつくりと骨の髄まで残暑光

あられもなく夏掛ひつちらかつてをる

法師蟬鳴き出す頃の雲迅し

夜に入りて一息つける土用東風

風のあることが救ひや敗戦日

格別なことなき夏でありにけり

蟬捕りの朝の巡回始まり

扇面のをんな艶たる秋あふぎ

行状記続きを読めるきりぎりす

桔梗の荅の爆破遂げてをり

世を容れぬ簾の内の詩(うた)ごころ

句ごころのやうやく定まる秋隣

切手など買ひ足しおかねば秋隣

室内の調度に目のゆく秋隣

読み直す古本一冊秋隣

カーテンをふくらます風夜の秋

妻

後かたづけやうやくおはり夜の秋

さみどりの紫蘇の天麩羅さくと秋

芙蓉咲きいささか過ぎしやすきかな

氷片のころりと鳴れり夏畢る

茫洋と床起ち蟬に狎れし耳

行きずりの人に鈍感秋の蟬

何となく読む雲の本秋の項

このやうに空澄み来れば芋嵐

一ト夏を冷房嫌ひの汝に合はせ

しゃかりきに蟬こゑ張るは後がなし

秋立ってウエブ喰い散らす新ウイルス

夕栄えに翅傾けて蟬飛翔

身を交はす術(すべ)抜群の蚊と対峙

ポンと押しメール開封今朝の秋

北東北 補遺

黒白のまだら燈台雪のため

車前草生ふ阜の墳土の固かりき

しんがりのまだ見えてゐる雨俵武多

夕焼けの海染め了る西津軽

顔にさと男鹿の秋風吹きわたり

旅先の風の津軽の水氷

車前草の一阜覆ふ墳どころ

武州 金澤花火大会

又焼（チャーシュー）いろ花火揚ぐるは崎  
陽軒

声援もて昇る花火を後押しす  
一趣向とんぼとめがねの花火かな  
一ト夏の弾けて了る花火かな  
花火消え巨きかつをのゑぼしかな  
一ト夏のこれでお仕舞ひ花火かな  
間を置いて地味な花火が上りけり  
はい来たと揚がる花火にこゑ合はせ  
煙たげに花火がひらく煙の隙  
似顔絵のおどけ花火に髭のある  
凧の声音使へる花火かな  
逝く夏に花束贈るごと花火  
花火了ふ躰はたいて砂払ふ

人魂のいろの手花火風に消え  
みちのくに淋しい空があり花火  
みちのくの淋しい空に咲く花火  
色抑ふ菊形花火上りけり  
奥深き闇を照らして花火かな  
雄物川川辺花火の煙待ち  
天心を震ふ花火に皮膚応え  
につぼんの芯円菊形花火かな

腰越・七里ヶ浜

海坊主頭上ぐるところ土用浪  
捲き上げられ漂流若布波に透き  
漂着の茎付はたき若布かな  
腰越より七里ヶ浜かけ土用浪  
土用浪くるりと波頭巻きにけり  
盆のもの打揚ぐ波の寄せ加減  
商風に際立つ翳が波となり  
土用浪もり上がりては谷が出来  
流木片それにつけても土用浪

土用浪泡沫漂ひみたりけり

泡沫と同じ淡さのヨットの帆  
腰越の墓地を背の駅カンナ咲く  
海に向く墓の盆花枯れてけり  
流木の向きばらばらに盆の浜  
秋霖のテトラポットにだんまり海猫  
黒き頭をやおら擡げて土用浪  
土用浪冥き翳曳き倒れけり  
江ノ電の吊革揺るゝ盆休  
夏果のすと立つ波はかみそり刃  
頭をむくといま立ち上がる土用浪  
先づ翳が水面を奔り土用浪  
土用浪暫し泡沫漂はせ  
商風の吹きわたる中白子漁  
突き出せる崎のかたちに渡り蟹

サーファーを呑まんと迫る波は鱻  
転落のサーファー波の谷隠り  
波の背に今馬乗りの一サーファー  
木の葉のごとサーファー転落波の谷  
サーファーら小雨の浜に火を焚きて

雨の日の魚左次小坪の地蛸なし

長谷・光則寺

透き通り仏師の家の郁子のあめ  
試し買ひ長谷の豆屋のだだちや豆  
夏萩の一葉一葉に宿る露  
青柿の雨滴びしやりと浴びにけり  
蓮の実の食べ方蓮を前にして  
雨の日は雨の明さの百日紅  
土牢へ病葉にほふのぼり道  
のうぜん花まだ咲き土牢までの道  
夏水仙咲く幼稚園長休み  
布袋草水輪ばちばちしたりけり  
大佛へ秋社のレトロ人力車

鎌倉文学館

逝く夏を風景眺め返すやう  
青みかん雨がぼちぼち降って来ぬ

建長寺

病葉の香を雨籠めの開山忌

属目

ゑのころの小雨を弾く青穂かな  
犬枇杷の半欠け啄み傷ならん  
盆過ぎの小庭の花のはざかい期  
薬が夾竹桃の茂み成す  
煙雨浴び櫂の黄葉ごころかな  
夏葎鉄路に埃くさき雨  
黒揚羽翅を一ト夏閉づるごと  
黒揚羽うねりゆく先視野展け  
掠れごゑ中途半端に昼寝して  
ごろりと横になつてもこの暑さ  
ひっ掴み団扇を持って横になる  
もう何も怖れぬ蝉の盲飛び  
特攻機蝉の片道飛行とも  
分厚なる巨峰の皮に唇当つる  
アフタヌーンティ熱く淹れ颱風裡  
節々の隆と蛇笏の青すすき  
風孕み芙蓉のけふの花の揺れ  
颱風の目はどの辺と上目して  
烈日の宙はすかいに秋の蜂  
桔梗のいろに馴染みて日を過ごす  
移りゆく雲も芙蓉もかるがると  
秋めきて雀のこゑの細みかな  
止まる蝉もうなき樟を仰ぎける  
終盤へ蝉さまようや西日中  
素（しら）風に桔梗の蒼賢しや  
夏負けもせず来て蝦のチリソース  
風立って蝉の乱痴気騒ぎ了ゆ  
ひっぱたかれぺしゃんこの蚊の垢じみて  
傍観の雀の横貌秋はじめ

懐にも事情がありて見切桃

雑駁な蝉音聞きつゝ箸運ぶ

乏しらの蝉吹き起こる風の中

数へてみて金魚五匹の夏畢る

古榎の実とおもへずその香立ち

蝉聚る庭のチャンチンモドキの木

庭に佇ちかへり見すれば逝く夏か

郵便夫翅ぼろぼろの蝉発たせ

晩夏の釘頭曲ってしまひけり

妻

お諸蒸す土偶体形疎んずも

そと発つは蜻蛉の視野に入るならん

やり場なし秋暑と言葉変はりても

目減りせし蝉は高きにホルトの木

絢爛と天つ日弾く葉鶏頭

出掛けに

眉描いて女のたしなみ秋暑かな

番外

恋猫のどこ吹くかぜの朝帰り



しじみ蝶

しじみ蝶 駆け巡る日となりゐたり

しじみ蝶 迷路愉しみゆくごとし

しじみ蝶 千草祝福せるごとく

しじみ蝶 一つは寂し二つゐる

地に沿ひて石ころ色のしじみ蝶

平凡な来る日明くる日しじみ蝶

しじみ蝶 吾にも執することありて

しじみ蝶 庭の何處かに飛んでゐる

顛末と云ふ語にわかにしじみ蝶

なりゆきに任せ飛ぶなりしじみ蝶

しじみ蝶 纏れ二手に岐れけり

去来また風のまにまにしじみ蝶

視野に入り視野を脱けゆくしじみ蝶

敷石をひとり辿れるしじみ蝶

戻りて小草に紛るしじみ蝶

しじみ蝶 踊り上手なパートナー

翳らしき翳伴はずしじみ蝶

人影の差すがごとくに秋の蝶

秋の蝶 舞ひゐる家へ回覧板

おのが聲おのれに聞かせ秋の蝉

眩きをも一つ洩らし秋の蝉

夏の風 邪貧乏籤を引くごとし

夏瘦の肋 鳴らして床を起つ

沖繩戦 吾は知らねど仏桑花

眼鏡とり 部屋を見回す震災忌

喬木の赤き 一葉震災忌

新涼のおでこ 連ねて消防車

孫に 蹤く蟬穴探しももうたくさん

孫拾ふ 榎の実きりなく掌に受けて

真似好きの孫としゃがんで蟬の穴

孫おうむ返しに「せみさんしんでいる」

孫が来て家中バタバタ秋祭

榎の実のぼとぼと落ちて乾ぶ土

榎の実の落つるに任せ神輿倉

榎の実を蹴り転がしぬ神社裏

榎の実のまた落ちてゐる神社裏

マンホール蓋に朝露燦々と

露降りぬ模様の混めるマンホール

虫の音のしつとりとくる頃合ひぞ

屑籠は大きほどよし秋鄰

ハンカチでおでこを拭ふ高架駅

紛れ込むこおろぎの貌秋灯

紅芙蓉月日の区切れ目淡くなり

金澤文庫 称名寺

松蒼く反橋赤く蝸寺

蝸寺弥勒信仰盛りし世

丹の橋の水面を秋のあめんぼう

仁王門汗を拭ひつスケッチす

常連の顔見ゆ講座蝉しぐれ

水底に緋鯉の滲む秋暑かな

白鷺の白光釣瓶落とし日

デッサンの筆走らせる玉の汗

日盛りの反橋の上にひとり佇つ

一山の蝉しぐれ聞く反橋に

背恰好ひよろりと墓地の槍鶏頭

称名寺赤門虫喰い柱に蝉

蝉しぐれ桜並木の小半町

仁王らも辟易貌やこの秋暑

むず痒し 躓れば毛牒をのぼる蟻

古書守に暑いと云へばええ暑い

反橋に秋燕あふぐ称名寺

野放図に岩に寝そべる早亀

蜻蛉の編隊亀の潜水艦

泛く亀の鼻先におつ夏落葉  
三段に翅折る蜻蛉卵塔に  
老杉の節くれならぬ油蟬  
赤門より仁王門見ゆ蟬しぐれ  
風くると目にはさやかにゑのこ草

地震図

古文書の鯨男が着物着て

寺前八幡神社

秋蟬の螺旋回して止まる樟  
三伏の鳩胸冷やす杜の土  
櫂の洞翳深々と夏逝ける

肋骨擦りつ聞ける虫滋し  
昼間見ておきし辺りの虫葎  
声徹る蟬捕り坊主新学期

軽装と云へど欠かせぬ秋扇  
老人の朝餉シャキッと胡瓜かな  
真つ青な木の実興がりむしりとする

青き木の実早やどんぐりの形して  
赤茶けた瓦の上をゆく秋雲  
五つ六つ海の方から秋の雲

日をまとも垣朝顔のしよげ具合  
朝顔棚日陰に設ふ心ばえ  
朝顔のさんざんな態見て過ぎぬ

ひようたんの大小間は皆んな好き  
夕風を齎す風船葛垣

この辺はしもた屋ばかり夏水仙  
ありありと蟻這ふ墓地の石の段(きだ)

この辺に咲くまんじゅさげ柀根方  
八月も末と噛みしむ塩こんぶ  
秋色を愛づ旅峠のななかまど

丈高く折りて挿花かやつり草  
目新しく原っぱいっばいえのこ草  
えのこ草コップに挿せば茎交叉

八月も末の街路の馬刀葉椎  
季寄せ読む秋はきっぱり立つ例句

雲泛かべ芙蓉を泛かべ深む穹  
えぞりんだう呼びみる後生掛温泉へ  
ポカやっつてもう追ひつかぬ浮輪かな  
運び屋の蟻の取越苦労かな  
泡立草後は野となれ山となれ  
神の留守呼び鈴押すは誰ならん

「子規を語る」碧梧桐

秋灯下食ひ物談義子規・碧・虚  
秋を臥す子規はへの字に口結び

回覧板受け取る処暑の恐縮貌  
鴨三羽夏果の川遡る

一団の鰻を見送る橋の上  
水面に鰻がゆつくり倒れけり  
小気味よき川風なんきんはぜの実に

川があり夏柳垂るゝべく  
朔日の風になんきんはぜ青実  
雌日芝に風やはらく当りけり

押し詰まる月の抜け道灸花  
秋は旅へ風の又三郎の国  
いっぽんの木に群る秋暑の雀かな

風知草ほつと一息つけばかぜ  
鶴田浩二鶴岡監督秋来ると  
朔日の雀は知らず震災忌

あけすけに見えて隣家の秋そうび  
八朔の雀降り立つ朝の土  
ぱちぱちと雀啄む今朝の秋

水呑んで暑さやはらぐ夜を更かす  
めいめいの部屋に灯の入る夜の秋

武州 金澤八景 乙鱸海岸 汐祭

祭舟舳に神主乗り込みて

穴子舟けふは化粧ふて囃子舟  
洋上をトントコ参る囃子舟  
穴子舟筒っぽ秋の空に向け

八九艘舟を仕立てて汐祭  
祭くる漁港にエイの子紛れ込み

沖合のとんびを合いの手囃子舟  
釣船や素風を捉えタモ五本

乙艦の汐風孕み祭幡

囃子舟乙艦の子の豆紋り

一株の夏草漁港のアスファルト

くつがへりさうに晩夏の浮鷗

晩夏告げ鷗飛び去る一直線

はたはたとヨット接近危うしや

海空のあはひを往き来晩夏の帆

晩夏の波幽く鷗の真貌かな

晩夏の波くらり海月を突き上げて

沖へ出て商風走る走る海

ウインドサーフィンあやつる風も月代り

ウインドサーフィン七彩の帆の駆け巡る

花柄のパンツ脱げさう浮輪の子

缶の蟹逃がして了る磯あそび

恒例 昭和歌謡全集

ブルースを巨体震はせディック・ミネ

伊藤久夫

肺活量大きい歌手なり熊祭（イヨマンテ）

岡晴夫

常夏のハワイ航路を岡っばれ

月夜道菅原都々子の口調真似

バタやんの玄海ブルース波ごころ

島倉千代子

峠路はりんりんりんどうの濃むらさき

鶴田浩二

燕とぶ街の俺（おい）らはサンドイッチマン

高田浩吉

伊達男浩吉つまびく三味線（しやみ）の涼

近江俊郎

伊豆の月湯の町エレジー口を衝き

目に清か東海林太郎の一本気

殿さまキングス

十八番（おはこ）なる「女の操」年忘れ

灰田勝彦

皆信ず男純情は星のいろ

淡谷のり子

窓開ければメリケン波止場灯のおぼろ

神楽坂はん子

舞扇ひらひら芸者ワルツかな

並木路子

ラジオよりリンゴの唄や疎開先

風化して路傍の地蔵風の盆

風の盆果てて川原の音伝ひ

熱海

その上（かみ）は華族の避暑地お宮の松

白粉花がいくら咲いても間（あい）の宿（しゆく）

● HAIKU200209sono3

秋田八幡平温泉郷と秋祭

八幡平から蒸ノ湯・大深・後生掛・玉川温泉と

巡り、東北の秋祭、盛岡秋まつり、花巻まつり、  
遠野まつりを満喫した。泊りは後生掛温泉と台温泉。

見渡す車内老人一色秋の旅

八幡平

立枯れの青森榎松そぞろ寒

夏花の名残止めて八幡沼

エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

火口湖へ降りゆく昼の秋あかね

芒は穂に秘湯連なる県境

登山者のタテヤマリンドウ色の帽

身に沁むや青森榎松原生林

八幡平夏の名残の梅鉢草

畚岳遠望りんだう咲く峠

楚々として梅鉢草の咲く高地

八幡平頂上芒の茎えんじ

榎松の立ちんぼ八幡平初秋

りんだうの峠より指呼もっこ岳

榎松を秋光引き締む八幡平

りんだうに会話零して歩きけり

初秋の湯けむりの立つ榎松帯

原初的景観榎松帯うそ寒

八幡平秋の白樺岳樺

八幡平裾野そろそろ岳樺

青栗や稲田明りに照り負けて

すすき季岩手県北バスの旅

ななかまどしつとり八幡平の雨意

八幡平がまずみの早や枝もみぢ

山は秋湯けむりの立つ国境

八幡平秋や出湯の梯子して

りんだうの宝庫八幡平あるく

アスピーテライン登りの草もみぢ

蒸ノ湯

野趣溢る出湯はしおからとんぼ色

秋晴れの肌着を干せり自炊棟

髪につく硫気出湯の空高し

初鷗のそれきり静まり返りけり

地獄谷飛べる蜻蛉の硫黄臭さ

ななかまど出湯に肌の赤らめり

湯槽より見ゆ榎松の初秋の枝

ピリピリと肌に沁む湯や昼の虫

秋冷の素首覗かせ露天湯に

山上湯すすき続々伸びにけり

すすき谷湯けむり上り湯壺あり

車前草の穂の錆ぶ地獄谷こみち

湯けむり立つ錆び虎杖のその向う

谷底の湯治場もみぢしそめけり

湯治小屋嘗て十六芒原

乳白の出湯に射し込む秋澄む日

壁露けし自炊道具の料金表

湯治場のすすき日を眺ねいぶし銀

湯治場の天下一品山清水

大深温泉

湯けむりに湯小屋包まれ秋小寒

芒群る中に湯治場一軒宿

お国訛り飛び交ふ秋の自炊棟

風邪引かぬことが取り柄と湯治人

熊に注意の立札花輪営林署

与太云って熊の出さうな道下る

がまずみの実に湯ぼてりの瞳を止めぬ

湯治の秋秋田弁はた岩手弁

県北の山に秋来て湯治人

榎松の下を沢水秋の声

蠅叩持ちつゝ談話湯治人

手に取りぬ何の錆穂と判らぬを

おとつと女郎蜘蛛の囿眼前に  
秋水に舌鼓打つ湯治人

秋山行根曲り竹の根に転けぬ

秋雨に打たれ溝蕎麦首を振る

色鳥を秘湯巡りの道すがら

自炊棟裏のすすきの花盛り

竜淵に潜む秘湯に四肢伸ばし

人懐っこくオンドル部屋の秋の蠅

湯治人秋の蠅追ふオンドル部屋

国訛り頭はに露のオンドル部屋

湯治場のすすき群がる頃となり

### 後生掛自然研究路

噴湯ときにケコと蛙のこゑ出して

赤のまま噴湯ぽこぽこぽこぽこと

硫気浴ぶ芒たまったもんぢやない

地獄谷風出てすすき硫気浴ぶ

へちやぼこと泥湯噴出すすきの間

穂芒のか黒く谷の酸性湯

硫気立つ岩に芒のぺんぺん草

火山弾転がる陰に昼の虫

たそがれ谷マッドポットの秋の声

註 マッドポットは泥を噴く湯壺

虫すだく余地無き噴湯の硫黄谷

露出して芒が原の赤茶け岩

坊主地獄早や目覚めゐる今朝の秋

坊主地獄大中小の露景色

うそ寒の奴姿の宿浴衣

ななかまど遽か向うに宿が見え

硫気浴び茎の黒づく糸すすき

心音もマッドポットも秋のこゑ

秋草に朝の天然蒸気音

後生掛の朝のりんだう露まみれ

濃く淡くすすき湯けむり流れけり

溝蕎麦に朝の川音頭ちにけり

後生掛の朝は厳しと鴉鳴けり

虫すだく坊主地獄の陥没箇所

草もみぢミニチュア火山の裾野にも

泥湯噴く原始の韻き天高し

### 後生掛温泉

湯疲れや長き夜に倦む生あくび

秋山の出湯三味爪伸びぬ

長き夜の湯治療法板壁に

後生掛の秋の出湯に身を晒し

山は秋ひとり長湯を愉しめり

夜長宿後生掛温泉七つの湯

泥風呂は遠慮長夜の湯に温む

木箱より首出す蒸風呂夜の長し

箱蒸しに素首覗かせ今朝の秋

さはやかに自炊棟の名極楽寮

万病の一つ吾も負ふ出湯の秋

### 大沼

とりかぶと沼は鎮まり返りけり

りんだうの朝の目覚め沼ほとり

白煙りさやかに地熱発電所

嬌声に話途切れる鳥兜

### 玉川温泉

ぎす鳴いて玉川温泉岩盤浴

岩盤浴秋暑の莫産を横抱きに

秋光の盈つる湯花の黄金いろ

湯治場の錆び木杭に秋あかね

秋口の肌にぴりぴり酸性湯

地獄谷湯壺発する秋の声

湯治場の岩盤の上のちろ虫

### 田沢湖周辺

田沢湖町谷地に色づく草もみぢ

田沢湖の上にペイネの秋の雲

遊び舟スワン行列湖ほとり

初秋の湯水集めて玉川湖

プランクトン生ひ初む湖へ瑠璃蜻蛉  
田沢湖の空を伝へる秋思とも

盛岡秋まつり（盛岡八幡宮）

実をつけて岩手県庁栃並木  
盛岡の街中色づくななかまど  
秋祭り山車は松前鉄之助  
車中

秋の旅不來方城をちらと見て  
秋の旅啄木旧居には寄らず  
盛岡の風流山車の勢揃い  
風流山車秋の八幡下りかな  
童らの手古舞装束秋うらら  
秋を告ぐ盛岡八幡例大祭

風流山車出を待つわんこそば屋の前  
次から次やれせはしなやわんこそば  
冷酒（ひや）にして口当りよき岩手川  
わんこそば屋の二階に詰める祭衆  
わんこそば屋の二階に待機祭衆  
わんこそば二十と五腕腹満てり  
初秋の祭待つ間のわんこそば  
わんこそば介添え娘の赤禱  
わんこそば食ぶもそこそこ腕の数

花巻まつり

花巻空港稲田すれすれ離陸せり  
街中をささらゆさゆさ鹿踊  
デンデコと太鼓打ち打ち鹿踊  
花巻ばやし太鼓に和する三味線（しやみ）  
と笛

活花の心もて組む風流山車  
山車に次ぐ祭の呼びもの樽神輿  
樽神輿昇きて花巻青年部  
鹿踊諸流の中の春日流  
縁台に家族風流山車見送る  
花巻まつりやれやれやれの山車太鼓

風流山車見返し遠のく刈屋姫

鹿踊八つの鹿の揃い踏み

鹿踊鹿のスキップ軽やかに

鹿踊袴の源氏車紋

鹿踊たけなは鹿の三つどもえ

鹿踊ステップ軽く一人舞

風流山車の上をゆく花巻宵鴉

風流山車の見返し風の又三郎

風流山車がらごろ花巻宵の町

秋はさやかに花巻神楽権現舞

羅須地人協会跡地

賢治生れ鴟も法華経唱ふ里

童話作家賢治の詩碑に小鳥くる

鳥威し賢治の詩碑へ韻きけり

羅須地人協会跡地へ鳥威し

下ノ畑ニ居リマス

賢治ゆかりの稲田へ伸びぬ丘の影

豊の秋賢治偲べとここに丘

秋あかね嘗て賢治のゐし畑

橋既に土に帰し無し

赤のまま賢治作りし弥助橋

花巻の雨ニモマケズ初鴟来

台温泉

地酒酌むばっけの佃煮肴とし

註 ばっけは蔭の臺

釜淵の滝

滝の上の落葉樹林に小鳥くる

赤松の林で拾ふくぬぎの実

釜淵の滝の岩場の草もみぢ

岩盤を伝ふ滝水雨の条

釜形（なり）の滝の音色の扇面に

滑り落つ音のいちめん滝広ら  
花巻の釜伏す形（なり）の滝やさし  
巖伝ふ滝水の条いとやさし  
秋雨を加え女滝の婉然と

薔薇園

大野林火句碑 直立に南部赤松遠郭公  
秋を告ぐ薔薇に囲まれ林火句碑  
賢治作日時計花壇秋日和

園芸種多彩

秋そうびチャールストンに朝の雨  
雨止まずセンチメンタルてふ薔薇に  
秋そうびスーザンに降る雨優し

遠野

遠野まで陸中一号豊の秋  
釜石線ペットボトルに稲田飛ぶ  
はあ、むがしと始まる民話露けしや  
秋うらら河童と馬コの物語

聞いてってがんせと婆の露けき言  
遠野民話聞きゐる両の耳さやか  
語り口低く民話の露けしや  
曲り屋の遠野民話の身に入むよ  
板の間の露けく民話を旅土産

蜻蛉の翅音の遠野物語

寄ってってがんせと遠野の胡桃売り  
枝川に秋の遠野の雨こまか

稔田の最中に稗のまんめんじん

遠野郷稲田をわたるデーゼル音

つんつんと稗伸ぶ遠野の稲田中

遠野民話聞く背に秋の蠅止まる

遠野民話「豆腐とこんにやく」身に入みぬ

遠野に秋もたらず町方大神楽

鶏頭の頭（かしら）化け物めく遠野

露草の早池峰へ向く田んぼみち

里すずめ未だ群れなさず遠野晴れ

嫁菜道連れ立つ遠野の女学生  
黄釣舟草遠野の雨に降られけり

鳶の下遠野町方踊りかな

雨ながら遠野初秋の青空見す

木ささげに遠野一円雨霞

蜻蛉と一緒遠野の雨に遭ふ

遅蒔きの遠野も末の豆畑

角付の南部ばやしに主顔

穂に縋り遠野のバツタ雨に遭ふ

稲架棒を担ぎ畦ゆく遠野人

旅馴れた婦人居りて

旅苞の遠野の柿を剥く車中

花巻の田んぼが見ゆる高架駅

遠野まつり（遠野八幡宮）

装束凜凜と遠野八幡宮神主

八幡宮祓殿にて鹿踊り

笛の音は森より遠野大神楽

野崎神楽六角牛神楽秋祭

かんながらちぎれんばかり鹿踊

註 かんながらはドロの木の削り皮

広前に遠野まつりの鹿踊

鹿（しし）舞の演目聞けばかかしとよ

雌鹿（めじし）狂ひ雄鹿（おじし）闘ひ倒

れけり

註 雌鹿狂ひは一匹の女鹿を男鹿が奪い

合う

鹿踊の演目

しし踊り十八番の柱懸りかな

註 柱懸りも演目の一つ

腰ざしのゆらゆら奉納鹿踊

南部ばやし造花紅葉を稚児負ふて

奉納舞鹿（しし）の在所は六角牛山（ろつ

こうし）

鹿踊太鼓叩きの孫も踊る

神楽見る帽に蜻蛉の翅休め

団扇もて踊り合間の鹿（しし）あふぐ

鹿踊伝えて遠野十五ヶ村  
八幡宮蜻蛉も神楽舞ひ納め  
刀掛け・ふくべ先立て鹿踊  
幟立て神楽は遠野大工町  
一位の実真つ赤に遠野八幡宮  
祭果て鹿（しし）の戻りの早瀬川

常堅寺

一位の実河童も火消しせしお寺

カッパ淵

秋水も刻もゆつたりカッパ淵  
河童が淵河童も秋思に耽る頃  
溝蕎麦の影ゆらゆらとカッパ淵  
流水の迅さに秋蝶カッパ淵  
秋声を孤り耳にしカッパ淵  
秋水の孤り鳴る瀬やカッパ淵  
秋陰の水音の憑けるカッパ淵  
カッパ淵紫蘇の実ひそと零れけり  
ふとん干す遠野民宿カッパ淵  
カッパ淵所有地主の稲田かな  
小鳥瀬川（こがらせ）の枝川鳴れる秋日和  
天高くガイドの河童駒引き伝  
赤のままカッパ淵へと径辿る  
カッパ淵秋冷帯びる水と翳

デンデラ野

サイクリング目指すは芒のデンデラ野

山崎

蓼の道自転車来て金精様

雑詠

牢乎として櫛一ト夏逝かせけり

牢乎として櫛晩夏の背景に

細君といふ語健在秋燈下

子規いのち縮める従軍鶏頭花

羽抜鳥十を失ひ一を得ぬ

くつろぎて骨まで伸ばす晩夏の温泉

なによりと妻をねぎらふ秋扇

蚊遣香効を奏しぬ六畳間

八景の一景に入り根釣人

根釣人牡蠣より固く口結び

引つ越しの噂立つ家秋簾

秋霖にぴくりぴくりと葉叢かな

秋の雨上る側溝より水音

鉛筆を削るや晩夏の音立てゝ

百日紅芙蓉の月に入りにつけり

家毀つ音秋天に銜して

凌霄花よく見し月と振り返る

いかなごの釘煮晩夏の熱飯に

八月を乗り切る麻婆豆腐（まあぼうどうふ）  
食べ

麻婆豆腐辛しと晩夏の顔顰め

嫁姑お産談義を秋暑裡に

えのこ草売地いっぱい展がれり

虫を聴くゆとり生まれぬ夜風のなか

夏果の髭また生えて来たりしよ

手を当てて晩夏の髭の生え具合

見栄えして鷹の羽すすき白雲亭

大船植物園

サーカスのピラ垂れ晩夏の横須賀線

鬼やんまじゅんじゅんじゅんと進みけり

樟青実地べたに落ちて煌々と

変な実の付いてゐたるはカンレンボク

睡蓮は大方むらさきアマゾン棟

一病息災恃める吾に蘭勁し

つん抜けて植物園の秋の薔薇

なほ翔びて縋るものなき秋の蝉

藤豆の棚下に日を避けゐたり

山ぼうし完熟の実の上を雲



炎花焦げつくやうな強日差し  
枳の実の落ちて三つに裂ける皮  
三つ程枳の実拾ひ事足りぬ  
枳の実を片手に三つ遅れゆく  
秋徼雨野草画展に長居して  
日のもとに睡蓮秋の日差しいろ

何首鳥芋術後五年の秋立ちて  
腎臓の形（なり）せるむかご予後の身に

須く太藺碧天目指すべし  
蓮の実の跳び損ねしが五六粒

秋晴れの都バスは花壇の日比谷過ぎ  
花乏しき日比谷公園秋の雨

噴水のひとり働き秋の雨  
帝国劇場银杏並木は季を得ず

嗚呼東京駅

赤帽のポーター徘徊驛初秋  
赤きレンガの驛より阿房列車発つ  
丸ビルより秋の東京驛臨む

蝉よりも遠き瞳をしてビール酌む  
忘れぬしことがひよっこりビール酌む  
ビールの泡鼻の辺りでぶつぶつと  
覇気のなき今となつてはビール酌む  
うたかたのビールの泡と了ふ一日  
一日が了る麦酒の泡見つめ  
返却日書き込む九月のカレンダー  
燈火親し借りて読む書に古名刺  
夜の長し眠気そのうちそのうちに

新涼の燈台五十万カンドラ  
これ当り諸は流行りのベニアズマ  
甲乙の乙の部類のベニアズマ  
割ってみて知れりお諸の甲乙丙

小石川植物園

養生所井戸の廻りの草刈れり  
 昆陽の甘藷畑跡みみず這ふ  
 ヒバの実のここだく下がる昆陽碑  
 草刈女木陰に憩ふ養生所  
 病葉のにほひそこはか養生所  
 養生所秋の桜のにほひかな  
 コーカサスサワグルミとよ黄葉せり  
 まんじゆさげ百茎妖気登りけり  
 彼岸花すうつと白む根方かな  
 まんじゆさげ煉獄の門飾りけり  
 日陰花まんじゆさげ樹下いちめん  
 死人花黒蝶懈く翅搏てり  
 灌木の日陰日陰にまんじゆさげ  
 まんじゆさげ弥勒浄土といふべかり  
 彼岸花ツンツカツンと生えにけり  
 花と茎のみのデッサンまんじゆさげ  
 まんじゆさげ蝶の如くに倚りゆけり  
 鈴懸の幹新涼を呼びにけり  
 鈴懸の大きいさ九月来たりけり  
 白萩に径を奪られてしまひけり  
 纏れ合ひ萩より零るしじみ蝶  
 萩枝垂れ花園の径通せんぼ  
 一条の蔓秋光を蒐めけり  
 気の早き街路樹黄葉お茶の水  
 蜻蛉の坂下りてくる小石川

高麗・巾着田

一本も折らずに来たりまんじゆさげ  
 まんじゆさげ屈んで入る金剛界  
 光明を湛え降る日やまんじゆさげ  
 一茎は落葉突き刺しまんじゆさげ  
 手の届く処に彼の世まんじゆさげ  
 まんじゆさげ高麗川（こま）の堤に勢揃ひ  
 赤光（しゃっこう）を放ち梵字のまんじゆ  
 さげ  
 木洩れ日は一縷の光明まんじゆさげ  
 まんじゆさげ百万本の茎襖  
 まんじゆさげ呼び名は五十幾つとか  
 まんじゆさげ日和堤を猶もゆく  
 ひよろひよろも精悍もありまんじゆさげ  
 まんじゆさげ堤を人のぞろぞろと  
 まんじゆさげ福音のごと射す日なり  
 高麗川を臨む林間まんじゆさげ  
 堰落つはくちなはならずやまんじゆさげ  
 秋水を引き巡らせて巾着田  
 穴まどひ息ひそめをる巾着田  
 木杭など取り片づけて秋収め  
 高麗人のなして棲みつゝく狐花  
 曼珠沙華ここより昇る天の階  
 曼珠沙華高麗の部落に下り立ちし  
 曼珠沙華見尽して佇つ水ほとり  
 曼珠沙華紅蓮に倦めばざっと見て  
 地べた割り蠟燭立ちの曼珠沙華  
 白茎の寸に寸足し曼珠沙華  
 しじみ蝶途方に暮れてゐたるさま  
 隣る世へ彼岸花咲く道抜けて  
 曼珠沙華黄泉のとば口此処にあり  
 曼珠沙華彼の世へ一步また一步  
 煩惱の河横たはる彼岸花

恵林寺

元寇・弘安の役思われて  
 始めて見し蒙古の火薬曼珠沙華  
 恵林寺  
 恵林寺に風のごと来てすすき季

恵林寺のくわりんの曰く「やう来た」と  
一位の実熱血快川果てし寺  
快川遺偈従容として銀水引

禅定閣

凡そ軍勝五分を以て上と為し・・・  
木斛の実重く信玄戦陣訓

秋声の足下に生まるうぐひす張

みんなの名残恵林寺杉襖

新涼の杉間に信玄入道墓所

信玄の菩提寺抜けて秋水縷々

一位の実武田家家臣供養塔

渡り廊秋冷の鯉潜りけり

信玄の分別顔や女郎蜘蛛

信玄の此処菩提寺の櫛の実

快川和尚下知下すごととざくろの実

快川和尚眩くごとく梅擬

恵林寺の秋や裏手の放光寺

恵林寺の土搔き鳴らし落葉掃

四脚門色なき風を通しけり

杉の間に信玄墓所と蟬の穴

晩蟬に滅却心頭大自涼

くわりんの実信玄訓言忘ぜられ

恵林寺のくわりん数葉もみぢして

色なき風恵林寺の廊わたるとき

信玄菩提寺木斛の実のいや寂びて

一位の実三つ分け遣る妻の掌へ

放光寺（萩寺）

青栗の投入の壺放光寺

拝観の最後のひとり梅擬

ひめしやらの壺いろの肌秋日差す

白萩の遅れ咲きぬし放光寺

参道のなほなほ奥へ萩の径

観音に林檎一つや放光寺

秋嶺の向う秋嶺うす墨に

ハーブ園

後学の為とて秋のハーブ園

ハーブ摘む指新涼の香を立たせ

新涼のハーブつまむや薄荷系

コスモスの風にこすれて甲州路

コスモスの首の振りづめ甲州路

コスモスの撓へる茎の揺れ戻し

甲州の山並み走る花すすき

なほつづくコスモス街道ナイスデイ

葡萄狩り

ぶだう狩り団体バスがどつと着く

四方の嶺々紫紺に暮れてぶだう郷

秋夕焼け真つ赤に染まるぶだう郷

ロザリオの果肉ぶるんと口中に

竜淵に潜むぶだうの木の日暮

高尾・ピオーネ・甲斐路とりどり葡萄狩り

実り待つ棚棚のぶだう郷

水晶玉ぶだうロザリオつまみけり

旅土産片手に重るぶだう籠

ぶだう郷山並み暮れて巨峰いろ

露けき灯ぼつりぼつりとぶだう郷

新種のぶだう試飲ワインを振る舞はれ

垂涎の黒葡萄狩りいよいよや

ぶだう郷奥まる山の翳りかな

ぶだう郷夕日輪を宙吊りに

雑詠

雄日芝雌日芝まんめんじんの野原かな

秋日差しこつとなんきんはぜの実に

秋くると目にはさやかに鼠の尾

註 鼠の尾は雑草名

もう一つくしゃみをおまけ今朝の秋

くしゃみしてとりすましたる役者顔

仲秋に入りてくしゃみの走りかな

小鳥くる靖国神社の大鳥居

降つて湧く麓の鴉に朝の飢  
鷹の羽すすき植え込み庭の趣得し  
坂の辻秋風吹けるお茶の水  
のど自慢ニ―ハオ秋の北京より  
無花果と云へば疎開の生活（たつき）のこ  
と

月なかの青くわりんより青抜けて  
櫃の実のそれと知らるる曲ある香  
とんと本読まぬこの頃瀬祭忌  
書を読まぬこと甚だし火の恋し  
秋口の雨の空見てバス待ち貌  
家一つ毀たる跡に夏水仙  
木犀に気づき始めてより数多  
木犀を見つけしこゑの後ろ向き  
鳩サブレ割りて二つに秋のこゑ  
金木犀雨がかほりを抜きにくる  
新聞の一面に載る良夜かな  
神奈川版三溪園の良夜かな  
一面に良夜と健闘力士のこと  
今年酒いささか乍らと返盃す  
今年米妻はもとより炊き上手  
ありあはす芋の煮しめに一善飯  
一合が二合と弾み今年酒  
鉛筆をまとめて削る今朝の秋  
忘れぬうち菓飲みけり水の秋  
飯うまき三秋も早や半ばかな  
物見遊山麓の桜紅葉より  
巖々の先づ暮れそめて根釣人  
天高く椰直立の心意気  
滝を見て帰りの五人紅葉茶屋  
海浜の蘇鉄を艶に月今宵  
吾亦紅ふらふら風におどけるよ  
案山子田を篤と拝見お月さん  
手さぐりのうす暗がりや後の月  
夕紅葉且つ散る国上山ならん  
試に風船かづら突きにけり  
重くれるくわりんは月にまどかなり  
月見の座とんと忘れてゐたりしよ

夜半に和す  
月の前はばかり通る雲一つ

衣被剥きつゝばやく何のかんの  
土産の栗栗飯にしてなほ余る  
判り易く話す御仁や衣被  
朝食の話題は菊の荅のこと  
月末のサルピヤに降る雨白し  
菊月の盃に酒なみなみと  
末永う二人三脚菊の酒  
ぶだう狩りしたることなど九月尽  
腰伸ばす婆みて銀杏採日和  
それとなく気の利く妻よ菊膾  
晩酌は一足早し菊膾  
秋の七草巡りの寺の桔梗かな  
桔梗や椀にめうがのすまし汁  
萩桔梗秋の七草巡りかな  
この辺り半農半漁の菊畑  
みるからに黒土こんもり牛蒡引  
長き夜の長き電話の話し  
思ひ立つて分け入る山のゐのこづち  
一茶の句碑建てある村の蕎麦の花  
こ奴めと栗の虫にはもう慣れて  
芙蓉明り岐阜提灯の彩をして  
ついとくる来信に似て木犀は  
合歡の実を淋しさうなる風鳴らす  
曼珠沙華もう咲く頃と気も漫ろ  
鯛雲ことさら思ふこともなく  
女郎蜘蛛初秋小さき罎を懸けて  
木犀のある日ぱたりと疎遠なり  
埃くさき道どこまでも草の花  
家毀ちまた家建てゝ黄落期  
おろしたて肌着の硬き黄落期  
曼珠沙華夭折といふけ遠さに  
木犀をゆき過ぎしかと立ち止まる  
木犀の初々しき香走らす  
木犀に沈むがごとく大藁家  
咲く余る白粉花の道通る  
葉鶏頭幼な彩してもどかしや

門閉めに出でて仰げる小望月  
寂として紙面に零る木の葉髪  
一文字に術痕露けき身の証し  
床づれや呻きし夏を顧みて  
朝比奈道ゆくさきざきに女郎蜘蛛  
手のこんだ囲の張りやうや女郎蜘蛛  
女郎蜘蛛大き囲を張る留守の家  
よろよるとしじみ蝶来て磧草  
悪友の遠のき猿酒欲るころ  
木の実降る山を前にし即興詩  
サルビヤや一人守る家閑散と  
雌日芝の自と在れば独り言  
しじみ蝶止まるまで見て草っぱら  
ほどほどに匂ひて木屋香の抜けし  
きちきちの一途な翅音径外れず  
女郎蜘蛛こんなに肥えてふてぶてし  
首塚の草刈るこころで一区切り  
石掴みころんと倒るしじみ蝶  
草の実の呟く中をあてどもなく  
あれこれと足鍛ふ術蓼の道  
長き夜の大方は反古棚の本  
やや寒の鉛筆握り命と書く

悼  
蜻蛉の翅音のごとく昇天す  
蟪蛄の三角の貌キューヴィズム  
晩年といふに異議あり猛り鴟  
甦るまなざしをして水引草  
こだはりのするりと解けて秋の風  
ぺしやんことなりし秋の蚊塵と捨つ  
食らひつく秋の蚊打つにまだまだよ  
この像の幾年ぶりや一遍忌  
夢も見ぬ長き夜のまた始まりぬ  
萎びさす橡の実死蔵といふべきか  
薊に棘あるぞ用心してかかれ  
やや寒の硝子戸少し開けておく  
いのち伸ぶ旅を続けぬ露の中  
闇底に深沈として金木屋

最上川沿ひ花すすき花すすき  
縞シャツのモダンな案山子もあるものぞ  
村起し案山子祭が催さる  
智慧者の猿には効かぬ威銃  
内心は素知らぬ振りの衣被  
郁子の棚いつも気になる家の前  
磯菊や運動靴の砂はたく  
塗箸もて断ち割る芋の煮っころがし  
紫蘇の香のふんと粗塗り薬味入れ  
三人のいつもの夕餉めうが汁  
稲刈ってあつけらかんとせし日和  
くわりん落つことを夕餉の話題とす  
さふらんに凝った字を当つ俳諧師  
蓼の花とんと忘れて身の病  
独酌が板につきけりちちる虫  
少食のおかずは三品とろろ汁  
果し合い活動写真のすすき原  
ひやひやする机の肘を掴み佇つ  
べい独楽の尻尖らする齒科医の子  
かぶりつきおこの味ぞ郷の梨  
すんなりと胸にさされて愛の羽根  
線路際一家総出の稲じまひ  
稲刈って蝗逃るるさきは畦  
稲雀ばかり映して道路鏡  
脳震とう起こせし秋蚊を屑籠へ  
芋虫の貌は何處やら横を向く  
芋の露燦と散らして銀河系  
蓼の花怠惰の虫が首擡げ  
烏瓜粋な青縞装いて  
持ち物の点検鯛雲の下  
リレーはいつも部落対抗鯛雲  
山上の風のさまよふ松虫草  
すべすべの新刊書繰る黄落期  
風露草紫がかる薄日差し  
新橋の驛前夜寒のサンド井ツチマン  
独り言つ蟹の半信半疑かな  
鍵穴に鍵のぴしゃりと合ふ晩夏  
黄落期家の合い鍵妻が持ち  
神妙な顔して待てる温め酒

とつときの九谷の猪口に今年酒  
新刊書繰る手ひやつき火恋し  
温め酒この一刻がすべてなり  
盛り過ぐ花野に鳴ける昼の虫  
月さしてぶだうも甘さ増す頃ぞ  
間引菜に昼酒の箸上げ下ろし  
内閣改造間近き黄葉の官庁街  
巡礼の秩父といへば栗林  
栗飯の栗剥き給へと云はれをり  
鶏頭をひよんなどころで見し記憶  
鶏頭花空気違へば彩違ふ  
とぼとぼと行く径見えて月真澄  
甲州の鶏頭の径往き暮れて  
物識りの女指さす血止草  
くわりんの実今宵の月に安んじて  
皓々と月を上げたるくわりんの実  
信州の月のほとりのくわりんの実  
くわりんの実今宵の月と遊ばゞや  
混迷のすすきが原をやつと抜け  
貝割菜海まで続く丘の径  
虫喰いの赤門抜けて柿紅葉  
通るたびここは棗のありし家  
絞めらるる鶏のごとくに蒲穂絮

番外

蔓ものの花から咲けり夏の山  
冬の月柘榴木乃伊に仕立てたる  
人の頭を圧して花火の炸裂音  
供華枯れてひと言北風に吹ける  
抜書きの反古をかかえて寅彦忌  
滴れり三葉虫の潜む岩

八幡平拾遺

露の日をいのち短しとて旅へ  
いのち伸ぶ蜻蛉のくる湯に浸り  
すすき見つ出湯にいのち伸ばしけり  
後生掛の湯けむり流る初紅葉  
鬼やんま谷地睥睨の風情なり

地獄谷蜻蛉の曳く湯の匂ひ  
花すすきいのちを伸ばす湯に長居  
後生掛の霧の香つよし硫黄谷  
後生掛の水草もみぢ惜しまれて  
湯治場へ脇道下りて葛の花  
霧の香に硫黄の交じる温泉場  
番頭曰く  
すすき見て露天湯に汗流されよ  
湯治場の自炊棟裏桐は実に

武州 金澤山（きんたくさん） 弥勒院称名寺

木瓜の実の寒山拾得何話す

光明院跡

四脚門残す一寺やまんじゅさげ

まんじゅさげ当山山号金澤山（きんたくさん）

薬わたる一匹の蟻まんじゅさげ

まんじゅさげ赤いは宗旨に係はらず

当山は真言律宗まんじゅさげ

郁子の棚窺ひるれば怪しまれ

烏瓜漫ろ絵ごころ誘ひけり

べたべたと朝鮮朝顔落花せり

秋冷の人形置かれ人形塚

まんじゅさげ菟まり咲けば墳めきぬ

もみぢして学問の木や孔子木

金澤山（きんたくさん） 文庫跡地の楷紅葉

実時の墓所幽明のまんじゅさげ

花穂つんと紫蘇の実もどきの雑草（あらく

さ）よ

新しき地蔵の前掛けまんじゅさげ

これも又一興柿の虫喰い葉

曼珠沙華元寇の絵図さながらに

雑詠

夏水仙昔のまゝの家が佳し

木犀の香立ち鉄壁なせりけり

榎の実に足の踏み場もなき根方

花野行覚えて忘る千草の名

秋の夜の長湯の爪にハーブの香

豆の葉の黄ばみて遠野日和かな

秋風や履き減らしたる靴の底

履き癖をとやかく云はれ秋風裡

秋の昼着たきりすずめ本を読む

黄葉見に洗ひ晒しの一枚着

初鵬や夫婦の呼吸合つて来し

栗剥きつゝ妻の話を受け損じ

秋天下ポケット押え探しもの

小鳥来る空を見渡し反橋に

先づ鯉に目を奪はれて萩の庭

鯰の髯弁士一世風靡せり

これ以上赤くはならぬ唐辛子

橡の殻捨てゝその実を持ち去れる

さてと云ひ机に向ふ夜の秋

広辞苑あちこち割るや虫の声

秋の夜の眼鏡の置処またも忘れ

朝寒の異口同音に冷えのこと

寝余ればまた起き出して長き夜

霞網打つたるやうに鳥渡る

栗飯の二膳目もまたうわの空

大航海時代思ほゆ釣舟草

連れ立ちて屏風の袖より天津雁

烏瓜縞を装う数寄心

冬瓜をもてあましをる一家族

里巡る話の合間竹の春

秋霖に首すくめ鳩うづくまり

羽抜鳥みてくれよりは達者なり

皆右へ私は左へ羽抜鳥

怨敵に立ち対ふごといぼむしり

女郎花満面に日を湛えをり

穴惑汝も齢を曳きづるか

葉叢よりくわりん数寄顔覗かせて

順ぐりにお迎えが来てめうが汁

この辺り昔の家や赤のまゝ

賄いが手ぐすねひいて紅葉宿

むくろじ科の草の風船ついてみぬ

かにかくに人は生きやう青ふくべ

解決にまだ程遠し秋の虹

石叩湯の川巡る温泉場

人混みに巻き込まれゆく愛の羽根

隼人瓜晩年だんだん面白く

早稲の香に吸い寄せらるゝ畦の虫

近道のつもりが何ですすき原

満月ののぼりきるまで厨ごと  
莫藎の上に婆を満載川施餓鬼  
鉦の音を風の渡せる川施餓鬼  
鼠尾草や石橋直り木の橋に  
相撲取草履つかけ総武線  
ふんばってどんぐり眼の角力取  
踏み込めば翅音発ちそな八重葎  
奥津城の溺るゝばかり草の花  
草の実の呟くがごと非難せり  
一つ一つ順に片づけ草は実に  
宿題が一つ片づき秋夕焼け  
草の実の三角指に転ばせて  
子の身体廻して取りぬ草虱  
草虱取りの続きを車中にて  
品書きにつられて所望走り蕎麦  
昼どきをサービス料金蒲焼屋  
迎え火の習わし如何に子の世代  
鷹渡る半島巨き腕にして  
呪いのごとく揺すれり濁り酒  
太刀魚のだんびら抛る魚市場  
大根蒔く漁師の自給自足畑  
地虫鳴く皆もやもやを持ちて生く  
団栗の痛さうなこゑ靴底より  
榎の実の匂ひむらむら神社裏  
地藏盆白粉花を蒐む子に  
禅寺に生じ破格の猿茸  
ぶだう郷飛んで甲州雀かな  
湯治場を昼からつつむ虫の声  
守武忌滅亡論など何のその  
竜淵に潜む箆笥のナフタリン  
参道に秋づく桜のほひかな  
秋の蚊にはぐらかされてゐるごとし  
故人の眼水引草の穂に宿る  
秋の蛇人目に触ること厭ひ  
林間にたまりては干ぬ秋の水  
草踏めば骨の音して秋磧  
村童になめてかかられ秋の蛇  
停年はとつくの昔衣被  
大撓みしていちめん萩の海

秋の浜流水を目に収むのみ  
流木と犬と白波秋の浜  
湯屋の煙突白煙り吐く三日月に  
山粧う地道な術（すべ）といふべかり  
散る柳潰れずにある瀬戸物屋  
秋はサルビヤ一彩のみの庭が佳し  
糸瓜忌や手加減せず句を敲く  
糸瓜忌や等類の句がまた出来て  
曼珠沙華滅相を雨叩くなり  
紫蘇の実を好物として食細し  
思草ちと出来すぎの字づらかな  
種蒔きの朝顔そのまた種を採る  
種を採る音の暫くしてゐたり  
秋の日の植物園をあとにせり  
秋の灯に湯呑の絵柄廻し見ぬ  
秋の虹ゆすり蚊わいわい云ひながら  
知らぬこと知らぬとこたえ秋の暮  
先方の都合うかがふ秋の暮  
先方の出方待つのみ秋の暮  
いきさつはどうでもよけれ秋の風  
受付に大き蜂の巢展示され  
家中をまだふらついて秋の蠅  
秋雨に降らるゝ一日何為さん  
手向花鶏頭多し伝心寺  
藍染の作務衣馴染みて秋深む  
すっぽりと木覆ふ葛の円みかな  
秋草は茎を活けるがごとくなり  
秋草の代表としてすすき活く  
烏瓜千切れし蔓の切れっぱし  
虫の声密にして夜雨上るらし  
足型を妻と見比ぶ秋日の縁  
お隣の次にと頼む松手入  
小鳥来る清澄庭園にて落ち合ふ  
マロン色大茸さんこんにちわ  
帯書きに並べし讃辞黄落期  
蓑虫の蓑を着こなす相模晴れ  
紅葉且つ散る平家の里といふがあり  
歯切れよくもの言ふ人や水の秋  
お白州で白切るごとし遠州晴れ



思ふこと絵書きならねど秋草図  
時折は落葉が当る木馬の背  
胃にひやひや落つる水道水の秋  
雨もまたよろしや乱る秋草に  
雨雫して秋草の穂といふ穂  
樟の実に雨透きとほり透きとほり  
百草に雨の上りし川のそら  
積年の一病いとへ秋の雨  
蛤となりし着たきりすずめかな  
俳諧の淵にはまりて寂鮎は  
藪肉桂大樹こんもり星月夜  
長き夜の書架に辞林の背の古りて  
うち曇りをるも今宵の月のうち  
ゆく末を風に任せぬ鳥瓜  
木屋は家の中まで寝しづまる  
樽にはいつも上りし男郎花  
婆同志お十夜の灯に濡れにくる  
据え膳に宿定番のきのこ飯  
紅葉の見頃予報の始まりぬ  
白雨の油のごとき跳ね脚よ  
手を振って歩む宰相黄落期  
練達の士集ふ内閣黄落期  
黄落の最中の布陣新内閣  
颱風の前ぶれの風なまめかし  
テロリズム  
底打ちの株価刺激す唐辛子  
何云ふか鼻党の片割れが  
ゆらゆらと揺れて良夜の芭蕉かげ  
秋もはや脂抜けたる秋刀魚焼く  
犬枇杷の紅の印象鮮明に  
眦に紅ほとばしる芒かな  
喜びのこみ上げてくる熟れくわりん  
由比ヶ浜遠うねりして盆の波  
つけ焼の藪の天麩羅良夜明け  
貝殻敷き松葉牡丹の昔顔  
手踊の人に憑きたる夜叉の影  
冬菜汁味付けするに黒胡椒

日本を秋雨前線分断す  
虫絶えて夜雨は募るばかりかな  
金澤八景  
落雁の乙艫の灯をはるかに見て  
貴人の如く分けゆく萩の叢  
子規句翻案  
一本の松茸の価を論じけり  
虫の音におつとりとまた性急と  
細腰の雀降り立つ秋の土  
夕日浴びもの狂はしき柘榴かな  
なかなかの難物郁子の口むすび  
秋立つと椰を掠めし雀かな  
一言のことわりもなく裂け柘榴  
枕頭に韻くその夜の落し水  
鳴る水に尻こそばゆき川床料理  
微震  
長き夜に首擡げたる大鯨  
疎かにするものも無し柿皮も  
山蛭の身体器用に使ひけり  
銀杏のさみどり心倣ふべし  
梨と皮夜半の別れを長々と  
舌を巻く程のぎんなんなりけらし  
俳諧の落穂拾いの夜は更けて  
掌に見比ぶ椽の実の三つ  
快晴のそらに瞳くななかも  
ふとん剥ぎぬたる寝相は落鰻  
出湯の秋湯上がりの手のささくれて  
望の月覆へる雲のいつかなし  
玄関に雨月の靴の匂ひして  
末枯れの一葉ぶるぶる震えゐて  
万灯を曳きゆく月の都まで  
雌日芝を摘む寄り道の手始めに  
無花果は機嫌の悪き顔したり

蘇鉄らのずんぐりむっくり無月かな  
闇底に鯉の跳ねたる無月かな  
無患子の実の藪を打つ音聞かな  
燈台の鉄階を霧濡らし初む  
白妙の翼浦賀の霧払ふ  
霧に脚垂るる鷗の淋しさよ  
舞い戻る次男夜寒の忘れもの  
匙に乗せ味見の花豆運びくる  
満月の腹擦りのぼる家危うし  
満月が近々と見え腸（わた）めくもの  
揺さぶられどうしの人生蓑虫も  
百草の玉碎颱風一過かな  
蛇口より水の塊震災忌  
測量士赤のまゝより十歩ほど  
蔓たぐり途中で止めし跡まざと  
活け花に風流持ち込む枯尾花  
鎌持ってそれぞと指せる悪なすび  
イヌビエとも相性のよきねこじゃらし  
敗荷を見にゆくといふ酔狂な  
敗荷より俳句授かるまで長居  
白菊の月輪黄菊の日輪と  
しろがねに月の瓦と萩叢と  
自炊棟ありし辺りは皆すすき  
こんな夜もあるもの羽蟻の大発生  
蠅叩ぶん廻し卓叩く音  
雨あとの木槿の花はぺっちゃんこ  
瓢箪に興ず亭主の顔が見え  
小野道風  
道風の末流にして墨蜻蛉  
関東にその名聞こえて禅寺丸柿（ぜんじま  
る）  
蜂屋柿高名なれど見たことない  
蓑虫のけふは寛ぐ蓑の中  
蓑虫の着たきりすずめ押し通す  
鳴り物入り地元花火もかくて過ぐ  
何となく家出て月の今宵かな  
赤松のすこぶる赤し十夜寺

流木に盆波ひびく渚かな  
永劫に廻る盆燈籠の蒼  
胸内に留めおく一事草の花  
盆波の音聞きに来て由比ヶ浜  
誰が歌に  
季来れば咲く上海の鳳仙花  
要領のよき人使ふ秋扇  
何か吾に言づてしたき虫音とも  
待宵の湯呑をつつむ両手かな  
一つ風呂浴び来て虫に和む夜  
秋草を倒せる雨の定めなき  
ぐい呑の木目あらはに今日の月  
月祀るすすき折り来し此通り  
草虱甚だ以てけしからぬ  
犬小屋の屋根も明るう明月に  
庭草の虫の宴に吾も参ず  
ぶだう棚あたり一带暮れて来ぬ  
霧の戸の開け閉め百合が司どる  
山百合の一念發起根本寺  
霧の触れゆきし木石皆親し  
霧濡らし始む萬物呱呱のこゑ  
たちこめる霧の魔法を黄菅解く  
秋深むばかり男嶽に女嶽添ひ  
さる御仁に  
みのむしの声聞くまでに臆長けて  
秋螢敢えて点さぬ道暫し  
蓑虫の人見知り顔引つ込めて  
村雨の無音を吸へる八重葎  
走り根に当たって己が檜木の実  
孫も真似て木の実拾ふや木の実の海  
先達を先づは尊び明治節  
散策の顔明るます郁子の棚  
長き夜話引つ張り長電話  
孫が出て何やら長き夜の電話  
白鷺ゐてあっちこっちの田を眺め

終日や秋雨の音ぱちぱちと  
甦る記憶ありあり木犀に  
一枚の刈田畦木の高囲い  
松手入寺町小路の一軒目  
職退きて只の親爺のちゃんちゃんこ  
初はつの浮く田んぼの窪の水明り  
名月より一段落つる灯に読書  
小鳥来る花巻に句碑物語  
花巻といへば赤松それに月  
枯れざまも月に窮まる敗荷  
のっそりと満月迫る一立木  
露落ちて下葉の芋の露を打つ  
風呂敷を煽るが如くエイ泳ぐ  
鳴子でも鳴りそな峡の村構え  
鳴子詠む句より鳴子の音を聞く  
聞き取らん鳴子の句より鳴子の音  
鳴子縄そんなものにて何払ふ  
月下にて山田の案山子隙だらけ  
案山子には案山子の魂胆ありといふ

明治四十一年

紅緑の添削十句参拾銭

夜を長く長く使ひて栗を剥く  
食べこぼしする程老いてゐぬと我  
雨漏りのする夢みるも萱の頃  
下野の國の浪人バツタなり  
水飲んでそれからする事無き夜長  
豆電球点けて夜長をなほ長く  
何か鳴く夜長の椅子の脚あたり  
年寄の部類に入り夜の長し  
よその家夜長の電話ながながと  
さう思ふことのためたび冬隣  
芋剪れば頭から浴ぶ返り露  
雨土をえぐりて榎の実の落下  
参道に木の実落つ音新しき  
石畳杜の木の実を弾ませて  
隼人瓜朝寒かこつ通学路  
灯に温もり散髪帰りの夜寒道

食事果て皿に夜寒の魚の骨  
我こそは武蔵ノ國のいぼむしり  
舟虫の古老は髯を動かすのみ  
待宵の以心伝心月と雲  
挫折とは斯くなる月の枯蓮  
黄泉より吹く風に芋殻火燃え立たせ  
秋思とは足重ね足解きほぐし  
だつと脱ぐ喪服虫の音夥し  
短気にして長湯菖蒲の香に染まる  
真白き犬良夜の土に頤埋め  
秋雨の納まるときを待つて外出  
妻よりさきに寢床に入る夜長かな  
本の上に眼鏡を外す夜長とも  
泥舟を狸の漕げる秋の暮  
簡単な芋の煮つころがしが夜食  
魚群探知機持つ船ばかり秋天下  
芋殻火の風上ミ側に妻廻る  
東洲齋写楽の眼持つ皮剥よ  
金魚見て極楽の夢授かりぬ  
良夜の池搔き回す奴罰当り  
馬刀貝の潮天に唾する如くなり  
山妻の背中の見ゆる夜半の秋  
仁丹の看板のこる野の錦  
あきらかに案山子は自滅月明に  
交じり咲くものくさぐさ八重葎  
かたはらにひょうたんを置く良夜かな  
秋雨の慰め顔をみる思ひ  
雌日芝の上に雄日芝倒れけり  
いきり立つ秋の蜂見て眼が荒れる  
重ね降る雨に雌日芝倒れがち  
雨当るたびに磧の野菊揺る  
小火のごと四方の野山の錦かな  
野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨  
大鯉に応えて山の色づける  
コスモスに濃淡ありぬ旅の情  
一病を持ってばことさら厄日など  
鼠の尾らしきがすると野路の秋  
柳散る川うらぶれて暮るゝのみ  
柳散る動物園の閉園時

焼諸の焼きあがる音悲しげに  
柳散るここ新橋のネオン街  
酔人の肩にほろほろ柳散る  
画家蛇骨描ける作に夜長かな  
命伸ぶ薬掘りとは神妙ぞ  
白菊のかたへに言葉失へる  
薬掘隠者のごとく山に入る  
野分くる木魚一つが守る堂  
秋ぞらは呆と晴れゐて埴輪の口  
旅情濃くコスモスの真直中  
中華街むかし立ち籠む夜霧かな  
馬車道のあかがね椅子の夜露かな  
裕次郎噎ぶ夜霧に消えしまゝ  
数珠玉の風に呟く音なるか  
顔寄せて木瓜の実何を話し居る  
野の宮の別れなんぞと云はれても  
小流れの向うコスモス小走りに  
代官の墓石転けて大野分  
齢のゆく俳句仲間と摘む野菊  
この我が薬掘りとは爺むさい  
句の鍛錬作ってみしよう薬掘り  
木瓜の実の大愚天下に晒したり  
むさき雲迷惑顔に望の月  
草の花歩まねばけふ往き着けず  
とつときの讃辞をゆきざり野牡丹に  
桔梗の言葉は推して知るべしと  
てくてくと花野ゆく人豆粒大  
外輪山すすきは変り果てにけり  
甘草に浜の夕ぞら焦げつきし  
気の利いた狂歌頻りに欲るふくべ  
冬瓜のやうな雲出てお風入れ  
湯治場に里の柚餅子を持ち込んで  
葉鶏頭きよとんと村はもう日暮  
幕を引くごとく夕暮れ油点草  
曼珠沙華はや幽霊の面持ちに  
くわりん皆もぎたる夜ののつぱらぼう  
くわりんの実くびれ上手に隠しけり  
手を置けば女体の丸みくわりんの実  
腸の苦き秋刀魚の旬過ぎたり

早稲田中居候めく稗いっぽん  
焼きものには是あるかなの酸橘かな  
文面は至れり尽くせり柚味噌のこと  
糸瓜みな附句のごとく垂れ下り  
うちまじるもの一つ無き蕎麦畑

番外

わが好みの上着選り分け冬用意  
片陰を拾ひつゝゆく通院日  
大河内伝次郎くしゃみして冒頭  
俳諧の柁取明くる年の海  
常着にして見苦しからぬちゃんちゃんこ  
早咲きの故をことわる冬ざくら  
蜻蛉の翅焦さんと西日かな  
あめんぼのおとなしくなる跳び疲れ

秘湯行 鬼怒川 川俣温泉 女夫淵温泉  
八丁の湯 加仁湯 日光沢温泉

今市

葛紅葉して今市の杉並木

竜淵に潜む今市杉並木

日光は雀飛ぶ方権現晴れ

のつぺりと当世案山子流行らぬ田

蜻蛉の往きつ戻りつ墓地のそら

日光街道稲田の脇の鼠捕り

鳥威し所変はれば品変り

遠刈田ふんだんに日の溢れをり

今市のそらゆく蜻蛉権現晴れ

むんむんと稲の香立たせ刈田風

稲明りさし込む中や湯葉造り

鬼怒川温泉

温泉は近場がよろし黄落期

木片の揉まれ下れり出水川

一つづゝ岩の搔き暮れ出水川

湯の町の月に飽かなき女郎蜘蛛

秋嶺のなで肩にさす峡の月

秋出水あらがふ岩を組み伏せて

湯町の灯何はともあれ露けきよ

ふらと出づ湯町の射的屋火恋し

温泉場客着き頃のほうせんか

濁り川眼下にしたる紅葉宿

秋出水ぶち当たりたる岩襖

出水川何やら光り渡るは虫

岩風呂の岩の陰よりちちる虫

露天風呂やんまが湯の香嗅ぎにくる

岩風呂の岩黄味がかる黄落期

岩風呂の岩に手を置き秋の昼

廃館の湯宿すすきの花盛り

秋出水その上を蜻蛉すいすいと

やはらかき昼の湯を浴び竹の春

蚊帳吊草嗅ぎて湯の香を移しけり

川音や湯宿の手摺り夜露帯び

川音の飛び込んでくる紅葉宿

一昼夜流れて目減り出水川

磧の蛾夜長の宿の灯を取りに

旅泊てのここに幸あり夜長の湯

体脂肪抜かんと入りし長夜の湯

対岸に巖切り立てる紅葉の湯

ロープウェイ

山麓と温度差五度の早紅葉

団栗一つ供ふ湯神の御神体

長短の落木野分ありし山

青団栗野分のありし山の径

団栗の転がる道のもう日暮れ

赤松に直にさす日や秋日暮

団栗が温泉神社の鳥居打つ

赤松のわけても秋日当る幹

山頂駅鉄鎖に止まる秋あかね

草虱まだくつつ着かぬ穂の若し

上昇の蜻蛉頭を振りぐんと振り

蜻蛉の流さるる方鶏頂山

山頂駅ひよひよと鳴く草の虫

秋嶺の髪より湧きて赤とんぼ

蜻蛉も早や夕暮の翅遣ひ

上昇中蜻蛉のやや前傾ぎ

上昇中ケーブルカーに秋の蠅

奥鬼怒

奥鬼怒の岩を擦り抜け紅葉川

奥鬼怒の芒の呆と山暮れて

またぎ村蕎麦畑猫の額ほど

またぎ村朝日蜘蛛の囲金に染め

登音を頼みの山路とりかぶと

赤のまま昔の旅は草鞋にて

ぱつとせぬ紅葉渉して山連なり

鈍（なま）りゐる脚鍛えんと紅葉山

序の口の紅葉といふも一風情  
序の口の山の錦といふべかり  
もみづれる山の快拳と申すべき

山深く入り会心の谿紅葉

履物のとり散らかつて紅葉宿

あららぎの泰然栃の自若の秋

拾得の装いで来て菌狩

草紅葉心に留む日々愉しきよ

紅葉且つ散りて溪流走らす

誰か云ふ冥途の土産の紅葉狩り

村営バス揺るたび熊除け鈴鳴れり

早紅葉栃か点在したりけり

向ひ嶺に紅葉点在またぎ村

紅葉狩中に釣竿持てるひと

夕紅葉山路登音絶えにけり

紅葉狩り天気何とか持ち直し

分け入りて芒の彼方落人村

秋寂びて川筋のこる白磧

秋風に川筋のこる暴れ川

葛の蔓づるづる民宿平家館

峯嵐宿の紅葉を吹き絞る

ななかまど程の肌いろ岩湯出て

秋冷の青葉一片山の湯に

栗茸は売切れ滑子三籠ほど

山深くもみづるものの一変す

谿隔つ前山を見て山装う

秋澄みて一連なりの山のいろ

毒茸と断定するにまだ気弱

朝露のここだく降りぬ蕎麦ぼっち

蕎麦刈つて山間の景展げけり

山間の村々蕎麦刈日和とも

村営バス朝刊下ろす露の村

平家塚芒明りの径をゆく

落人の落ちゆく姿芒谷

山に入る一番バスや朝寒し

栃黄葉山の夕暮れ早めけり

川俣温泉

落人の棲みつく雑木紅葉谿

曼珠沙華むらさき帯びて滅の時

歳時記に茸連なる茸どき

けむり茸そんな器用に生え居らぬ

こんな商ひせる人も

天然ものと云ふも真つ赤な嘘きのこ

茸いろいろ雑木林の中に生ふ

奥山はさすがや雑木紅葉して

ここらまで平家落ち来ぬ鳥兜

採り頃の滑子ぞくぞく檜林

橡の実を呼び水にして橡餅売る

岩襖鎧ひて紅葉襖かな

松茸のそろそろ出頃またぎ村

茸どき宿より出せる宅急便

人形に自然薯黄葉落人村

落人村蕎麦刈り済んで蕎麦ぼっち

またぎ村蕎麦喰う雀群れなして

もみづる中半分木造校舎かな

栃黄葉又栃黄葉川俣村

栃黄葉山の日差しが貫けり

女夫淵温泉

攀ず人の間合よろしき紅葉狩り

取敢へず終点で降り紅葉狩り

もみづれるもつと奥嶺に入る旅

買ひ足してその名もだしといふ茸

出つくわす野猿は振り向かざるままに

くりくりの桂黄葉の円葉かな

八丁の湯

紅葉どき湯壺に白き五體かな

紅葉狩り序でに山の湯も浴びて

露天湯の上をくる蜻蛉にでつくわす

露天湯に人居ぬ時間蜻蛉来

漆紅葉玄関飾る宿に着く

泊り客先づは一瞥錦木を  
装う山松ありてこそ紅葉かな  
小流れをなせる捨て湯や赤のまま  
野葡萄は甲乙丙の柄紅葉  
湯中りして糸瓜漢のごろ寝かな  
痛快に黄葉降れるや湯壺の上  
黄落や湯壺に伸ばす五體透け  
湯壺の上一枝紅葉のはじまれり  
消化器が廊下の隅に紅葉宿  
野猿飛ぶ山里なれば茸蕎麦  
湯ぼてりの五體ありあり照黄葉  
初黄葉愛想笑ひに何處か似て  
混浴や稍寒湯壺に素首立て  
朝寒の混浴女（をみな）向うむき  
湯壺へ颯と紅葉風といふべかり  
混浴の湯壺一瞥うそ寒し  
湯疲れの眼遊ばせ一位の実  
湯疲れをせしやと宿のかがんぼ来  
白鼻心（はくびしん）飼はれ紅葉の一軒宿  
ロツジ風湯宿丸太ももみづるか  
二坪の湯壺や滝を横に見て  
櫛紅葉十（とを）を数えて湯壺出づ  
紅葉より軽く岩湯に泛かびをり  
湯に浮ける我が身紅葉の軽さほど  
栃黄葉踏み来てたうたう湯宿に着く  
紅葉散る一つは遙か積まで  
紅葉の中青葉一枚交じる湯に  
紅葉激し一軒宿にたうたう着く  
櫛紅葉通り過ぐ人仰ぐ人  
紅葉経て来し風宿の廊亘る  
加仁湯  
団体さん今到着の紅葉宿  
湯ざめして又入る湯壺紅葉晴れ  
照葉して五體あられもなき岩湯  
湯疲れの足かつたるき草紅葉  
松のぼることたやすけれ葛紅葉  
鼻をつく硫気そここ草紅葉

栃黄葉ここぞと降りて縦斜  
ふらふらの出湯三昧照黄葉  
戻れば意気消沈の栃黄葉  
蜻蛉見て登仙の湯に長浸り  
露天湯のふぐりに差し込む秋日差し  
紅葉狩狸々いろのリュック負ひ  
四方の山もみづる中に加仁湯あり  
今正にもみづる加仁湯の掛け湯浴ぶ  
紅葉狩加仁湯でまた会ふ親子連れ  
混浴の女（をみな）に栄ゆる初紅葉  
混浴の女秋寂ぶ岩陰に  
湯に浮ける紅葉一片いとしかり  
いとけなき山の紅葉を湯壺より  
もみづれる山の湯を出で血色よき  
露天湯に散れる黄葉を朋として  
湯疲れの足ふはふはと蓼の道  
目礼して女行き過ぐ紅葉山  
登音を聞くこと稀にとりかぶと  
もみづる中蟹の如くに加仁湯出て  
脱衣籠えんまこおろぎ宿しけり  
一片の青葉泛く湯に浸かりをり  
日光澤温泉  
栃一本早紅葉して登山宿  
駈け足で赤松のぼる葛紅葉  
団栗の青きが打ちて真の音  
湯疲れがこんなところで蓼の道  
薄黄葉水はながれて還らざる  
微光生む水引草に仏の眼  
夜に入りて川床の鳴る紅葉宿  
紅葉酒いささか短気に生まれつき  
紅葉酒いのち粗末にせし月日  
紅葉酒側にいつもの妻がゐて  
自力はた他力本願葛紅葉  
早紅葉初紅葉とはちと違ふ  
一本のあたりをはらふ櫛紅葉  
櫛黄葉飄々と世を渡る人に  
とんとんと薪割り紅葉ちる日向

黄葉して日光沢といふところ  
強情を尽くしたる果臚紅葉  
たたなはる山移りつゝ初紅葉  
新刊を繙くやうにして黄葉  
紅葉冷えしんしん宿の掛けぶとん  
この谷の岩に合はせて紅葉川  
野葡萄の不粋紅葉も興のうち  
玄関にリュック山積み紅葉宿  
この沢を岐れて下る紅葉川  
栃黄葉残して暮れぬ一軒宿  
良寛の草書さながら色葉散る  
やがて閉づ登山口宿朴黄葉  
散るさまのさて忙しき樺黄葉  
沢に沿ひ一気に下る初紅葉  
旅ごころここに窮まる谿紅葉  
ななかまど内助の功に報ゆ旅  
山漆紅葉急なり滝の前  
滝水の白投げうって紅葉谿  
ななかまど程の温みを持つ出湯  
ななかまど燃えて湯疲れ何のその  
猿酒に登仙の酔ありつらん  
のうのと岩湯愉しむななかまど  
たかが古い黄葉ちる中湯を浴びて  
この谷の男時女時の紅葉かな  
くらやみに紅葉を蔵す向ひ山  
櫛紅葉湯宿一気に夕づきぬ  
紅葉狩り村営バス降りどんづまり  
岩湯出て心残りのななかまど  
夜を籠めて湯宿の前山もみづらん  
岩床に山水躍る紅葉谿  
ななかまどの一枝挿頭に露天風呂  
湯に浮かむ羽ある虫と一葉と  
峯紅葉吹き絞る風轟々と  
栃黄葉零す朝露浴びにけり  
一切がもみづる中や岩湯浴ぶ  
白樺をもみづる日光沢の風  
日光沢滝風に栃黄葉せり  
滝音に驚き黄葉したりけり  
天つ日に透けざるは無し沢黄葉

石拾ふ妻の愉しみ谷紅葉  
登山宿先代薪を割る日向  
もみづれる一軒宿の薪棚  
蒲団干す正面の山もみづれる  
黄葉して岩又岩の日光沢  
宿浴衣もみづる山に向ひ干す  
日光沢しぶける岩もみづらん  
栃落葉きりなき日光沢小径  
紅葉沢落石すんでのところなり  
神霊泉日光沢の湯に青葉  
先代の苦勞咄や薄紅葉  
露けしや引湯泉質二系統  
湯小屋あり白濁の湯に蛾の骸  
秋日中宿の先代薪割って  
朝寒の手拭い肩に一番湯  
いち早く色づく日光沢紅葉  
水しぶき巻上げ巻上げ紅葉川  
この辺り落石注意の紅葉山  
川床のうす水色に紅葉どき

#### 雑詠

長き夜の眼鏡外して文字確認  
黒ぶだう閻魔の舌となりにけり  
雄日芝はいつか芒になりたくて  
微風湧くなり朝顔の瑠璃の淵  
番外  
足型に三種類あり鳥雲に  
立秋の豆の葉黄ばみ初めにけり  
老梅をたうたうへし折る風颱風  
すべすべの肌艶にしてくわりんの実  
颱風の目に物見せぬ馬鹿力  
水道の雫切る音良夜なり  
國光てふ林檎まだまだ作られて  
まあなんて言おうかこの味むかご飯  
むかご飯一度食べたなら止められない  
草津



コンビニで零余子なんぞを買おうとは  
零余子の味ほかほか感がいちにて  
家に日が奥深く入る秋半ば